
機動戦士ガンダム SEED ～BlumenGarten～設定資料集

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム SEED ｾ Blumen Garten 設定資料集

【Nコード】

N4912J

【作者名】

後藤正人

【あらすじ】

GUNDAM SEED ｾ Blumen Garten の設定資料集というよりは設定紹介に近いものです。本作を読んでくださった方はふと忘れてしまった人物の確認や簡単な読み物に、まだお読みでない方には作品の空気を知ってもらうためや、やはりちょっとした読み物にどうぞ。話数が進むにつれ徐々に紹介文が変化します。特にキャラクター紹介は話数が進むたびに書き込みますので、ネタバレになる可能性もあります。ご了承ください。

人物設定（既存）（前書き）

人物設定では、名前があいうえお順に並んでいます。

名前右側は性別と、その人物が遺伝子調整されて生まれてきた場合はコーディネーター、そうでない場合はナチュラルと表示されます。

登場は、BlumenGarten中でその人物が登場した話が書かれています。登場の基準は、名前が登場すれば登場したものと扱っています。

機体はモバイル・スーツ、重戦闘機に搭乗経験がある場合に記載されます。

あとは簡単な説明です。

既存とオリジナルのキャラクターで分けることにしました。

人物設定（既存）

アーノルド・ノイマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

25

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

3, 6, 7, 9, 10, 13, 14, 17, 19, 21, 22,
25-27, 31-44, 47, 48, 49, 51, 52, 55,
56, 59, 60話

機体

TS-MA2・mod. 00メビウス・ゼロ

FX-550スカイグラスパー

FXet-565コスモグラスパー

切りそろえられた髪に、しっかりと着込まれた軍服。見るからに生真面目といった青年。

大西洋連邦軍曹長。新鋭艦であるアーク・エンジェルの操舵手を務める。厳格というよりは生真面目な軍人で、実績には乏しくとも確かな訓練の積み重ねで培われている。

艦内ではマリュー・ラミアス艦長に次ぐ立場であり、実質副艦長を兼任している。難民として戦争に巻き込まれた少年少女には同情的であり、親切丁寧な態度で接している。

操舵手の職務の他、作戦のためTS-MA2・mod. 00メビウス・ゼロに搭乗した際には負傷しながらも意外な才能を見せた。現在は戦闘機のパイロットへの転向を目指しムウ・ラ・フラガに師事をおおいでいる。同時に、フレイ・アルスターに操舵の手ほどきをするなど、多忙な様子である。

すでに実戦に参加するほどに上達は目覚しく、戦艦の操舵をしていた経験を生かし敵戦艦を撃沈する戦果を上げた。

生真面目な正確であることは衆目の一致するところであり、教え子であるフレイのことを人から誤解を招くほど気にかけている。そのため、徐々にフレイが孤立しつつあることに心を痛めている。

普段丁寧な物腰で決して感情に振り回される人間ではないが、怒るべき時には躊躇しないなど、人として健全な精神の持ち主である。フレイが友人であるアイリス・インディアと和解したことでその肩の荷も降りたようで、フレイと一緒にいる姿がよく見られる。しかし、とにかく鈍く、フレイをやきもきとさせている。そんな2人であったが、フレイが自ら進んで告白したことで接近を果たす。ただし、あくまでもアーノルド・ノイマンはアーノルド・ノイマンであり、劇的な進展を見ることはなかった。

最終決戦ではMのヴァーリであるミルラ・マイクを相手に善戦するも機体を中破させられ撤退している。

キラ・ヤマトとゼフィランサス・ズールの結婚式にも出席し、すでにフレイの尻に敷かれている姿が目撃されている。

アイザック・マウ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

MSV

男性

15

コ

1ディネーター プラント

登場

39, 45, 46, 53話

機体

ホバートラック

特徴のない背格好に、際立った髪型でもないため、隊長であるイ

ザーク・ジュールからは優柔不断な性格の表れのように評されている。

小型とは言え、索敵から管制までを担当するホバートラックを1人で扱っている。その点からだけでも有能さはいかがい知れるのだが、気弱な態度が隊内で存在を目立たないものになっている。シホ・ハーネンフースに対してほのかな恋心を抱いているようだが、まだ子どもとして見られていない。

乗っ取られたシャトルの中で、単身その状況を打開しようと試みた。だがその結果は、アイザックが恋心を抱いていたシホ・ハーネンフースに胸を打ち抜かれるという悲劇的なものであった。アイザックの活躍でシャトルの主導権は取り戻せたものの、結局シャトルは撃沈され、アイザックは運命を共にしている。

アイシャ

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

女性

27

コーデ

イネーター プラント

登場

45，46話

機体

AMF-101デイン

伸ばした黒髪の一部を橙色に染めていることから、おしゃれに気を使う女性であると思われる。

ジブラルタル基地に所属しているモビル・スーツ・パイロット。決して多くを語らなかったが、プラント本国に残してきた人がいるらしく、出撃を前に手紙をアイザック・マウへと託した。敗北がほぼ決定的になった際にはガンダムを宇宙へと上げるため、その命を

かけて道を開いた。

アイリーン・カナーバ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

39

コーデ

イネーター プラント

登場

17, 39, 49, 60話

髪にウェーブをかけた知的な女性。穏健派No. 2のポジションにある。

プラント最高評議会穏健派議員。穏健派では議長に次ぐ影響力を有している。絶えず急進派の勢いを削ぐようと機会をうかがっている。しかし、急進派代表パトリック・ザラを相手には力不足が否めない。

ラウ・ル・クルーゼの無理な作戦行動によって民間コロニー・ヘリオポリスが崩壊したことへの責任を追求するも、ラウの功績そのものが重視され不発に終わっている。

穏健派代表シーゲル・クラインの側近である。ヤキン・ドゥーエ攻防戦後、死亡したシーゲル・クラインに変わり暫定政権の議長となる。地球連合との間にユニウス・セブン条約を結んだ。

アサギ・コードウエル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

23

ナチュ

ラル オーブ首長国

登場

42, 44, 48, 49, 55, 58, 60話

癖のある金髪をした女性であり、その要望はリーダー格を思わせるものであるらしい。

かつてはダニロフ級イージス艦にブリッジ・クルーとして乗艦していたが、アラスカを脱出する際に艦が大破したことにより廃船が決定、アーク・エンジェルのカルーに配属された。

普段はしっかり者だが、酒に吞まれるところがあるらしい。

結婚式会場にも姿を見せ、花嫁のブーケ争奪戦に参加。ヒメノカリスのコーディネーターとしての圧倒的戦闘力に敗退し、悔し涙を飲んでいる。

アスラン・ザラ

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

コーデ

イネーター プラント

登場

3-7, 9, 12, 14-21, 23, 25-30, 33-37, 43, 45-51, 53-55, 57, 59, 60話

機体

ZGMF-1017ジン

GAT-X103バスターガンダム

ZGMF-X10Aフリーダムガンダム

若さの割に、冷静で力強い眼差しを持つ少年。その心意気を反映してか、端正な顔つきをしている。

ザフト軍のパイロット。技能、判断力どれをとっても優れた能力

を發揮し、臨機応変にバスターガンダムを奪取してみせた。しかし、それ故に、時には犠牲をいとわない厳しさが前にでることもある。

ガンダムの開発者であるゼフィランサス・ズールのことを知っており、多くを語りたがらないが、彼女たちの素性を知る1人。

キラ・ヤマトとは因縁があり、彼との予期せぬ再会には驚きを隠さなかった。しかし、その因縁がどのようなものであるのか明らかではなく、謎が多い。

母国であるプラントのための戦いをしていたが、敵であるモーガン・シュバリエと意外な出会いをしたことでその価値観に若干の変化が生じている。戦友であり友人であるニコル・アマルフィを亡くしたこともあり、その戦う意義と目的を掴みかねている。

しかし、戦いの行く末と、自身にできることを把握し始めており、その決意は固まり始めている。

ユニウス・セブンでは血のバレンタイン事件を体験し、その際、母になるはずであった女性、レノア・ザラを失っている。

ジェネシスによって地球が脅かされる中、ザフトとして戦いながら、ザフトとして戦うことに苦悩していた。戦えば戦うだけ地球を危険にさらし、しかしザフトを抜けることもできない。苦悩するアスランが出した答えは、ムウ・ラ・フラガに後のことを託し、それでいて過剰な戦力を奪い去るというものであった。

結婚式にも参列し、仲間の結婚を祝った。しかし、参列することなく影ながら見守っていたラクス姿に、今後のダムゼルの行く末と再び始まる戦いを予感せざるをえなかった。

ラクス・クラインとは許婚の間柄である。

プラント最高評議会副議長パトリック・ザラの息子。

アフメド

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED	男性	23	ナチュ
ラル	ユーラシア連邦		
登場			

21, 22, 25, 26話

機体

TMF/S-3ジンオーカー

ムウ・ラ・フラガからはいかにも若造という言葉の似合う若者と評された。

モーガン・シュバリエ率いるキンバレー基地に所属するモビル・スーツ・パイロット。だが、5名入るパイロットの中でも一番の若輩であり、訓練では搭乗わずか1週間のアイリス・インディアに土をつけられた。

キンバライト基地で数少ないモビル・スーツ・パイロットとして戦線の維持に尽力していた。だが、ザフト軍が新型モビル・スーツTMF/A-802バクウを投入したことで戦況は一変。バクウの初陣を飾る最初の犠牲者になってしまった。

アリー・カシム

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

38

コーデ

イネーター プラント

登場

60話

プラント最高評議会議員。その名前は、アイリーン・カナーバ議員によって立ち上げられた暫定政権の中で副議長として記録されている。

アル・ジャイリー

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

不明

ナチュラ

ル

不明

登場

38話

キラ・ヤマトがゲリラに加わっていた際、世話になったとされる男性。しかし、判明していることはそれだけであり、この名前さえ本名であるか判明していない。

アル・ダ・フラガ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

41

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

54, 59, 60話

アズラエル財団に婿入りした男性。ムウ・ラ・フラガの父にして、ラウ・ル・クルーゼ、エインセル・ハンターのオリジナルでもある。優秀ながら狭量な人物であり、そのコンプレックスをばねに努力に励んだ人間であった。ところが、自己評価は極めて低く、自らの地位が脅かされることに怯えて回りの誰も信じる事ができなかった。その結果、プラントの研究施設に自らのクローンを作成させ、コイデイナーターとして誕生させた。その結果生まれたラウは遺伝子上

に疾患を抱えた失敗作であり、エインセルはより完璧なアルを体現した存在であった。ところが、アルはその後謎の死を遂げ、その成果を目にすることはできなかった。

なお、当時まだ7，8歳程度であったエインセル・ハンターが殺害に参与したものと思われる。

アンドリユー・バルトフェルド

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

30

コード

イネーター プラント

登場

19，21—23，25—30，33，37，39，43，45話

機体

TMF/A—803ラゴウ

ザフト軍のアフリカ地方を任せられる司令官ながら格好にしろ物腰にしる碎けた様子の男性。

砂漠の虎の異名を取るほどの猛将として知られている。その実力、実績は確かなものであるが、それゆえにガンダムの規格外の性能をすぐに受け入れることができなかった。

敵であるキラ・ヤマトに接触するなど非常にマイペースな性格であるためか、軍務よりも自身の興味を優先する行動を見せた。趣味はコーヒーマシンのブレンドである。

モビル・スーツ・パイロットとしての腕も確かなもので、伝説的技巧であるハウنز・オブ・ティンダロスを不完全ながら使いこなす。その実力はキラ・ヤマトを圧倒するも、戦いの最中によりハンズ・オブ・ティンダロスを完成させたキラに結果として敗れている。しかし、その実力はキラという戦士を大いに成長させた。乗機

を破壊されつつも副パイロットを務めていたカルミア・キロを庇い、戦死している。

イザーク・ジュール

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

コーデ

イネーター プラント

登場

33, 39, 43, 45-51, 53, 54, 57-60話

機体

ZGMF-1017ジン

ZGMF-X09Aジャスティスガンダム

若いながらも勇猛な隊長であるが、まだその顔にはあどけなさを残す少年である。

アスラン・ザラとは友人関係にあるとともに好敵手の間柄であるように、軍学校では首席を争ったことがあるらしい。

ジブラルタル基地北方地区にて、モビル・スーツ小隊を率いている。その能力、指揮、ある種の人望は非常に高く、友軍が撤退を繰り返すこの地区での戦闘を続けていた。

親の七光りと言われることを恐れ、家を出た経歴を持つ。しかし、その能力は確かな実力に裏打ちされたものであり、与えたジャスティスガンダムを簡単に乗りこなしてみせた。

ただし、直情的なところがあり、実直な戦士である反面、部下の裏切りに気づけないなど策略家としては未熟な面が見受けられる。結果として部下を1度に失ってしまった。

その後、部下2人とはボアズ戦にて敵味方として再会を果たす。死闘の末、2人に勝利するが、それは結局埋まらぬ溝を露にしただ

けであり、2人は戦死し、イザークもまた機体は大破させるともに行方知れずとなっている。

大西洋連邦軍イズモ級クサナギに収容されていたことが判明している。ゼフィランサスよりジェネシスの存在を聞かされ、修復を終えていないジャステイスで戦場へと舞い戻った。その後、母であるエザリア・ジュールと再会し、決意を新たにジェネシスを目指すこととなった。

無事ゼフィランサスを送り届けた後コートニー・ヒエロニムスと交戦。機体の状態が劣悪であるにもかかわらず互角の戦いを見せた。その後、ゼフィランサスの結婚式に参列。ガンダムという奇想天外な兵器に毒され、すっかり常識というものを疑ってかかる人間になってしまっていた。

ヴィア・ヒビキ

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

女性

30

ナチュ

ラル

不明

登場

60話

エインセル・ハンターの主治医として不妊治療にあたった女性。ただし、それは機能の問題ではなく、ドミナントとして作られてしまったが故の遺伝子型の特殊性からくるものであると看破したまではよかったが、治療法を示すことはできなかった。ユーレン・ヒビキという夫がいる。

ウィリアム・サザーランド

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

64

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

40, 41話

齢をとったという言葉よりも老いたという言葉が似合う男性。枯れ木のような印象を与える。

大西洋連邦軍大將にして穩健派筆頭。しかし、かつての精悍さは見られず、急進派の勢いを抑えられずにいる。

アラスカ、ジョシユアにて急進派がサイクロプスなる大量破壊兵器によって穩健派ともどもザフト軍を葬り去ろうとした際には戦線離脱を禁じ、多くの兵を危険に晒した。結果としてデュエイン・ハルバートン少將によって撤退命令が出されたものの、この際、急進派に寝返った裏切り者であることを看破される。

急進派に寝返った動機は孫娘を失ったことに一因があり、そのことをブルー・コスモス代表の1人であるエインセル・ハンターに語ると、部下を死地に追い込んだ責任を自らとる形で拳銃自殺を遂げている。

ウズミ・ナラ・アスハ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

56

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

16, 23, 33, 35, 42, 44, 49, 59話

オーブの代表を務める男性。ただし、ヘリオポリス崩壊の責任をとり、辞任した。かつてはオーブの獅子と呼ばれるほどの指導者であったが、現在その実権を失っている。そのことを自覚しており、自らを揶揄するほどである。

エインセル・ハンターとの交渉に臨むが、エインセルは一切の交渉の余地を与えず決裂している。

オーブが降伏した際には自ら敗北の責任をとるつもりであったが、大西洋連邦にマストドライバーを渡すわけにはいかないプラントの破壊工作に巻き込まれる形で命を落としたものと思われる。だが、ウズミは最後まで民を思う為政者であり、そして、2人の娘の父であり続けた。

カガリ・ユラ・アスハ、エピメディウム・エコーの父親。

エザリア・ジュール

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

女性

36

コーデ

イネーター

プラント

登場

39, 43, 46, 58話

プラント最高評議会議員であり、パトリック・ザラ議員の懐刀を務める女傑。

パトリック・ザラが議長に選出されたことで、その発言力は徐々に高まりを見せている。しかし、家出した息子を気遣う母親であることに変わりなく、イザークの行動を消極的ながらも支持している。イザーク・ジュール小隊長の母親である。

エリカ・シモンズ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

30

コーデ

イネーター
オーブ首長国

登場

43, 47話

モルゲンレーテ社に所属するテスト・パイロット。テスト・パイロットとは言え、実戦経験に乏しいオーブではパイロットとしての実力は高いものであるとされている。

エル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

8

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

41話

故人。ウィリアム・サザーランド大将の孫である。どのような経緯で死亡したのかは明らかでないが、コーディネーターが関わった事案で命を落としたものと思われる。祖父であるサザーランドは孫娘の死を期に急進派との極秘に接触を開始することとなった。

オーソン・ホワイト

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED 男性 43 コーデ
イネーター プラント
登場

28, 29話

プラント最高評議会議員。比較的急進派よりの穏健派として知られている。だが、そのことよりもニュートロン・ジャマーの開発責任者としてその名前は知られている。核によって20万もの命が奪われたことを悲しみ、核分裂を抑制するニュートロン・ジャマーを開発し、地球降下の全指揮を担った。

オルガ・サブナック

原作 性別 年齢 人種

所属

機動戦士ガンダムSEED 男性 16 ナチュ

ラル 大西洋連邦

登場

55話

ブーステッドマンの1人。ニーレンベルギア・ノベンバーが確認した死亡者リストにその名前が見られる。

オロール

原作 性別 年齢 人種

所属

機動戦士ガンダムSEED 男性 18 コーデ

イネーター プラント

登場

5, 6話

機体

ZGMF-1017ジン

ザフト軍所属のモビル・スーツ・パイロット。

ミゲル・アイマンが部隊長を務める部隊でバズーカを好んで使用する。ガンダムの脅威に最初にさらされたのがアイマン隊であり、イージスガンダムの一撃を受け乗機と運命を共にしている。

カガリ・ユラ・アスハ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

15

コード

イネーター オーブ首長国

登場

16, 23, 32-35, 37, 42, 44, 47-50, 52-56, 58-60話

機体

GAT-X303イージスガンダム

GAT-X303Aロッソイージスガンダム

おしゃれとは無縁の性分から美しいと呼ばれるより、りりしいと形容される少女。

自ら行動することを好み、イージスガンダムを持ち出した。デンドロビウム・デルタと対立しているらしいが、その目的や動機は明らかではない。

イージスに搭乗し、3度に渡って戦闘に介入した。その目的はブルー・コスモス代表ムルタ・アズラエルを狙ったものとされているが、はっきりとはしていない。その理由の一端は、極めて高い行動

力を持つが故に回りに次の挙動を一切読ませないことにある。

行動派の武人肌であり、自らモビル・スーツに乗り戦場へ繰り出すことはあるが、政治的な駆け引きはあまり得意ではないらしい。オーブに侵攻した大西洋連邦を恨んでおり、指揮をとるムルタ・アズラエルを追っている。

ヤキン・ドゥーエの戦闘ではムルタ・アズラエルの1人、ラウ・ル・クルーゼを追い詰めるものの、ジェネシスの事実を掴んでいたことを聞かされ、動揺する。その後の決断は早く、祖国であるオーブを守るため、ムルタ・アズラエルに協力する形でジェネシス破壊へ向かった。

施設を破壊し、ジェネシスの破壊に貢献するも、内部に取り残される危険に陥った。それをロツソに搭載されていたアリスによって救われ、事なきを得ている。

結婚式では、技術上の兄であるラウ・ル・クルーゼにオーブの主権回復をねだっていた。

ウズミ・ナラ・アスハの娘。

カズイ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

不明

不明

大西洋連邦

登場

28, 29, 39, 45, 49, 51, 52, 55, 56, 58,

60話

機体

GAT-X1022ブルデュエルガンダム

顔中に包帯を巻いており、その人相を知ることができない。

大西洋連邦軍が先行投入したモビル・スーツ部隊に参加するパイロットである。少年といって差し支えない年齢であると思われるが、その言動は不自然に幼い。特にニーレンベルギア・ノベンバーを相手にした場合はまるで子どものような態度をとる。

キラ・ヤマトの名前を聞くなり強い反応を示した。そのことがさらに精神の不安定さに拍車をかけたが、結果として、カズイの本来の名前はサイ・アーガイルであるらしいことが判明した。

カズイ・バスカーク

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

2, 3, 5—12, 19, 27, 30, 32, 48, 52, 56,
58話

顔にはそばかすがあり、口数は決して多くはない、いわゆる普通の少年。

オーブ首長国の学生。戦争に巻き込まれても普段の調子を崩すことはなかった。口数は少ないが、その反面少ない言葉で事態を的確にとらえる話し方をする。

また、友達思いの一面も見せた。

友人であるキラ・ヤマトの思いの人ゼフィランサス・ズールを救おうとして、限りなく死に近い行方不明となってしまった。

カナード・パルス

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED X ASTRAY 男性 18

ナチュラル 大西洋連邦

登場

39, 45, 46, 51-53話

機体

ZGMF-1017ジン

GAT-X105EストライクガンダムE

黒髪を無造作に伸ばした少年。隊長であるイザーク・ジュールが自分よりも若いためか、年齢以上に落ち着いた雰囲気を持っている。イザーク・ジュールが隊長を務めるモビル・スーツ小隊の隊員。敵から奪ったシールドを用い、機体へのダメージを最小限に抑えるなど、その戦術にはしたたかさを見せる。同じ部隊のシホ・ハーネンフースとは専用の回線で話をすることもあるようだが、男女の中であるようには思われない。

実は、シホとは共にザフトを裏切ると決めた内通者同士であり、件の回線もそのためのものと思われる。大西洋連邦からはその見返りとして、ガンダムが与えられた。

ザフト軍では赤服を着ることが許されるほど優秀な戦士であったが、実は遺伝子調整を受けてはならずナチュラルに分類される。その理由は家が貧しく、遺伝子調整にかける資金を捻出できなかったためである。プラントにはこのような潜在ナチュラルの存在は数多く、その多くが貧困に喘いでいる。カナードのように能力を示すことができたナチュラルは名誉コーディネーター、オナラブル・コーディネーターなどと呼ばれ蔑まれてきた。カナードが祖国を裏切った背景にはプラントのこのような歪んだコーディネーター至上主義が関係しているものと思われる。

ボアズ戦において大西洋連邦軍としてガンダムに搭乗した。かつての上官にあたるイザーク・ジュールと死闘を演じ、イザークを庇

う形で核の炎の中に消えた。

カリダ・ヤマト

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

36

不明

オーブ首長国

登場

60話

キラ・ヤマトの母親として登録されている女性。キラがヘリオポリスに忍び込む際に偽造した戸籍上の母親であり、実在はしていないものと思われる。

キラ・ヤマト

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

コード

イネーター オーブ首長国

登場

2-15, 17-23, 25-44, 47-56, 58-60話

機体

GAT-X105ストライクガンダム

ZZ-X000Aガンダムオーベルテュール

整った顔立ちながら、気弱な態度がそれを隠している。しかし、戦闘時には激しい一面を見せることがある。

オーブ首長国の学生であるはずが、モビル・スーツの操縦もこな

す謎の少年。ガンダムの製作者ゼフィランサス・ズールと面識があり、彼女のことを探し続けていたと証言している。

ゼフィランサスのことが最優先であり、時には友人さえ見捨てた。優れた操縦技術を持ちながらも、ラウ・ル・クルーゼに敗北。ゼフィランサスを奪われてしまうという失態を演じ、なりふり構わない力への渴望が芽生え始めている。

戦場という環境に慣れた一面が目立ち始めているが、これはキラ自身が己の素性をさらすことに無頓着になりつつあることの現れであらう。

力を持つあまり、周りを信用できないあまり排他的な戦い方をしていた。それをカルミア・キロに指摘され、自分の心を見直すことによって新たな境地に達し、より大きな力を得るに至った。それは同時に彼自身に心の余裕を与えることとなり、周りの人と積極的に触れ合おうと試み始めている。

よくも悪くもその行動理念の中心にはゼフィランサスの存在があり、その理由はゼフィランサスへの恋心ばかりではなく、かつてゼフィランサスの姉であるユツカ・スプシロンを見殺しにしたことにあるとも考えられる。

ある種の誤解からゼフィランサスとすれ違っていたが、互いの過去を話し合うことで和解を果たした。

しかしキラ戦いはラタトスク社の製品であるガンダムの宣伝行為に他ならず、大西洋連邦内における急進派の台頭を招いた。その報酬として、エインセル・ハンターより新たな力を与えられた。

ゼフィランサスを守るためにシーゲル・クラインの命じるままエインセル・ハンターと戦い、勝ちを譲られる形で勝利を収めている。結果、ゼフィランサスをシーゲルの呪縛から解放することに成功し、結婚式はオーブのマルキオ導師の教会で執り行われた。

その際、恋敵とまではいけないプレア・レヴェリーに対して大人気ない嫉妬を見せた。それはそれだけ、ゼフィランサスに対する思いに真剣であることを意味し、永久の愛を誓った。

クロト・ブエル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

16

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

55話

ブーステッドマンの1人。ニーレンベルギア・ノベンバーが確認した死亡者リストにその名前が見られる。

ゲイル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

29

コーデ

イネーター プラント

登場

26話

機体

TMF/A-802バクウ

ダコスタ小隊のパイロット。ジェットストリーム・アタックでは3番手を務める。敵に最後の一撃を加える重要な役割をまっとうしていた。しかし、GAT-X105ストライクガンダムに技を破られ、機体を両断させられてしまった。

コートニー・ヒエロニムス

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

MSV

男性

24

コ

ーディネーター プラント

登場

23, 31, 32, 44, 50, 55, 59, 60話

機体

YMF-X999Aプロト・ザク

背広に身を包み、堅苦しい顔ながら、デンドロビウム・デルタ曰く人をからかうことが趣味というつかみ所のない人物である。

デンドロビウムの側近であるらしく、彼女のサポート役として明けの砂漠との会談に同席していた。デンドロビウムの行く先々で姿が見られる。

モビル・スーツ・パイロットとしても優れた能力を有し、損壊した状態であるとは言えZGMF-X09Aジャスティスガンダムと対等以上に渡り合っている。

戦いの後もデンドロビウムに付き従い、その観察眼を生かしては主をからかうことを生きがいとしているようである。

コープマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

41

ナチュ

ラル 大西洋連邦

登場

43話

無骨な顔つきをした軍人。大西洋連邦軍の中佐である。

スペングラ級航空母艦トバルカインの艦長を務めている。本人はブルー・コスモスのメンバーではないが、エインセル・ハンターに従うよう上官から厳命されており、正規の軍属とはいいがたいエインセルに不満を抱いていたようである。

コジロー・マードック

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

31

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

17, 24, 31, 36, 47, 53, 55, 59, 60話

無精髭を伸ばしたいかにも職人を思わせる中年男性。

整備の責任者であり、ゼフィランサス・ズールの指揮の下ストライクガンダムの整備に当たっていた。ただ、相当手を焼かされていたらしく、ゼフィランサスを意識した憔悴しきった言動が見られる。整備の総責任者であり、艦の上層部からの信頼は厚い。

ガンダムの整備を完全な形で行うなど優れた技術者ではあるが、軍という組織には必ずしも馴染んでおらず、どこか奔放な人柄である。

その正体はブルー・コスモスのメンバーであり、ガンダムの整備を担当するためにアーク・エンジェルに乗り込んでいた。核動力搭載機の整備さえしてのけるほどの腕前で、影の功労者であるといえる。プラントにまつわる出来事で妻を亡くしている。

それはナタル・バジルールにザフト軍を離反させるきっかけの1つとなり、飄々とした人柄はラウ・ル・クルーゼを苦笑させたほどである。

サイーブ・アシュマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

57

ナチュ

ラル

不明

登場

23, 32話

機体

TMF/A-3バクウ

豊かな髭が特徴的だが、砂漠では暑苦しいと思われる時がある。

アフリカにおいて戦前から地方を実効支配してきた地球連合への不満から結成されたゲリラ部隊、明けの砂漠のリーダー。デンドロビウム・デルタとの面識があることから、その潤沢な装備の背景にはプラントの影が見え隠れする。

所属は南アフリカ統一機構であるため、敵対国であるアフリカ共同体、及びその同盟国であった大西洋連邦に対してゲリラ行為を働いていた。それは代理戦争に利用されているだけと理解しながらも武器と資金の援助を受け活動を行っていた。しかし、所詮捨て駒に過ぎず、アーク・エンジェルを襲撃した際、乗機を撃墜され命を落としている。

サイ・アーガイル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

2, 3, 5-9, 11-13, 17-19, 27, 30, 32,
34, 38, 55, 56, 58, 60話

機体

G A T-X102デュエルガンダム

G A T-X1022ブルデュエルガンダム

眼鏡がトレード・マークの少年。仲間の間ではリーダー各であり、しっかりとした印象を受ける。

オーブ首長国の学生。戦争に巻き込まれ、何が出来るでもない。それでも仲間のことを思いやることのできる少年。カズイ・バスカークを見捨てたキラ・ヤマトを許すことのできる度量を持つ。

戦いに行くキラ・ヤマトのことを気遣いながらも何も出来ずにいた。フレイ・アルスターが軍に志願したことに付き合う形で入隊。パイロットに任命されてしまったアイリス・インディアの身代わりとしてG A T-X102デュエルに搭乗し、一応の戦果をあげるも、その活躍はあくまでまぐれにすぎず危ぶまれている。

アスラン・ザラの搭乗するG A T-X103バスターと交戦し、行方不明となった。

その後、ニーレンベルギア・ノベンバーに瀕死の重傷で漂っていたところを回収された。治療目的のためにブーステッドマンへの調整を受けたものの記憶、人相は完全に変わってしまったっており、パイロットとしてニーレンベルギアの手元に残された。

欠損した記憶にかすかに残されたカズイ・バスカークをキラ・ヤマトに見殺しにされたという事実からキラに戦いを挑む。しかし、サイという人間は、恨みを持ちながらもそれを受け入れようとする努力ができる人間であるというキラの考えからは現在のサイはあまりにバランスを欠いた存在であると断定され、結果機体を大破させられている。キラには、単なる恨みに突き動かされるサイをサイと

認めることができなかった。

結婚式会場で見られたその姿はまるで子どもであり、アイリスも素直に再会を喜ぶことはできなかった。しかし、そこに悲壮感はなく、別人ではあっても別人としてニーレンベルギアの庇護を受けている。

シーゲル・クライン

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

53

コード

イネーター プラント

登場

39-42, 45-60話

顔には皺が刻まれ、その顔は初老と言って差し支えない。しかし、そこから生気が抜けたようには感じられず、一国を率いてきた者の威厳は微塵も削げ落ちてはいない。

プラント最高評議会議長であったが、任期切れに伴いパトリック・ザラにその椅子を明け渡している。しかし、そのことに引け目を感じることはなく、最重要機密漏洩事件を引き合いに出し、パトリックを茶化すほどのしたたかさを見せた。

その政治手腕は豪腕にして冷徹。冷酷とも言える手段を躊躇いなく行うことができる。必要とあればニュートロン・ジャマーを地球に降下し、10億もの人命を奪った。また、ジェネシスを地球へと向けることを嬉々として待ち構えるほどである。

その性質は極度の人間不信と自己陶醉によって裏打ちされた矮小な人間像であり、自分を認めるものには甘い顔を見せる反面、自分を認めようとしないもの、理解できないものには敵意を露にした。

ゼフィランサス・ズールとサイサリス・パパによって守られてい

たものの、エインセル・ハンターの策略によって殺害されている。コーディネーターによる人類の未来を望むその思想と、人が人として世界を作っていくべきとするムルタ・アズラエルとの主張の違いは、最期まで歩み寄ることはなかった。

26人のヴァーリの中から選出された6人のダムゼルのお父様である。

ジェシカ

原作	性別	年齢	人種

所属

機動戦士ガンダムSEED	女性	33	ナチュ

ラル ユーラシア連邦

登場

22, 25話

機体

TMF/S-3 ジンオーカー

鹵獲機であるジンオーカーに搭乗する5名のパイロットの1人。指揮官であるモーガン・シュバリエの信頼は厚いようで、援護を任せられている。どうやらモーガンの無謀な戦い方には戸惑いを強く感じているらしい。

キンバライト基地の防衛に当たっていたが、防衛隊のモビル・スーツは全滅したため、おそらくは死亡したものだと思われる。

ジェラード・ガルシア

原作	性別	年齢	人種

所属

機動戦士ガンダムSEED	男性	61	ナチュ

ラル
ユーラシア連邦
登場

8話

完全にはげ上がった頭が特徴の軍人。辺境の指揮官として、良くも悪くも平均的な人物。

ユーラシア連邦の宇宙要塞アルテミス指揮官。あわよくばガンダムの技術を得ようと考えていたが、絶大な影響力を誇るエインセル・ハンターには意見することさえできないでいた。

ガンダムを欲しておきながらも、その力を過小に評価。GAT-X207ブリッツガンダムの急襲によってその命を落としている。

なお、作中に名前は描写されていない。

ジェレミー・マクスウェル

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

35

コーデ

イネーター

大西洋連邦

登場

40話

大西洋連邦軍の将校ではあるが、家督を継いだだけの男であり、デュエイン・ハルバートンからは若造と一蹴されている。

急進派に所属し、エインセル・ハンターの軍議参加を後押しするような姿勢を見せた。

シホ・ハーネンフース

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

17

コーデ

イネーター 大西洋連邦

登場

39, 45, 46, 51-53, 57話

機体

ZGMF-1017ジン

GAT-X105EストライクガンダムE

豊かな髪を絶えず気にかけている女性。ヘルメットを被らないのは、髪を気にしてのことではないかと隊長から疑われたことがある。イザーク・ジュール率いる小隊の隊員。機体の左腕を失うという失態を演じたが、その後、右腕だけでも戦えるという気概を見せるなど、パイロットとしての実力は決して低いものではない。

優秀な戦士であったが、その実大西洋連邦のスパイであった。同胞を売った理由は明白ではないが、プラントを滅ぼしたいという執念は怨念染みているほどと称されている。その理由はシホの生い立ちにあった。シホの父にはかつて恋焦がれた女性がおり、今の妻との間に宿った命にその女性の姿に似るよう遺伝子調整を施した。結果、シホは成長するにつれ父がかつて愛した女性の姿に近づき、父を苦悩させ、母を苛立たせた。男の未練に付き合わされる形で一生変えられぬ姿を押し付けられたことにシホは憤りを覚え、そのことがプラントに弓引く理由の一因になったと思われる。

ボアズにて上官であったイザーク・ジュールと戦い、機体を大破させられる。その後、イザークを逃がす形で機体を自爆させ、命を落とした。

ジャッキー・トノムラ

原作

性別

年齢

人種

所属	機動戦士ガンダムSEED	男性	24	ナチュ
ラル	大西洋連邦			
登場	13, 17, 55話			
機体	ミストラル			

アーノルド・ノイマンに比べるとどこか軽い印象であるとアイリス・インディアに評された青年。

大西洋連邦軍伍長。アーク・エンジェルのブリッジでは索敵を担当している。

懇親会ではアイリス・インディアのことが気になっているような言動があった。

作業用ポッドでブリッツガンダムを鹵獲する作戦において成功こそしたが、戦闘空域から脱出する際、敵モビル・スーツに撃墜され、命を落としている。

原作	シャニ・アンドラス	性別	年齢	人種
所属	機動戦士ガンダムSEED	男性	16	ナチュ
ラル	大西洋連邦			
登場	55話			

ブーステッドマンの1人。ニールンベルギア・ノベンバーが確認した死亡者リストにその名前が見られる。

ジャン・カルロ・マニアーニ
原作

性別
年齢
人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性
不明
コーディネイ

ネーター プラント

登場

35, 38, 60話

キラ・ヤマトが語った過去の出来事に名前が見られる。技術者であり、幼いゼフィランサス・ズールの能力と才能に理解を見せ、ダムゼルへ強力に推挙した人物でもある。ただし、それはゼフィランサスを思っていることであるとするよりも、自身の功績を認めさせるための一環でしかなかった。そのため、ゼフィランサスを救うためと称して、ゼフィランサスの姉であるユッカ・ヤンキーを犠牲にすることを厭わなかった。

モビル・スーツの開発者として名前を残しているが、それは正式な開発者であるヴァーリたちを世間から隠匿するための処置であった。

ジュリ・ウー・ニエン

原作

性別
年齢
人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性
22
ナチュ

ラル オーブ首長国

登場

42, 44, 48, 49, 52, 55, 56, 58, 60話

肩まで髪を伸ばし、眼鏡がトレード・マーク。

アーク・エンジェルに新たに配属された3人のクルーの1人。その切っ掛けは喫茶店に入っていたアーノルド・ノイマンに声をかけたというもので、その言動は特にフレイ・アルスターに警戒されている。とは言え、アーノルドは元々女性関係に疎く、またフレイとの関係を強めていたことよって断念を余儀なくされる。結果、酒にだらしない一面を晒した。

普段は朗らかで、厳格とは程遠い人間であるが、ヒメノカリス・ホテルの父への異常なまでの愛情には呆れ果てていた。

ジョージ・アルスター

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

44

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

8話

ヘリオポリスが襲撃された際、戦闘に巻き込まれたらしく、行方不明者リストに名前を連ねている。

フレイ・アルスターの父親。

ジョージ・グレン

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

61

コーデ

イネーター プラント

登場

1, 20, 24, 39, 47, 49, 50, 51, 53, 54,

58, 60話

ファースト・コーディネーターと呼ばれる存在。コーディネーターを広め、導く立場にあったが、それは同時に世界に新たな軋轢を生んでしまった。コーディネーターの国、プラント建国に尽力するもナチュラルとの溝を埋めることは出来なかった。

その結果として、血のバレンタインで命を落としている。その後、プラントにくらすコーディネーターの間ではある種神格化されており、国家理念を語る際に必ず上げられる名前である。

ユニウス・セブンの崩壊を引き起こした張本人であることが判明している。その物腰は穏やかながらまさにプラントのすべてを体現したようなしたかのような男性であった。最後はユニウス・セブンを脱出しようとしたところを若き日のムウ・ラ・フラガによって殺害されている。

ゼルマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

35

コーデ

イネーター

プラント

登場

22話

豊かな髭を生やした中年男性。

アンドリユー・バルトフェルドの下でレセップ級大型地上戦艦アンドレの艦長を努めている。責任感が強く指揮能力も高い人物である。しかし対峙したモーガン・シュバリエの無謀な戦法に出し抜かれ、ブリッジを破壊されてしまう。その際に死亡したものと思われる。

ダリダ・ローラハ・チャンドラ?世

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

24

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

32, 39, 41, 42, 55, 58, 60話

癖の強い髪。そして薄いサングラスが特徴。

アーク・エンジェルブリッジ・クルーの1人。

当初、操舵手を努めるアーノルド・ノイマンが実質的な副艦長を兼任していたためその活動が目立つことはなかった。しかし、アーノルドがパイロットへ転身するとともにフレイ・アルスターを巡る問題でマリュー・ラミアス艦長と対立。ダリダはアーノルドの穴を埋める形でマリューの補佐役に回ることとなった。

オーブにてクルーの補充が行われた際、ブリッジ・クルーがもの見事に女性ばかりになってしまった。そのことに気苦労を覚えていたが、残念ながらその苦労を共感してくれるクルーを見つけないとできなかった。

アーク・エンジェルで臨時とはいえ、最後の正規クルーであり、気苦労は絶えなかったようである。

タッド・エルスマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

50

コーデ

イネーター

プラント

登場

17, 47, 54, 59, 60話

男性ながら波立つ長い髪をした男性。厳格な雰囲気身を纏っている。

プラント最高評議会中道派議員。中道派に属する議員であることの責任感の強さゆえか、息子が行方不明になった際には決してことを荒立てようとはしなかった。

議会では中道派としての立場を意識して、目立ったことはしないと同時に穏健派、急進派、両派の間に立った行動を心がけている。

ディアッカ・エルスマンの父親であり、息子には甘い一面を見せることもあるようだ。

なかなか飄々とした人物であり、息子がヴァーリ、ドミナントを家に連れてきても驚く様子も見せず、さらに重大な情報を明かすなど議会で見せる表情ほどの堅苦しさはない。また、プラントの現状を客観的に見ることでできる人物であり、様々な思想の中立にいるような人物である。

プラントの中でも最高権力に近い位置にありながら、息子の友人の結婚式に個人として参列するなど、その言動はつかみどころがなかった。

ディアッカ・エルスマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

17

コード

イネーター プラント?

登場

4-7, 9, 12, 14, 16-20, 31-33, 36, 38
-44, 46-49, 51-60話

機体

G A T-X 207ブリッツガンダム

G A T-X 207 S Rネロブリッツガンダム

褐色の肌と皮肉じみた笑い方が特徴の少年。ただ、仲間の死に激昂するなど激情家の一面もある。

ザフト軍のモビル・スーツ・パイロット。戦闘中も冗談に皮肉を多用するため、一見軽薄な印象を与える。しかし、職務にはあくまでも忠実であり、周囲からは気取り屋と思われる。

ブリッツガンダムを奪取し、アルテミス陥落などの戦果をあげるもユニウス・セブンにてアーク・エンジェルの特捕となった。

本人は決してコーディネーター至上主義者ではないが、その反面偏った思想を嫌う傾向にある。そのことでフレイ・アルスターに強い反発を覚え、衝突してしまった。しかし、自分がフレイに対してとった行動もまた独りよがりなものであったとキラ・ヤマトによって気づかされた。

余談ではあるが、甘党でミルフィーユを好むらしい。

なお、ある一件からは何故か捕虜の身でありながら艦内を自由に歩き回ることを許されており、それには本人も信じられない様子である。さらに新型機まで与えられ、混乱は極みに達している。

ナチュラルとともに行動すること。また、プラントに使い捨てられる形で思いを寄せていたジャスミン・ジュリエッタを失ったこと。様々なことを経験することで価値観に変化が見られ、当初のような皮肉っぱさはなりをひそめ、理解ある好人物としての一面が台頭を始めている。

戦場にて様々な出会いを経験することで、主義としてコクピットを狙わない戦い方に固執している。その戦い方はあまりに馬鹿らしいとヒメノカリスには一笑に付されている。ヒメノカリスとの戦闘では命の危険を課してでもコクピットを狙わない戦いを続け、結果、機体は大破させられてしまった。

その後、ヒメノカリスによってヤキン・ドゥーエ内に運ばれ、治療を受けるも左腕を失うほどの重傷を負っていた。しかし、そのことを悔やむ様子はなく、不殺の戦いを貫いたわけを語っている。

結果、左目の視力を失い、左腕の欠損に加え、左足の運動機能も大きく傷ついた。軍を除隊すると表明しており、今後は、この戦争で得た経験を元に活動を続けるつもりであると表明している。

タッド・エルスマン議員の息子。

デュエイン・ハルバートン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

63

ナチュ

ラル 大西洋連邦

登場

16, 18-20, 40, 41, 47話

口髭を生やした初老の男性。白髪が混じっているが、それは威厳と表現されるような人物。

第8機動艦隊提督を務める大西洋連邦軍少将。穏健派の1人でもあり、マリュー・ラミアスらの直属の上官に当たる。ブルー・コスモスの反コーディネーター思想に蝕まれつつある大西洋連邦においては珍しくコーディネーターに対する反感は示していない。

穏健派が主導権を獲得するためにも、ガンダムは是が非でも必要と考えている。だが、同時にガンダムの危険性を目の当たりにし、戦争の先行きを危ぶむようになった。

しかし、ガンダムの性能と戦果は同時にラタトスク社の力を増す結果となり、急進派を抑えるという試みは失敗に終わっている。

囃として死地に立たされた友軍に対してそれが反逆行為であることもかまわず撤退を指示。その後自らは戦艦を全身させ、ザフト軍

の攻撃を集中させることで友軍の活路を開こうとした。

アラスカ基地地下に設置されたサイクロプスの照射範囲は極めて広く、またザフト軍の集中砲火を浴びる状況であったため、戦死は確実なものと考えられる。

トール・ケーニヒ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

2, 3, 5-9, 11-13, 17, 34-38話

どこにでもいそうで、それでも人を明るくするムードメーカー。オーブ首長国の学生。ミリアリア・ハウとは恋人の間柄である。本来は明るい性格だが、戦争という非現実に対応できないでいる。友の死という現実を前に、恋人ミリアリア・ハウとともに戦艦を降りる決断をした。

アーク・エンジェルが第8軌道艦隊と合流した際、艦に残る仲間とは違う道を選び、民間人としてオーブに帰ることを選択した。

その後、アーク・エンジェルがオーブへ寄港したことで、キラ・ヤマトたちと再会を果たした。しかし、オーブの港で発生した流れ弾が街を襲い、その混乱に巻き込まれてしまった。その際、死亡したらしいことが確認されている。

ナタル・バジルール

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

25

ナチュ

ラル
オーブ首長国

登場

2, 3, 5, 6, 8-13, 15, 17-19, 21, 22, 26, 27, 31-33, 36, 39-42, 44, 47-49, 52, 55, 56, 58-60話

軍服を律儀に着込み、軍帽を外さないなどしつかりとした女性。

大西洋連邦の軍人。技術士官であるとともに、アイリス・インディアの保護者を務めていた。比較的難民であるアイリスたちに近い立場にあり、難民と軍人の間を取り持とうと懇親会開催に協力したこともある。

ゼフィランサス・ズールがいなくなったことにより、モビル・スーツの整備責任者の地位を引き継ぐ。軍規に厳格な性格であり、そのことで周りと衝突が絶えない。戦果を優先しがちなマリュー・ラミアス艦長には食って掛かる事もある。だが、何より気疲れを招いているのは、戦果を気にしないモーガン・シュバリエ、キラ・ヤマトの両名とのやり取りであるようだ。

基本的に軍規に厳しい人ではあるが、それは反対に軍規にさえ背かなければ裁量権を認めているということであり、常識にとらわれない行動も多い。そのため、任務に厳格になりがちなマリュー・ラミアスと対立したこともあった。

アラスカ到着後は中尉に昇級し、アーク・エンジェル の暫定艦長を任せられる。そのことで、人の上に立つ者の苦勞を痛感し、マリューから胃薬を送られている。

ザフト軍に合流するも、地球を狙うことさえ辞さない作戦行動に苦悩する。かつての上司であるマリュー・ラミアスに説得される形で地球軍へと再度参加している。

しかし、あくまでも敵前逃亡を行った軍人に他ならない立場を意

識し、部下の扱いを気にかけていた。

ニコル・アマルフィ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

コード

イネーター プラント

登場

3ー7, 9, 10, 14, 16, 17, 19, 21, 23ー30,
35, 37, 42, 43, 45, 46, 53, 58, 60話

機体

ZGMF-1017ジン

GAT-X207ブリッツガンダム

まだあどけなささえ残る心優しい少年。髪質の柔らかさがその性格を象徴しているようである。

ザフト軍のモビル・スーツ・パイロット。際だった戦果をこそないが、周りを気遣う戦い方をする。人間関係においても人を考えた言動ができ、所属部隊にとってなくてはならない人物である。

本来争いを好まない優しい性格であるが、国防委員でありながら穏健派に属する父の立場向上のために軍人となった。真面目ながら意外と融通もきくことがアンドリュー・バルトフェルド宅で判明した。

ガンダムの性能を目の当たりに続けた1人として、その力に恐怖を感じ始めている。特に搭載されているシステム、アリスに対する警戒は度を越しているように思われる。その心の不安定をつかれてかアリスを暴走させてしまった。

その最期は仲間を逃がすために戦地に残り、大西洋連邦の新型ガンダムに撃墜されるという壮絶なもので、その死は多くの人の心に

暗い影を残した。その最たる例が、父であるユーリ・アマルフィがその悲しみのあまり、核の封印を解いたことである。

その名前はニュートロン・ジャマーを無効化する装置の名前に刻まれている。

ユーリ・アマルフィ議員の息子。

パーネル・ジェネック

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

39

コーデ

イネーター

プラント

登場

57話

いかつい顔をした男性である。

ザフト軍に所属し、ヤキン・ドゥーエを守備する部隊の隊長を務めていた。戦力の半数を失いながらもまるで戦意を失わない地球軍相手に全力を傾けるも、わが身を省みない敵の捨て身の攻撃によって部隊を壊滅させられている。結果として、ヤキン・ドゥーエの防衛線に穴を開けてしまった。

ハダト

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

15

コーデ

イネーター

プラント

登場

57話

ザフト軍の若き部隊長。戦争が長引いていることによって軍学校を短縮期間で卒業した若者である。プラントは戦意高揚のため、徐々にコーディネーター優性思想に先鋭化しており、その教育を受けたハダトは偏った思想に固まってしまっている。その結果、相手を見くびり、無能と誇ったナチュラルによって戦死させられている。

パトリック・ザラ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

48

コーデ

イナーター プラント

登場

12, 17, 18, 21, 24, 29, 39, 40, 43, 47,
49, 50, 57-60話

彫りの深い顔つきからいかめしいとも威厳があるともされる男性。国防委員長とプラント最高評議会副議長を兼任している。また、急進派代表を務める。ナチュラルとの徹底抗戦を訴え続けており、急進派優勢の現在、プラントは戦争擁護に傾きつつある。

無理な戦闘によって民間人に死傷者を出したラウ・ル・クルーゼを弁護し、ガンダム開発者であるゼフィランサス・ズールを取り込むなど、有能な人材を手元に集めている。国民に戦争負担を隠しながら戦意を煽るなど、名実共に急進派の代表である。

政治家としては有能な人物であるが、父親としては息子であるアスランにまるで興味を示さないなど優れた父であるとは言えない。

新たにプラント最高評議会代表に選出され、プラントはより強硬な手段に出始めることとなる。

しかし、その行動もすべてシーゲル・クラインの掌で動いていた

だけであり、ヤキン・ドゥーエにて指揮を執っていたところをクライン派に急襲される。指揮権の混乱によって生じた戦闘を利用し逃げ出すことに成功するも、要塞から脱出を試みる際、ラウ・ル・クルーゼによって殺害された。
アスラン・ザラの父親。

ハルマ・ヤマト

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

36

不明

オーブ首長国

登場

60話

戸籍上のキラ・ヤマトの父親。ただし、それは偽造されたものであり、実在は証明されていない。

ビダルフ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

40

コーデ

イネーター プラント

登場

52話

ザフト軍ボアズにて指揮官の地位にある男性。細目である。
ラクス・クラインに指揮を任せており、その実力を認めている。
それは傷病兵、新兵、障害者など兵士としての価値の低い者を囿と

するような非道な作戦であったが、ビダルフはプラントのコーディネーターの平均的な発想として、その成果を讃えるばかりであった。ボアズが陥落した際、運命を共にしているものと考えられる。

プレア・レヴェリー

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED X ASTRAY 男性

10

コーディネーター プラント

登場

24, 29, 32-38, 42, 48, 58, 60話

機体

YMF-X000Aドレッドノートガンダム

まだまだあどけない少年。サイズの大きな白衣を着ている。

わずか10歳にしてモビル・スーツ開発に携わる少年。上司に当たるサイサリス・パパが言うには、変に歳をとっていないため素直で聞き分けがよいとのこと。同時に、何らかの疾病を抱えているらしく、長くはないと告げられている。

ゼフィランサス・ズールの下でザフト軍新型機の開発に当たっていたが、この研究成果を持ち出し、プラント公安組織グツフルファクスより指名手配を受けている。

オーブへと逃亡した。それを追ってゼフィランサスがオーブを訪れた際には、自ら進んでその姿を現した。研究成果であるYMF-X000Aドレッドノートガンダムを持ち出したことについて、プレアはその理由を明確に明かしていない。キラ・ヤマトに決闘を挑むなど、その行動を常軌を逸し始めている。

ドレッドノートに搭乗し、キラと決闘をするも、その行動はどこか死に急いでいる節があり、キラに勝利を譲る形で命を落としている。

る。
その名前はニュートロン・ジャマーを無効化する装置の名前に刻まれている。

フレイ・アルスター

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

15

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

2, 3, 5, 6, 8-13, 17-19, 21, 25-27, 30-42, 44, 47-51, 54-56, 58-60話

いつもおしゃれに気を使う赤い髪の少女。小物にいたるまで気を使うことでも知られている。

オーブの市民。だが暮らしていたヘリオポリスがザフトの襲撃に遭い、両親を失ったことで境遇が一変してしまう。友達と距離を置き、大西洋連邦軍に志願するなどの行為で周りに心配されている。

両親を失い、復讐することもその相手も定められないまま、フレイはエインセル・ハンターより渡された銃を懐に隠し持っている。周りはそのことを知りながら、何もできないでいる。

偶然アーク・エンジェルのか舵をとったことから操舵手としての訓練を受け始めた。なかなか優秀なようで、彼女が大使を飛ばす日も決して遠くは無いことだろう。ただ、教官であるアーノルド・ノイマンの丁寧すぎる対応には戸惑いも感じているようだ。

両親を失い、友人を立て続けに失った衝撃からまだ立ち直りきれないでいる。そんな折にディアッカ・エルスマンにそれは身勝手と酷評され、より深刻に心を病んでしまった。

自身を客観的に見られる人物であり、そのことが逆に自分の暗部

ばかりに目をやって周囲へ壁を作っていた。しかし、友人であるアイリス・インディアが窮地に立たされると、友への思いを素直に表現できるようになる。それを切っ掛けとして、両親の死を引きずるではなく、向き合うことができるようになりつつある。

仲間に支えられる、あるいは師にあたるアーノルドに思いを寄せる形で徐々にアーク・エンジェル内でその立場を確立する。決戦が近づくある日、アーノルドに思いを告げ、恋人とまではいかなかった。も確実に進展を見たようである。

ミルラ・マイクの搭乗するYMF-X999Aプロト・ザクを相手に奇抜な戦法を見せ、その攻撃力を奪うことに成功している。アーク・エンジェルは撃沈されてしまったが、戦いを見事に生き延びた。

結婚式会場ではアーノルドをすっかり飼いならしている姿が目撃されている。

エリー・アルスター、ジョージ・アルスターの娘。

フレデリック・アデス

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

35

コード

イネーター プラント

登場

26話

ザフト軍レセップス級大型地上戦艦ペトロの艦長。アンドリュー・バルトフェルドの冗談交じりの指示をそのまま伝えるなど、無骨な軍人である。

ホフマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

50

ナチ

ユラル

大西洋連邦

登場

40話

恰幅のよい大西洋連邦軍少将。

軍議では急速に力を増す急進派を抑えようと試みたが、エインセル・ハンターを御すにはあまりに力不足であった。

ホムラ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

59

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

42話

現オーブ首長国代表でありながら、気弱な態度が目立つ男性。

前代表であるウズミ・ナラ・アスハの弟であり、その地位を引き継ぐ形で代表に就任した。しかし、オーブの顔はあくまでもウズミ先代代表であり、また実権はエピメディウム・エコーに握られている。

マーチン・ダコスタ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

26

コード

イネーター プラント

登場

19, 21, 23, 25, 26, 28-30, 45話

機体

TMF/A-802バクウ

実年齢よりも若く見えると評される青年。

砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドの側近であり、忠実な部下。ただし、融通が利かず、おまけに応用もきかせられない。キラ・ヤマトに監視をあっさり気付かれるという失態を犯している。ただし、その能力は決して低いものではないとアスラン・ザラは評価した。

モビル・スーツの操縦も行い、新型機であるTMF/A-802バクウで小隊長として戦場に出た。機体性能を把握した見事な連携を得意とし、敵機の撃墜に成功している。しかし、GAT-X105ストライクガンダムの前に部下を失い、自らも機体を中破させられ敗退している。

アンドリュー・バルトフェルド亡き後、指揮官代理を務める。その後、拠点としていたバナデューヤを離れ、ビクトリア基地に身を寄せるとともにいまだ戦いを続けている。

マーナ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

49

ナチュラ

ル オーブ首長国

登場

44話

オーブに所属する医師。カガリ・ユラ・アスハの治療にあたっていたが、勝手に抜け出されてしまい、頭を悩ませたことだろう。

マシュー

原作

所属

性別

年齢

人種

機動戦士ガンダムSEED

男性

17

コーディネイター

ネーター プラント

登場

5, 6, 32話

機体

ZGMF-1017ジン

ザフト軍アイマン隊のパイロット。

派手好きな隊長ミゲル・アイマンを補佐するためいつも汎用性の高いアサルト・ライフルを用いるなど融通の利く人物。

偶然発見したゼフィランサス・ズールを助けようとして隙を見せたところをストライクガンダムにコクピットを潰されている。

マユラ・ラバッツ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

22

ナチュラ

ル オーブ首長国

登場

42, 44, 48, 49, 55, 58, 60話

髪を短く整えている女性。

アサギ・コードウエル、ジュリ・ウー・ニエンとともにアーク・エンジェルの新たなクルーとなった。やはりこの3人であることが多く、プライベートでも酒を飲み交わす仲である。

ブーケ・トスの場面では、圧勝したヒメノカリスの覚悟と熱意を讃えている。

マリユ・ラミアス

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

26

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

3, 5—16, 18—21, 26, 27, 28, 30—34, 36, 39—42, 47, 50, 52, 57—60話

長い髪になだらかなウェーブをかけた女性。礼儀として化粧を欠かさないような大人の女性である。

大西洋連邦軍大尉。アーク・エンジェルの艦長である。非常に責任感が強く職務に忠実。それが時に非情ともいえる行動を起こすことにもなっている。また融通のきかないところを自覚している一面もある。

新型であるストライクガンダムをなんとしてでもアラスカへ届けようと尽力している。そのため無理な行動をすることもあり、ナタル・バジール小尉と衝突することもしばしばである。

直属の上官であるデュエイン・ハルバートン少将に忠誠を誓い、絶大な信頼を寄せている。その上官からムウ・ラ・フラガにスパイの嫌疑がかかっていると聞かされたときには、思いもかけない反応

を見せた。

元々任務に厳格な艦長であったが、この頃はそれが顕著である。そのため、クルーとの意見対立が目立つようになっていく。正規の訓練を受けていない志願兵が主力を担っているため、風紀が乱れがちであると憂いていた。また、正規の軍人であるアーノルド・ノイマンともフレイ・アルスターを巡っての意見の衝突は表面化している。

しかし、それが艦の運行においてよいことであるとは考えておらず、徐々にではあるが部下への歩み寄りが見られている。それが結実することは、残念ながらまだ時間を必要とするようである。

近頃はそれにすっかり胃を痛めてしまっているようだ。

アラスカ到着後は少佐に昇級し、アーク・エンジェルを降りた。

独力でサイクロプスの存在を察知するも、これを停止させることはできず、ラウ・ル・クルーゼに連れ出される形で危機を逃れた。その後、急進派、ブルー・コスモスの理念に触れることで穏健派の過ちに気づくこととなった。

戦いではラウの右腕として戦艦ドミノオンを守り抜き、ブルー・コスモスの腕章をつけた姿が堂に入りつつあるようだ。

マルキオ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

42

コーデ

イネーター

プラント

登場

33, 38, 60話

本名不詳であるため、マルキオ導師と呼ばれている。この人物はプラント国籍にありながら第3勢力に属する国々への渡航歴が多く

あり、公安に所属するレイ・ユウキは胡散臭い人物と一蹴している。同時にヴァーリたちのお父様の手駒の1つであるともされている。

オーブの海岸の教会で神父をしている。性格は一見敬虔な信徒でありながら、神を否定するような発言も平気で行うなどつかみどころがない。ゼフィランサス・ズールからは堅実な人間性を評価されたようだが、キラ・ヤマトからは破戒僧だと訝しがられた。

しかし、ゼフィランサスの信頼は厚かったらしく、結婚式の会場にマルキオ導師の教会を選んでいる。その際にも本当に聖職者かどうか疑わしい言動を見せ、キラを大いに困惑させた。

マルコ・モラシム

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

40

コード

イネーター

プラント

登場

45話

機体

UMF-5ゾノ

口髭にまで繋がる豊かな顎鬚が特徴の男性。

紅海の鯨との異名を持ち、ジブラルタル基地の東の守りを担っていた。急速に大西洋連邦軍へと傾いていく戦況の中でジブラルタル基地防衛に尽力した。

血のバレンタインで家族を失っていることからその戦いぶりは執念ともいえるものが宿っており、獅子奮迅の活躍を見せるも、絶望的な戦力差を覆すことはできなかった。ムウ・ラ・フラガ搭乗するZZ-X100GAガンダムシュテュルメントを得意の水中へと引きずり込むことに成功したが、相手の極めて高い汎用性を前に戦死

している。

ミーシャ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

不明

不明

不明

登場

57話

地球軍の名もなきパイロットがコクピットにまで写真を持ち込んだ女性。パイロットとの関係は不明であるが、すでに故人であることが推測される。

ミゲル・アイマン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

19

コーデ

イネーター プラント

登場

4-6, 32話

機体

ZGMF-1017ジン

ザフト軍モビル・スーツ・パイロット。アスラン・ザラたちの先輩に当たる。派手な攻撃を好み、いつも拠点攻撃用のミサイルを使用する。それをたしなめながらもサポートに回る部下がいるなど人望には篤かった。

ヘリオポリスにてストライクガンダムと交戦。その圧倒的な性能の前になす術なく撃墜されている。プラントには病弱な弟を残していた。

ミリアリア・ハウ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

15

ナチュ

ラル

オーブ首長国

登場

2, 3, 6, 11-13, 17, 34-38, 42, 50, 59話

扇状に広がった髪型が特徴的なこと以外、どこにでもいそうな普通の少女。

オーブ市民。トール・ケーニヒの恋人。ヘリオポリス崩壊に巻き込まれ、カズイ・バスカークの死を体験するなどして心身ともに弱っていた。安心感をトールに求め、その代わりほかの仲間との関係が疎遠になりつつあった。

アーク・エンジェルが第8軌道艦隊と合流した際にはトールとともにオーブへ帰ることを選択。残る仲間と別れることとなった。

しかし、アーク・エンジェルがオーブを訪れたことで、仲間たちとは再開を果たしている。その後、街が戦火に焼かれたことで、仲間たちとははぐれてしまった。

その最中にトールを失い、そのことの悲しみと怒りから、ザフト兵であるディアッカ・エルスマンを射殺しようとして友人であるアイリス・インディアを危うく殺しかけてしまった。

ムウ・ラ・フラガ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

28

ナチュ

ラル

大西洋連邦

登場

4-7, 9-15, 17, 19-22, 25-28, 31, 33,
35-37, 39-41, 45-54, 56-60話

機体

TS-MA2・mod・00メビウス・ゼロ

ミストラル

FX-550スカイグラスパー

ZZ-X100GAガンダムシュテュルメント

不敵な笑みが野生じみでいて、まさに猛禽のような眼差しをもつ。大西洋連邦大尉。軍内でも屈指のエース・パイロットであり、同時にザフトのラウル・クルーゼとも深いつながりを有している。その目的は判然とせず、またそのスパイ行為に気づく者もない。だが、その言動は次第に注目されるようになっており、そのことを当人も気付いている。

アーク・エンジェルの1パイロットとして職務を続けていた。キラ・ヤマトに戦法を教える、アーノルド・ノイマンの教官になるなど、艦内での役割は決して小さくはない。だが、同時に影響力をそぐ試みが行われつつある。

キンバライト基地防衛戦において乗機であるFX-550スカイグラスパーを撃墜され、行方知れずとなった。しかし、それはアーク・エンジェルから怪しまれずに離れるための手段であり、無事な姿がザフト軍戦艦内で確認されている。

その後、ザフトの軍服を着た姿でかつての戦友の前に現れ、数々の情報を流していたことを悪びれることなく告白している。

しかし、その実体はブルー・コスモス代表であるムルタ・アズラ

エルと名乗る3人の1人であり、ザフトには2重スパイとして協力していたにすぎなかった。ムウが流した情報によりザフトは誘導されていたのである。

ジェネシスを破壊するためにエインセルに代わりジェネシスの深部に1人残った。破壊を阻止しようとするミルラ・マイクと交戦し、これを戦闘不能にすると、最期の時を話をしてすごした。ムウの命をとした行動により、ジェネシスは破壊され、地球は救われた。

ムルタ・アズラエル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

不明

不明

不明

不明

登場

8, 13, 28, 39-42, 45-48, 51, 52, 54,
56-60話

ブルー・コスモス代表としてその名を知られていること以外が謎の男性。エインセル・ハンターの偽名ではないかと目されている。

ところが、それはブルー・コスモスの3幹部の総称であり、エインセル・ハンターの他、ムウ・ラ・フラガ、ラウ・ル・クルーゼの3名がムルタ・アズラエルを名乗っている。

この名前は本来アズラエル財団の御曹司であるムウ・ラ・フラガの本名でもあり、3人で1人の名前であり、同時に1人で3人の名前である。

メイラム

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

不明

コーデ

イネーター プラント

搭乗

45話

ビクトリア基地へと移ったマーチン・ダコスタの部下である男性。ただし、敵に撃墜されたらしく、その姿を確認することはできなかった。

メリオル・ピステイス

原作

性別 年齢 人

種

所属

機動戦士ガンダムSEED X ASTRAY 女性 27

ナチュラル 大西洋連邦

登場

8, 10, 14, 22, 23, 29, 37, 39-43, 49, 54, 56, 57, 59, 60話

黒いスーツと眼鏡の似合う女性。化粧を欠かすことがなく、主人であるエインセル・ハンターのことを絶えず意識している。

ラタトスク社の若き代表エインセル・ハンターの私設秘書であるとともに妻でもある。有能であり、忠誠が非常に強い。すべてにおいてエインセルの言葉が優先され、その関係は代表と秘書の枠を完全に逸脱している。

エインセルのそばから離れることがない。彼の娘であるヒメノカリス・ホテルには不必要なほど敵愾心を抱いており、それを感じさせる行動が散見されている。

10年前の結婚当初は堅苦しい言動は見られず、年齢相応の朗らか

な人柄であつたらしい。

モーガン・シュバリエ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED MSV

男性

48

ナ

チュラル

ユーラシア連邦

登場

20—28, 30, 45, 48, 57, 59話

機体

TMF/S-3ジンオーカー

顎鬚が特徴的な中年男性。その態度は落ち着いたもので、歴戦の戦士を思わせる。

ユーラシア連邦所属の中佐。キンバレー基地の司令官を務めるとともに、鹵獲したジンオーカーのパイロットを兼任する。

GAT-X105ストライクガンダムに敗れたアスラン・ザラを助けたことで、この戦争の1つの側面を示すと共に、アスランの考えに影響を与えた。

月下の狂犬の異名をとるエースであり、砂漠の虎と呼ばれるアンドリュウ・バルトフェルドとは強烈な敵対関係にある。だが、どちらも戦場以外では非常に我の強い性格をしている。

その通り名の由来は、夜間戦闘を得意とし、正気とは思えないほど無謀な戦法を採ることにあることが判明している。

卓越した技能の持ち主であり、ガンダム2機を相手に1歩も引かない戦闘を見せたが、性能差はいかんともしがたく機体を中破させられた。その後、敵であるはずのアスランをかばって戦死するという最期を遂げた。アスランに極めて重要な影響を与えた人物である。エイプリルフル・クライシスにて妻と息子を亡くしている。

ヤルー・アシュマン

原作

性別

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

14

コード

イネーター プラント

登場

51話

機体

ZGMF-1017Mジンハイマニューバ

ザフトの新兵。ナチュラルは低俗な人種であるという教官の言葉を鵜呑みにしていたことから油断を招き、マニユアルどおりの戦法を披露した挙句撃墜されている。キラ・ヤマトという英雄に憧れた少年は、決して英雄ではなかった。

ユーリ・アマルフィ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

37

コード

イネーター プラント

登場

17, 21, 24, 29, 30, 37, 39, 42, 45, 53, 58, 60話

髪質と同じ、やわらかな物腰の男性。

プラント最高評議会議員。国防委員の中で唯一穏健派に属しており、そのことに反対意見も多い。息子であるニコル・アマルフィが

軍属にあるのはそんな父への援護でもある。息子の友人であるアスラン・ザラからは理想的な父親像として見られている。

直属の上司であるパトリック・ザラにはいたずらに戦争を拡大させようとしているとして嫌悪感を抱いており、穏健派の立場から反対意見を述べることもある。自らの理念を守ろうとする強い意志を支えているのは息子であるニコルの存在である。

しかし、息子ニコルの戦死を境に急進派に転向。ニュートロン・ジャマーを無効化するシステムのデータを兵器開発を担うゼフィランサス・ズールに委譲している。

その後、その装置の名前に息子の名前をつけることとなる。

子を失い、妻とは離婚した。そのため、自暴自棄となり、その姿は明らかにやつれていた。ゼフィランサスがジェネシス破壊のための情報を聞きに訪れた際、怒りを見せるものの、ゼフィランサスに責任を押し付けることはできないと協力し、ジェネシス破壊のための道筋を示した。

その後、ムルタ・アブラエルの目的を知り、ニコルを殺害されたことを許すことはできずとも、悪戯に憎しみを広げるような行動を慎むべきと考えるにいたった。ゼフィランサスの結婚式に参列した。

ユーレン・ヒビキ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

32

ナチュ

ラル

不明

登場

60話

エインセル・ハンターの主治医であったヴィア・ヒビキの夫である。

ラウ・ル・クルーゼ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

28

コード

イネーター プラント

登場

4, 5, 7-10, 12-19, 21, 23, 25, 28, 29,
31, 33, 36, 39, 40, 41, 43, 46-54, 56-
60話

機体

ZGMF-515シグー

TMF/S-3ジンオーカー

YMX-200シグーディープアームズ

ZZ-X200DAガンダムトロイメント

目元を仮面で覆った謎の男性。一部を除き、誰もその素顔を見た者はいない。

ザフト軍モビル・スーツ・パイロットにして部隊長。敵であるはずのムウ・ラ・フラガとつながりを持ち、大西洋連邦、プラント両国を否定する発言をするなど、両勢力に組みしな言動が見られる。ガンダムの奪取にこそ失敗したが開発者であるゼフィランサス・ズールをプラントにつれてくることで失地回復がなされた。

ヴァーリについて熟知している様子であるなど、プラントの意志とは異なった目的を有していることに疑いの余地はない。

パイロットとしても優れた能力を有しており、伝説的な回避術ハウンス・オブ・ティンダロスの使い手であるとともに、性能の劣る量産機を用いながら2度にわたってガンダムを圧倒している。

ザフト軍きってのパイロットでありながら、その実態はブルー・

コスモス3幹部の1人であり、ザフトとして働きながらガンダム、及びビーム兵器の言わば宣伝に努めていた。結果、プラントは自らの封印を解くこととなった。

ムルタ・アズラエルと名乗るブルー・コスモス3幹部の1人。元々はアズラエル財団に婿入りしたアル・ダ・フラガのクローンであるとともにドミナントの失敗作にあたる。そのためテロメアが常人に比べてはるかに短いという異常を抱えており、時折発作を起こしては意識をなくしている。

ヤキン・ドゥーエにて、脱出しようとしていたパトリック・ザラを殺害している。

発作を起こし、その隙をつかれる形でカガリ・ユラ・アスハに追い詰められるも、現在地球を襲う危機に対処するために共闘している。結果、ジェネシス破壊までの戦線維持に貢献し、カガリとともに戦い抜いた。

ゼフィランサスの結婚式では、新しくできた技術上の妹の扱いに困惑している様子であった。

ラクス・クライン

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

16

コード

イネーター プラント

登場

16, 20, 21, 23, 30-32, 34, 35, 40, 45
-48, 50-57, 59, 60話

ヴァーリ。第3研究所一第1世代一3女。

プラントで著名な歌手。歌姫とも呼ばれる少女。

鮮やかな桃色の髪と澄んだ青い瞳をしている。その顔はゼフィラ

ンサス・ズール、デンドロビウム・デルタと酷似している。

非常に落ち着いた人物であり、どのような事態にも冷静に対処できる雰囲気がある。同時に冗談としか思えない態度を交えた会話を好む傾向にある。

アイリス・インディアとは同じ研究所出身の姉妹の間柄であり、その再会を喜んでいた。

26名のヴァーリの中から選抜された6名のダムゼル、その頂点に立つ至高の娘であり、ラクス・クラインと名乗ることが許された。ヴァーリとしての名前は、ガーベラ・ゴルフ。その能力は人身掌握と指揮能力に発揮される。また、それが最善であるということを見極める力を持つとともにそのためには必要な犠牲と割り切る強さを兼ね備えている。そのため、その作戦は最善にして最良でありながら、時に残酷で凄惨なものとなる。

シーゲル・クラインの死後、その遺志を告ぐことを表明するとともに、もはや誰にもダムゼルを止めることができないことを明言している。その姿には、アスランは今後のプラントの行く末を危惧せざるを得なかった。

ラストイ・マッケンジー

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

14

コーデ

イネーター プラント

登場

51, 52話

機体

ZGMF-1017Mジンハイマニューバ

ザフト軍に所属する新兵。戦況の悪化により短縮期間で軍学校を

卒業した。この頃には教本内容がプロパガンダじみたものと化しており、自分たちがコーディネーター至上主義に毒されていることに気づくことさえできなかった。

新型機を与えられ、一応の戦果を上げるものの、ムウ・ラ・フラガの圧倒的な力の前になすすべなく撃墜されている。

リョウタ・シモンズ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

5

コーデ

イネーター

オーブ首長国

登場

47話

エリカ・シモンズの息子。遺族としてその名前が登場しただけのあり、氏名のみでの登場である。

ルーク

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

26

コーデ

イネーター

プラント

登場

26話

機体

TMF/A-802バクウ

ダコスタ小隊に所属するパイロット。ダコスタ機を先頭にして3

機が縦に並ぶジェットストリーム・アタックと呼ばれる戦法では2番手を務める。連携は完璧であり、GAT-X102デュエルガンダムを撃退することに成功するも、GAT-X105ストライクガンダムの相手は荷が重く小破させられてしまった。

レイ・ユウキ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

27

コード

イネーター プラント

登場

32-34, 42, 48, 57, 58話

固い表情を崩さず、真面目を通り越して堅物としか思えない印象を与える。

プラントにおける公安組織グッフルファクシに所属する捜査官。その権限は大変強い。ゼフィランサス・ズールの研究データが漏出した際には、パトリック・ザラ国防委員長の庇護下にあるゼフィランサスを拘束している。

しかし、その実態はパトリック・ザラを監視するためにクライン派から送り込まれたスパイであった。

レドニル・キサカ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

31

ナチュ

ラル オーブ首長国

登場

16, 32, 37, 43, 52, 56話

機体

MBF-M1 M1アストレイ

鍛え上げられた体つきに彫りの深い顔立ちで、たたき上げの戦士を思わせる男性。

オーブ軍。カガリ・ユラ・アスハの側近をつとめ、激高しやすいカガリとバランスをとるように寡黙で冷静な男性である。目立たないながらもカガリを支え、現在は母艦として利用されているテストメント級ケトビームの艦長を務めている。

レノア・ザラ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

37

コーデ

イネーター プラント

登場

50, 51, 59話

ヴァーリ、ドミナントの研究者である女性。子どもの相手が多く所帯じみていると嘆いていた。

ユニウス・セブンにて秘密裏に遺伝子調整の研究を進めていた。責任者の1人であるとともにパトリック・ザラの妻でもある。そのため、ドミナントの中から選出されたアスラン・ザラの母になるはずの女性であった。

その人柄は研究者肌であり、遺伝子調整についてエインセル・ハントーと議論を交わした。その結論は出ることはなかったが、アスランへの愛着でありながらも確かな愛情を抱いていたことを証明しつつ命を落としている。

ロミナ・アマルフィ

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

女性

35

コーデ

イネーター プラント

登場

17, 58話

氏名のみが登場しているユーリ・アマルイ議員の妻にして、ニコル・アマルフィの母親。

息子の死を悲しむあまり、夫であるユーリ・アマルフィをなじり、夫婦仲は冷え切ってしまっている。その後、離婚したことが確認されている。

ロメロ・パル

原作

性別

年齢

人種

所属

機動戦士ガンダムSEED

男性

24

ナチュ

ラル オーブ首長国

登場

42, 55話

歳の割りに恰幅がよいと評された男性。

アーク・エンジェルでは火気管制を務めていたが、オーブ首長国に亡命したことに伴い除隊する。その理由は、祖国である大西洋連邦に弓引くことはできないという理由からである。

人物設定（既存）（後書き）

ここに書かれている設定はあくまでもBlumenGartenでのみ通用するものです。見る人が見たならわかりますが、設定に相手が加わっており原作とは異なります。無論同じところもありますが、その点ご注意ください。

また、情報の修正をちよくちよく行うことになると思います。ただ、新たな情報を書き入れるのは原則話数が進んだ時になります。

人物設定〱オリジナル〱（前書き）

オリジナル・キャラクターです。メインの重要なキャラクターから、少々隙間を埋めるために登場していただいた人物まで幅広くいます。なぜだか、大半が女性です。

人物設定（オリジナル）

アイリス・インディア

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター オーブ首長国

登場

2, 3, 5-9, 11-13, 17-23, 25-27, 30-42, 44, 47-56, 58-60話

機体

GAT-X102デュエルガンダム

GAT-X01デュエルダガー

MBF-M1 M1アストレイ

GAT-X105ストライクルージュガンダム

ヴァーリ。第3研究所—第3世代—20女。

桃色の髪を首の後ろで縛っている。その青い瞳は多くの男性を魅了する美少女。

オーブ首長国の学生。世慣れしていないが、その反面多少のことではくじけない強さがある。ただ、友人との死別や同じ顔をした少女との出会いに心が疲れている。それでも前向きに捉えようとするここのできる少女である。

戦争に巻き込まれる形で乗ることになった戦艦においても、懇親会を企画するなど前を向く姿勢を持っている。戦争という現実を前に、現在のところその努力は空回りをしている。

親友であるフレイ・アルスターに付き合う形で軍に志願。その結果モビル・スーツのパイロットに任命されてしまった。だが、コーディネーターとしての資質ゆえか、徐々に実力を付け始めている。

当初は幼少期の記憶を失っており、自身がヴァーリであることも知らずにいた。しかし、ゼフィランサス・ズール、キラ・ヤマトなど、事実を知る人からその出生を知りつつある。さらにカルミア・キロから記憶が書きされていた事実を知ると、そのことを認識したことで急速に記憶を取り戻しつつある。ただし、お父様に関する情報は封印が強く、その記憶は不鮮明なままである。

基本的に回りに気を使うことのできる好人物であるが激昂しやすい。さらに一度怒らせると手段を選ばない行動を起こす危険人物でもある。そして多くの場合、その被害者がディアッカ・エルスマンである。

友人であるフレイとは長く不仲が続いていたが、フレイが自身と向き合うことで冷たく当たっていた理由を述べるとともに謝罪すること、和解への大きな1歩を踏み出すことができた。

記憶は封印されていたのだが、様々な話を聞くうちに次第に鮮明なものとして取り戻しつつある。ユニウス・セブンで起きた出来事を耳にしてその記憶はほぼ取り戻されたが、まだ戸惑いは強く残されている。それでいてなお、プラントのしていること、してきたことに強い疑念を抱かずにはいられないでいる。

母艦であるアーク・エンジェルが地球軍に合流したことで、アイリスもまた軍を移っている。その際、ザフト軍に残ることを選択したディアッカとは別れることとなった。

ミルラ・マイクとはヴァーリ同士で戦い、フレイの助けもあり辛うじて勝利を拾っている。その後、妹に当たるゼフィランサスの結婚式の会場では、ディアッカと並んでいる姿があった。

アルファ・ワン

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

男性

15

コーディネ

ーター プラント
登場

15, 34, 47, 50話

アスラン・ザラの以前の名前。現在はこの名前を使っておらず、
こう呼ばれることを嫌っている。その名前の意味はドミナント初号
機以上の意味はないためである。

エインセル・ハンター

原作 性別 年齢 人種

所属

オリジナル 男性 28 コーディネ

ーター 大西洋連邦

登場

8-12, 14, 22, 23, 29, 34, 36-44, 46,
47, 49, 50-60話

機体

ZZ-X300Aフォイエリヒガンダム

青い瞳に柔らかな金髪。完全に整った美青年である。服装は白い
ものを好み、スーツを着崩すことはない。

大手軍需産業ラタトスク社代表を務めるとともに、反コーディネ
ーター思想団体ブルー・コスモス代表とも目される男性。戦争の到
来を喜んでいる節があり、その言動を危険視する者は少なくない。

だが、難民の少女フレイ・アルスターに救いの手をさしのべてい
るなど、その行動には一貫性がない。側近であるメリオル・ピステ
イスでさえ意図を測りかねることがある。ブルー・コスモスのメン
バーであることが判明しているとともにコーディネーターであるア
イリスを引き入れようとした。

ハウنز・オブ・ティンダロスの使い手でもあり、その身体能力はキラを圧倒するほどである。

大西洋連邦急進派内における影響力は強大であり、軍事会議にまで顔を出す。

また、パイロットとしても優れた力を有しており、ZZ-X300 A Aフォイエリヒガンダムに搭乗した際にはオーブの防衛線を瞬く間に混乱にさせカガリ・ユラ・アスハ、キラ・ヤマトを圧倒するほどの実力を見せている。

その出生は特殊なものであり、ムウ・ラ・フラガの父であるアル・ダ・フラガのクローンにあたるとともにドミナントの最初の成功作であるプロト・ドミナントにあたる。

血のバレンタインではヒメノカリス・ホテルを連れ去り、レノア・ザラを殺害している。

最強のコーディネーターとしてキラ・ヤマトと戦い、しかし目的を果たすためにキラに勝ちを譲っている。結果、シーゲル・クラインをダムゼルを傷つけることなく殺害することに成功した。

ジェネシス破壊のために1人残ることを選択したが、エインセルを家族の元に帰したいというムウの遺志を受け、ムウを換わりに残す形でジェネシスを脱出。妻と娘の元に帰っている。

結婚式会場では息子を殺害してしまったユーリ・アマルフィに謝罪し、その謝意は一定の理解を得ることができた。

エリー・アルスター

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

43

ナチュラ

ル

オーブ首長国

登場

8話

フレイ・アルスターの母親。行方不明者リストに名前が見られているだけで、登場していない。

エピメディウム・エコー

原作	性別	年齢	人種

所属

オリジナル	女性	15	コーディネ

登場
ーター
オーブ首長国

23, 31, 34, 35, 37, 39, 40, 42, 44, 47,
49, 50, 51, 59, 60話

ヴァーリ。第2研究所一第2世代ー10女。第4のダムゼル。
青と赤のオッド・アイをして、姉であるデンドロビウムと似た服
装でまとめている。

オーブ首長国を裏から操る存在として父親であるはずのウズミ・
ナラ・アスハから認識されている他、姉妹関係にあるはずのカガリ・
ユラ・アスハは敵対心を隠そうとしていない。

ただし、基本的に朗らかな人柄であるため、普段は妙に楽しげに
振舞う。

オーブに対する愛着を示しているが、お父様こそが最優先事項で
あり、犠牲にすることに躊躇はなかった。それでも、そのことに気
後れしていないわけではなく、時折憂いた表情を見せることがある。
政治的な駆け引きを得意としており、無茶をしがちなカガリとは
対立してしまうこともしばしばである。

シーゲル・クラインを父として崇拜しながらも、ウズミ・ナラ・
アスハを父として敬愛している。その狭間にあったエピメディウム
は傍観者に徹することでオーブを守る選択をする。まるでその意志

を受けたかのように、カガリはザフトを離反してまでジェネシス破壊を試みた。

妹にあたるゼフィランサスの結婚式を祝うため、公務そっちのけでパーティを主催した。ただし、未成年である姉、デンドロビウムにはワインではなく葡萄ジュースを勧めるなど、規律に甘いのか厳しいのかわからない人物である。

ガーベラ・ゴルフ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

16

コーディ

ネーター プラント

登場

23, 47, 50, 55, 57, 59話

ヴァーリ。第3研究所―第1世代―3女。第2のダムゼルにして、至高の娘。

ラクス・クラインのヴァーリとしての名。

カルミア・キロ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター プラント

登場

19, 21, 23, 25―28, 30―34, 39話

ヴァーリ。第4研究所―第2世代―12女。

褐色の肌をした落ち着いた雰囲気的女性である。

砂漠の虎アンドリユー・バルトフェルドの傍らにいる少女。友軍が全滅したことを冷静に報告した。キラ・ヤマト、アスラン・ザラの両名とは面識があり、特にキラには姉のように接していた。つかみ所のない性格であるが、わきまえるところはわきまえるところがあり、アンドリユー・バルトフェルドの側近を務めている。

モビル・スーツ開発にも携わっており、TMF/A-802バクウ、TMF/A-803ラゴウを開発した。

自ら開発したラゴウに乗り込み、アンドリユー・バルトフェルドをサポートした。交戦したキラ・ヤマトとは親しい間柄であり、戦闘中でありながら説得と相談相手となった。キラはそのことで心境が落ち着くと共により大きな力を手に入れ、ラゴウはその結果撃墜されている。死亡することそなかったが、重傷を負ってしまった。その後アーク・エンジェルに収容され治療を受けることとなった。アイリス・インディアに昔の出来事を教えた他、フレイ・アルスターとも面識を持った。しかし、ゲリラが襲撃したことで停電が発生し、医療機器に生じた不具合によって死亡してしまった。

ゲームル・スリー

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター オーブ首長国

登場

32, 37, 50, 59話

カガリ・ユラ・アスハの以前の名。ただし、こう呼ばれることを嫌っているらしく、あくまでもカガリと呼ばせようとする。ドミノント3号機。

サイサリス・パパ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター プラント

登場

24, 29, 31-33, 35, 40, 43, 46, 47, 50,
51, 55, 56, 58, 60話

ヴァーリ。第6研究所一第1世代一6女。第3のダムゼル。
青く長い髪をした少女。伊達で白衣を着ているなど、研究者とし
て若すぎることを気にしているふしがある。

プラントにおいて量産型モバイル・スーツの開発に携わっている。
まだ若い、その技量は高く、ザフト軍モバイル・スーツには何らか
の形で関わっている。妹にあたるゼフィランサスとの違いはサイサ
リスは既存の記述の低コスト化、量産化に関する技術に優れている
面が挙げられる。

兵器を作っているとは思えないほどのんびりとした様子であるこ
とが多い。しかし、その行動原理はヴァーリらしくお父様がすべて
であり、時には卑劣、非情な行動も辞さない。

ゼフィランサスへの対抗意識は次第に肥大をはじめ、それは自身
でも抑えられないところにまで達しつつある。

同じくモバイル・スーツ開発に従事していた妹、ローズマリー・ロ
メオとは仲のよい姉妹であったが、ユニウス・セブンでは死別する
こととなった。

ジェネシスの開発者である。

ゼフィランサスへの敵愾心は強く、狂気にも近いものであった。
父であるシーゲル・クラインを殺害された後、キラ・ヤマトによつ

てローズマリー・ロメオであることを看破されてしまった。ダムゼ
ルの中で、結婚式に参列こそしなかったラクス・クラインを除くな
ら、唯一会場に姿を見せなかった。

ジャスミン・ジュリエッタ

原作	性別	年齢	人種

所属

オリジナル	女性	16	コーディネ

ター プラント

登場

3ー7, 9, 10, 12, 14, 16, 17, 19, 20, 23,
25, 28ー30, 33ー37, 45, 46, 48ー55, 58,
60話

機体

ZGMF-1017ジン

TMF/S-3シンオーカー

ZGMF-1017Mジンハイマニューバ

ヴァーリ。第4研究所一第1世代ー4女。

目を完全に覆う視力供与用のバイザーが特徴の少女。これなしで
は生活できないため、はずすことはまずない。

現在はザフト軍所属のパイロットである。気弱な態度が災いし、
目立った戦果こそないが操縦技術は優秀。

ヴァーリであるということとは仲間にも話していない。そのためど
のような立場であるのかに関する情報が少ない。また、同じヴァー
リであるゼフィランサスを恐れている節がある。それはダムゼルで
はない自身の境遇を慮っているためであり、ダムゼルが多く集まっ
た場所では怯えたように口数が少ない傾向にあった。

障害者差別の激しいプラントで視力を生まれつき持たないジャス

ミンが生きていくことは難しい。ボアズに侵攻中である敵艦隊を足止めするために危険な任務に従事させられ、ディアッカ・エルスマンの2度にわたる手を振りほどく形で敵と相打ちとなった。共に果てた敵が妹に当たるロベリアであったということは、双方共に気づくことはなかった。

その死はディアッカの心に大きな変化を与えた。
カルミア・キロ、ロベリア・リマの姉。

ゼフィランサス・ズール

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディネ

ーター プラント

登場

3ー60話

ヴァーリ。第9研究所一第3世代一26女。第6のダムゼル。

赤い瞳に白い肌と髪。アルビノの少女。いつもドレスを身につけるその容姿は美しく、人形のように形容される。

軍需産業ラタトクス社の技術主任であり、ガンダムを開発した。

周りに無関心、無感動な少女であり、その真意をつかみきれぬ者は少ない。キラ・ヤマトと面識のあるほか、ラウ・ル・クルーゼを兄と呼ぶなどザフトとのつながりがある。ゼフィランサスのキラへ対する思いは複雑なようで、殺したいと言いつつも他の女性がキラに興味を持つと嫉妬するなどの一面をのぞかせたことがある。

ラウ・ル・クルーゼの手によってプラントへ運ばれ、パトリック・ザラに技術協力を約束する。同時に彼女たちのお父様のため、その技術をカルミア・キロに移譲し、ザフト軍初のビーム兵器搭載型量産機であるTMF/A-802バクウが開発された。

プラントで新世代型モビル・スーツの開発に従事していた。しかし、助手であったプレア・レヴェリーが研究成果を持ち出したため、彼を追ってオーブ首長国へと渡る。その後、プレアの死を目の当たりにし、エインセル・ハンターにニュートロン・ジャマーを無効化する技術を渡すなどその立場と心境は急速に不安定になりつつある。ある特殊な事情からキラ・ヤマトと距離を開けていたが、和解を果たす。しかし、その周囲から利用され続けるという立場に変化は見られていない。

ニュートロン・ジャマーを無効化する装置に助手であったプレア・レヴェリーの名前をつけた。

ジェネシスの危険性を察し、それを破壊するためにイザークの手を借りヤキン・ドゥーエを訪れた。そこではプレア・ニコルの開発者であるユーリ・アマルフィの協力を得ている。

父であるシーゲル・クラインに恋人であるキラを殺害を命じられた時には、ダムゼルとして記憶の奥深くに刻まれた洗脳と戦い、その呪縛を振り切る形でキラの腕に抱かれることとなった。

ジェネシス破壊後はキラとともに歩むことを決め、マルキオ導師の教会で結婚式を挙げ、永久の愛を誓い合った。

テット・ナイン

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

男性

15

コーディネ

ーター

オーブ首長国

登場

11, 15, 21, 23, 27, 50話

キラ・ヤマトのかつての名前。ただ、自ら進んで使用することはなく、こう呼ばれることも嫌っている。その名前はドミナント9号

機を意味する。

デンドロビウム・デルタ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

16

コーディネ

ーター プラント

登場

16, 21, 23, 31, 32, 34, 35, 40, 44, 50,
51, 55, 59, 60話

ヴァーリ。第2研究所一第1世代一次女。第1のダムゼル。

オッド・アイにその特徴が現れている。身軽な格好を好み、普段から薄着である。

カガリ・ユラ・アスハに無断な行動を責めた。その理由をオーブ首長国を危険にさらすためとしているが、本人にオーブへの愛着があるようには見られない。プラントと地球の間を忙しく飛び回っているようである。ゲリラとのつながりもあるらしく、その仕事には薄暗いものを感じさせる。

その行動の理由は、戦争に干渉し、管理することを目的としたものであると自ら語った。

テストメント級3番艦ネビームを与えられており、オーブのマストライバーを破壊するためにグングニールを降下させた。

現在もまだお父様のために働き続けている。

ダムゼルの1人として、父の死には涙を流した。

ニーレンベルギア・ノベンバー

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター 大西洋連邦

登場

28, 29, 31, 40, 45, 51, 52, 55, 56, 58,
60話

ヴァーリ。第5研究所一第2世代一13女。第5のダムゼル。

赤いドレスを着込み、豊かな黒髪を縦にロールしたヴァーリの女性。

大西洋連邦軍中尉であるが、本人は便宜上のものと階級に対するこだわりを見せていない。着ているドレスはゼフィランサス・ズール、ヒメノカリス・ホテルと同じデザインのものである。

自身が行っている研究はどんなに言葉を並べても所詮人体実験にすぎないことに苦しんでいる。しかし、そこにさえ、他のダムゼルの同様、お父様のためという理屈の元実験を続行している。

サイ・アーガイルのように副作用に苦しめられる人々に心を痛めており、そのためか、今でもサイの傍でその世話を焼いている。その様子はまるで子どもをあやす母親のようであった。

ヒメノカリス・ホテル

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター 大西洋連邦

登場

9, 10, 14, 22, 23, 28, 29, 37, 38, 39,
41-44, 49, 50, 53, 54, 56, 58-60話

機体

GAT-X105E ストライクノールガンダム

ヴァーリ。第3研究所一第2世代一11女。

桃色の波立つ髪と白いドレス姿、冷たい眼差しが特徴の少女。

エインセル・ハンターのア娘として、彼の傍らを離れない。その顔は無表情でありながら、父に対しては微笑みを見せることもある。その容姿や衣類はゼフィランサス・ズールと限りなく似ている。

父に対する思いは度を超えていると思われることがあり、2人が単なる親子ではないと匂わせる。誕生日の祝いとしてエインセルからモバイル・スーツを送られた際には、戦うことへの躊躇を微塵もみせなかった。それでお父様が愛してくれるのだと信じて。

アイリスを妹と認識しているが、反面、最優先事項はお父様のご意志であり、その再会を喜ぼうとはしなかった。

その実力は極めて高く、ディアッカ・エルスマンを軽くあしらうほか、キラ・ヤマトとの戦いでも当初圧倒してみせた。

父であるシーゲル・クラインへの強すぎる思いを抱え心を病んでいた。そのため、ユニウス・セブンでは侵入者でしかないエインセル・ハンターへの強い敵愾心を見せた。その時何があって、何故エインセルを父と呼ぶのか、明らかではない。

決して残酷ではないが父以外の人物に対しては厳しい態度で接する。そのため、ディアッカ・エルスマンとは意見が食い違うことが多くあった。戦いによってディアッカの機体を大破させたのもヒメノカリスである。

当初、ヒメノカリスはエインセルを父とは認めなかった。しかし、エインセルの真摯な態度に心打たれ、エインセルを失うことの恐怖が、捨てられてしまうことの恐怖を上回った時、父と認めることができたことを明かしている。

父に対して親子以上の愛情を持っており、結婚式ではブーケを力ずくでその手にしている。

エインセル・ハンターの娘。

フリージア・フォクスロット

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

5

コーディ

ネーター プラント

登場

44, 50, 51話

ヴァーリ。第2研究所―第3世代―19女。

青い瞳に、左右から三つ編みを肩にたらしたヴァーリ。

デンドロビウム・デルタ、エピメディウム・エコーの妹である。

ある施設からの脱出の際、救命艇が2隻しかないことから、姉たちを生かすために自ら命を絶った。それは姉2人がダムゼルに選出されているためであり、お父様のためには自分よりも2人が生きたほうがよいと判断したためであった。

フリージアの死はデンドロビウム、エピメディウムの心に深い傷を残しており、その名残は2人の髪型に現れている。

マイケル・シュバリエ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

男性

11

コーディ

ネーター ユーラシア連邦

登場

28話

モーガン・シュバリエ中佐の息子。反コーディネーター思想の高

まりを危惧する母親に連れられ、プラントに疎開する予定であった。しかし、エイプエイルフル・クライシスによって命を落としている。

ミルラ・マイク

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

16

コーディネイ

ネーター プラント

登場

55, 59, 60話

機体

YMF-X999Aプロト・ザク

ヴァーリ。第5研究所一第1世代一5女。

豊かな黒髪をした女性。ニーレンベルギアの姉にあたる。

プロト・ザクを自在に操り、アーク・エンジェルに多大な損害さえ与える腕前である。敵味方を問わず勇敢な行いをする人物を賞賛する気概の持ち主であり、敵対しながらも地球軍のことを讃えている。

高い戦闘力を有していたが、そのためかフレイ・アルスターのあまりに常識外れの戦法によって武装を破壊されたところをアイリス・インディアの攻撃にさらされ機体を中破させられた。

それでもまだ戦いをやめようとはせず、危険と承知しながらジェネシス内部に突入。ムウ・ラ・フラガと交戦している。結果として、最期の時をムウと過ごすこととなった。

モニカ・シュバリエ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

32

コーディネ

ネーター ユーラシア連邦

登場

28話

モーガン・シュバリエ中佐の妻。夫曰く、凡庸ながら素朴な感じが魅力の女性とのこと。血のバレンタイン以来険悪になっていくナチュラルとコーディネーターの関係を懸念し、プラントへの移住を決めた。そんな彼女が当のプラントによって引き起こされたエイプリルフル・クライシスによって命を落としたことは皮肉としか言いようがない。

ユッカ・ヤンキー

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

不明

コーディネ

ター プラント

登場

15, 20, 35, 38, 41, 50, 54, 56, 60話

ヴァーリ。第9研究所一第2世代一17女。

ゼフィランサス・ズールが姉であり、髪こそ同じように白いが、瞳は黒い。

アスラン・ザラによればガンダムの名付け親であり、キラとも面識がある。おおらかで、しっかりとした少女で、妹ゼフィランサスから信頼されていた。ただ、キラにはゼフィランサスとの時間を邪魔するお邪魔虫だと捉えられていたようだ。

ゼフィランサスは先天的に心臓が弱く、しかしその利用価値を見出していたスタッフの手によってユツカは殺害され、その心臓がゼフィランサスに移植された。キラはこのことを知っており、ゼフィランサスに伝えなかったことが今でも2人の間に溝を作る原因の1つとなっている。

ただし、ユツカは手紙という形でゼフィランサスにすべてを伝えており、キラの危惧は見当はずれなものでしかなかった。

結婚式を終えたキラとゼフィランサスの2人は、子どもを授かった際には、女の子の名前をユツカにしようと誓い合っている。

ローズマリー・ロメオ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

?

コーディネ

ーター プラント

登場

50, 51, 60話

ヴァーリ。第6研究所一第3世代一23女。

青い髪をしたヴァーリであり、その容姿は姉であるサイサリス・パパとよく似ている。胸につけたブローチが判断の材料となっていた。サイサリス、そしてゼフィランサス同様モビル・スーツ開発に携わっており、キラ・ヤマトが機体を壊すことに姉以上に敏感であった。キラに好意を寄せていた節があり、ゼフィランサスとはあらゆる意味において競り合う間柄であったとも言える。

しかし、ダムゼルに選出されることはなく、また、キラを振り向かせることもできなかった。その後、ユニウス・セブンがブルー・コスモスによって襲撃された際、死亡したとされている。

ただ、ジェネシス内部にて実はサイサリス・パパと呼ばれていた

ダムゼルこそがローズマリーであることをキラによって看破された。死亡したのは、サイサリスの方であったのである。

ロベリア・リマ

原作

性別

年齢

人種

所属

オリジナル

女性

15

コーディ

ネーター

大西洋連邦

登場

28, 29, 39, 45, 49, 51, 52話

機体

GAT-X103APヴェルデバスターガンダム

ヴァーリ。第4研究所一第3世代一21女。

赤い髪をしている。これくらいしか言うことがないほど、ヴァーリとしては平凡な女性であるらしい。

大西洋連邦が投入したモビル・スーツ部隊のパイロットを務める。ただ、職業軍人と言うわけではないらしく、一挙手一投足をわざわざ口ずさむなど不慣れな様子が見受けられる。

自らブーステッドマンとして被験者となっていた理由は、再生医療への期待であった。姉であるジャスミン・ジュリエッタの視力回復に望みを繋いでいて、戦闘によって機体を破壊され命を落としている。その敵こそがロベリアが案じた姉であるジャスミンであった。

人物設定くオリジナルく（後書き）

オリジナル・キャラクターが10名を越すのに、主人公は一応キラ・ヤマトですのでオリジナル主人公ではないことになります。ただ、キラにしても原作とはかなりかけ離れた人物になっていないだろうかと危惧する今日この頃。

タイトル解説（1－10話）（前書き）

各話のタイトルの意味がまるでわからないとお嘆きの方のご理解の一助となれば幸いです。

タイトル解説（1－10話）

タイトルが意味不明と周りからよく言われます。おそらく大半どころかすべての方がそうだと思いますので、蛇足とは思いますが、タイトルの解説をいたします。

まず、タイトルですが、私が独自に考えたものではなく、クトゥルフ神話に登場する魔道書から名前をいただいています。クトゥルフ神話とはアメリカのホラー作家H・P・ラブクラフトに始まる神格、魔道書などを共有した作品群からなる創作神話です。複数の作家が世界観を貸借し合いながら独自に固有名詞を作り出したため、神話中に登場するクリーチャー、地名、人名は膨大。魔道書にいたっては50話予定のタイトルに使っても余りあるほどあります。

なお、クトゥルフ神話の世界は人に優しくはありません。神格は人に対して悪意こそ確認されることが大半とはいえ、その性質は邪悪にした害悪。ただ存在しているというだけで人には有害なものばかりです。よって、そんな世界の魔道書に書き記された内容も必ずしも人を救うものではありません。

第1話「太古の恐怖」

筆者

年代

フォン・ケンネンベルク伯爵

19世紀

解説

すべての文化の神話様式をたどり、その起源について記した論文。ケンネンベルグ伯爵がムランドスと呼んだ存在の投影こそが起源であると論文中に断言されている。ただし、ムランドスが何者、ある

いは何かであるのかは明らかにせず、学会の反応は冷淡であった。

作者備考

記念すべき第1話です。ここでは始まりの話として、つい舞台説明に1話丸ごと使ってしまうという自分でも大胆と思える試みに挑戦しました。同時に必要なことであつたとも考えています。コーデイナーターが誕生し、それがどのように世界に受け入れられ、そして拒まれてきたのか。言うなればBlumenGartenの起源とも言える内容です。また、ジョージ・グレンを生み出した組織に対する言及がなく、ブルー・コスモスの成立過程を単なる歴史上の事実として追っているだけと情報を伏せている面も多々あります。

起源への言及がありながら、それが決して明らかでない。そんな話のタイトルとして、『太古の恐怖』と命名しました。

第2話「ユツギヤ賛歌」

筆者

不明

年代

不明

解説

研究者の間で存在すると噂されている魔道書。人類学者ヘンリー・ハドリー・コーブランドが写本を購入したとされているが、彼の死後、その蔵書の中から発見されることがなかった。そのため存在自体が明らかでない。

作者備考

人物の紹介に力を注いだ回でした。実質的な第1話として、若干方向性にぶれがあります。まだ自分自身それぞれの人物のキャラク

ター性を掴みきれておらず、迷走してしまった部分があるように思われます。少年少女の日常を描きたかったというのが主目的でした。

もしこの日、この場所にさえいなければ中立国オーブの市民である若者が戦争に巻き込まれることはなかった。戦争は噂話の中だけで語られる存在であったはずであることを含意するため、『ユツギヤ賛歌』と命名しました。

第3話「無名祭祀書」

筆者

年代

フリードリッヒ・ヴィルハイム・フォン・ユンツト

19世紀

解説

探検家フォン・ユンツトによって書かれた、世界各地の崇拜様式について記載されている書物。1983年にドイツ語で出版されたが、購入者の多くは筆者の凄惨な運命を知った後、この本を放棄してしまった。フォン・ユンツトはこの本を執筆後、モンゴルへの旅を終え新たな原稿の執筆作業に当たっていた。ところがある日、密室の中で絞め殺され、覚書が引き裂かれた状態で発見された。フォン・ユンツトの友人であるアレクシス・ラドーは損傷した覚書の修復を試みたのだが、その内容を目にするなりそれを焼却した上で自らの喉を掻っ切ってしまった。その後もフランス語、英語で翻訳されたが、不完全なものも多く、稀少書物である。かの有名なミスカトニック大学図書館に保管されている。

作者備考

戦争にいきなり放り出されたら人はどんな反応をするだろうか。結論として、逃げ惑うほかないと考えています。よほど訓練を受け

た人間でなければ状況の認識さえできないでしょう。正に恐怖と未知への旅路です。

別に場所を移ったわけではないのに、世界そのものが変わってしまった。それはある意味では旅と同義だと考えます。よってその未知と狂気の旅行記ともいえる『無名祭祀書』をタイトルに設定しました。

第4話「失われた帝国の遺跡」

筆者

年代

オットー・ドストマン

1809年

解説

アジア地方のギリシア、ローマ時代の古代文明の遺跡について大部分が割かれている。だが、その中にはジンバブエに遺跡を築いたとされるあの世からの漁夫という宇宙から飛来したクリーチャーについても言及されている。あの世からの漁夫は一説には魔王アザトースに仕える巨大な怪鳥シャンタクではないかと言われている。シャンタクは時に乗り物として協力してくれる可能性もあるが、乗る主の意に反してアザトースの宮廷に連れ去ってしまうかもしれない危険な生物である。

作者備考

ガンダムは、強くなくてはならない。そう考えて色々と暴れまわってもらった話でした。ともかくすごいものだとして強調したかったため、ジンが完全なやられ役です。ただ同時に、ガンダムは高性能であるだけに、それにまつわる技術は後々様々な弊害や害悪をもたらす蓋然性があります。そんなガンダムの悪しき可能性をここではタ

イトルに込めました。

有用でありながら致命的な危険性を有する存在であるシャンタクとガンダムとを重ね合わせて、シャンタクとも思われているあの世からの漁夫について記載されている『失われた定帝国の遺跡』をタイトルに設定しました。

第5話「イゴス記」

筆者

年代

イゴス

不明

解説

ムー大陸の魔術師イゴスによって書かれた手記。千の仔を孕みし森の黒山羊とも呼ばれる豊穡の神ショブニングラスの神殿に保管されていたと記録されている。ただしそれ以後の記録は存在しない。現在ではその内容の一部が伝わっているのみである。

作者備考

とにかくビームはモビル・スーツがもつには過ぎた兵器であるという印象付けたい。そのためだけにヘリオポリスを破壊しました。ビームをはじめとするミノフスキー物理学はBlumen Gartenにおいて大変重要なものです。きっと多くの方が読み飛ばしていると思いますが、本当に重要な設定です。もっとも、理解しておけばいいことは、3つくらいしかありません。ビームはとても威力が強力である、その代わりにエネルギー消費量が大きく、そしてどの勢力も量産化を急いでいるという3点だけです。

ヘリオポリスの崩壊を最大の見せ場として設定しました。同時に、

崩壊そのものは大して重要なことではなく、すぐに話題に上らなくなり。滅亡と忘却。滅びた大陸の書物であり、現存しない忘れられつつあるものであるという印象から、『イゴス記』をタイトルに設定しました。

第6話「魂の射出」

筆者

年代

不明

1783年

解説

かのセイレム市のオカルト団体の間で密かに出回った小冊子。作者完全に不明。現存する数がごくわずかであり、稀少本である。わずか8ページであるが、そのうちの7ページには曖昧で摩訶不思議な言葉が並べられている。だが、最後の8ページ目にはアストラル界と呼ばれる異次元への旅を可能とする呪文について記載されている。ただし、それはハイドラなる人の頭部と意識を奪い去る存在の領域であり、その旅は危険に満ちたものとなる。

作者備考

アーク・エンジェルに乗り込んで、戦争という世界へと旅立った少年少女。原作ではあっさりと軍に協力してしまいましたが、実際はそんなあっさりと割り切れないだろうと考えたこと。それに加えて、キラとの温度差を強調したいため軍属になることを大変遅らせてしまいました。少年少女が巻き込まれた事態に納得していない。そんな印象にまとめておきたい回でした。

戦争という異世界に誘うアーク・エンジェルという戦艦と、その先に待ち受ける大きな危険を暗示する。異世界へ旅する呪文が記載

されておきながら、危険から身を守る術は書かれていないというこの書のあり方は彼らを連れ出しておきながら守れもしないアーク・エンジェルへの皮肉として、『魂の射出』をタイトルに設定しました。

第7話「悪の祭祀」

筆者

年代

フレデリック男爵

1598年

解説

かの著名な『ネクロノミコン』の部分的な英訳。ただし、翻訳にした原本には原著のアラビア語版ではなく、ラテン語に翻訳されたものが使用されている再翻訳本である。『サセックス草稿』とも呼ばれる。

作者備考

ともかく、ビームやらミノフスキーやら、これからのストーリーに関わる重要な事柄を説明しておきたかった回です。ガンダムの2次創作を書くなら、物理体系のでっ上げやその兵器転用の流れは設定しておかなければならないと余計な使命感を燃やしていた時期が私にもありました。活動報告など含めて何度目かのことになりましたが、ビームなんて、とても強力で、どの勢力も量産化を急いでいるということくらい把握しておけば十分です。ただ、エネルギーの消費量が大きいことも記憶しておいてください。まあ、これだけ重要だと言っておきながら、まだ設定のすべてを開示したわけではありません。

大いなる力のほんの一端のみが示される。しかし、その解釈は必

ずしも正しいものとは限らない。ミノフスキー物理学の概念はまだまだ不完全なものしか示されていないという暗喩として、『ネクロノミコン』の部分的な訳本に過ぎない『悪の祭祀』をタイトルに設定しました。

第8話「暗黒の儀式」

筆者

年代

ラヴェル・ケラフ

エジプト第

13王朝時代

解説

エジプトの大神官ラヴェル・ケラフが記した巻物の一部。ケマイト神官文字で書かれたが、ギリシア語に翻訳されたともされているが判然としていない。ただ1つはつきりしていることは、現在においては写本でさえ入手することは不可能に近いということである。書かれた内容はラヴェル大神官が崇拝する神格に関することが大半である。ただし、その中には外なる神の一柱にして、魔王アザトースの強壮なる使者ニャルラトテップの醜悪なる存在を警告するとともに、その化身であるとする暗黒のファラオに対する警句が記載されている。

作者備考

8話は、なんと言っても私の主要オリジナル・キャラクターの中で唯一の男性であるエインセル・ハンターの登場が最重要事項です。このキャラクターは美形で富豪でかわいらしい娘と美人秘書を侍らせるなどでもない人物であり、軍需産業ラタトスク社の代表まで務めるなど、BlumenGartenの中で重要な役割を演じるキャラクターです。しかし、性質は愉快犯。目的のためにはどのような

な犠牲も厭わない。大変な危険人物であることは、間違いありません。

ニャルラトテップは外なる神の中で唯一人類への明確な悪意が確認できる神格であるとともに、自分の属する外なる神をも侮蔑しているかのような振る舞いをとります。その危険性、性質、有する力を鑑みた場合、エインセル・ハンターとはまさに強壮なる使者にもたとえられる存在であるとして、『暗黒の儀式』をタイトルに設定しました。

第9話「死者崇拜」

筆者

年代

イヴオル・ゴルシユタツト

1702年

解説

様々なカルトを明らかにする活動を行った人々、そのために多大な犠牲を払った人々を扱っている。そのページの多くは『ネクロノミコン』のアブドウル・アルハザード、および『妖蛆の秘密』のルドウィク・プリンに割かれている。この両名の偉大さは衆目の一致するところである。しかし、アルハザードは重大な秘密を暴露したとして不可視の獣に生きながらにして喰らい尽くされ、プリンは異端審問にかけられた末に処刑されている。

作者備考

ごく有り触れた少年少女が戦争に巻き込まれた。その結果はえてして悲惨なものです。戦争にあっさり順応して戦いぬくことなどできないでしょう。カズイ・バスカークの死はそんな戦争の側面を切り出すために必要と考えました。キラ・ヤマトが回りから浮き始め

ているという演出にも利用できたのではないかと考えています。ただ、カズイの消失は仲間たちに様々な影響をこれからも与え続けることでしょう。

たとえ偉人でなくても、人の死とは周囲の人に何らかの影響を与えずにはいられないものです。カズイの死は仲間たちにやがては受け入れられ、彼らを推し進める原動力になってもらいたい。死してなお。そんな願いと決意を込めて、『死者崇拝』をタイトルに設定しました。

第10話「髑髏の黒き書」

筆者

年代

ユカック・イグラチアン

不明

解説

はじめ、ギリシア語で書かれた初版は異端審問によってそのほとんどが焚書にされてしまった。その後、ラテン語に翻訳する試みが行われたが、翻訳者が一部の翻訳を拒否したため、不完全なものが伝わることとなった。さらに1920年代に英訳が行われたが、この本もまた部分的に不完全なものである。本の内容は筆者のオカルト実験の記録および、旧支配者との接触することへの警告が書かれている。

作者解説

エインセル・ハンターは所有する会社の商品であるガンダムが自身の手の届かないところで運用されていることに関心を示しません。それは、ガンダムを使うのが大西洋連邦であろうと、ザフトであろうと得られる結果は変わらないからです。戦闘が繰り返され、ガン

ダムが戦果を上げるたびにラタトクス社の技術力の高さは証明されます。それは恰好の宣伝材料となります。大西洋連邦穩健派も、ザフト軍もエインセルの掌の上で無償で広告塔を演じながらもそのことに気づけないでいるのです。

世界の影に潜みながら、その根幹に位置しながら多くの人にとって及びもつかない存在。それは旧支配者であり、ラタトクス社のよきな軍需産業です。知らずにその領域に踏み込んでいる両軍への皮肉として、『髑髏の黒き書』をタイトルに設定しました。

タイトル解説（1－10話）（後書き）

はじめからありきたりなタイトルつけておけばこのような説明書
く必要ありませんでしたけど、考えたものの何にでも意味をつけて
しまおうとするのは私の悪癖のようです。

タイトル解説(11-20話)(前書き)

60話すべての解説を1話にまとめてしまうと、あまりに長くなりすぎる恐れがあるため、10話ごとに分けて書くことにしました。

タイトル解説〈11—20話〉

第11話「グラークの黙示録」

筆者

年代

不明

1856年

解説

旧支配者グラークを崇拝する者たちによってカルト団体によって書かれた慣習をまとめたものを脱走者が出版社に持ち込んだものを本にまとめたもの。本来は11巻からなるが、意図的に内容が省かれ、全9巻として発表された。また、12巻目が発見されたこともあるとされているが、これは忌まわしい神格を呼び寄せる禁忌の書物であり、そのすべてが遺棄されたと信じられている。

作者解説

キラ・ヤマト、ゼフィランサス・ズールの過去が明らかになる回です。ただ、キラ自身が認めているように、重要で忌まわしい部分がばやかされ、その全容はいまだに見えていません。キラをゼフィランサスが憎む理由はわかっていません。キラがなぜゼフィランサスのように特殊な出生をもつ少女たちと面識があるのかも明らかにされていません。不完全で、しかも醜悪でありながら重要な事柄が明らかではないのです。

知ってはならないことであるとともに、知るには忌まわしいこと。それは意図的に伏せられている。キラが行った欺瞞とも通じるところがあると判断し、『グラークの黙示録』をタイトルに設定しました。

第12話「妖蛆の秘密」

筆者

年代

ルドウィク・プリン

1542年

解説

ルドウィク・プリンによって書かれたものだが、異端審問によってプリンが処刑された1年後、何者かによって持ち出されたラテン語で出版されている。その後教会によって危険と判断され、禁書の扱いを受けた。ドイツ語、英語など複数の翻訳が試みられたが、そのどれもが不完全なものであり、完全な形のものを見つけることは大変困難である。その内容は使い魔、魔術、精霊、吸血鬼など多様な話題に触れられている。中には旧支配者ダゴンの眷族である深きものと人間との混血についての記載もあり、人と同じ姿をした人以外の存在について触れられている。

作者解説

戦闘が続き、それぞれのキャラクターの立場と独自性が示しきれていないと用意した回でした。懇親会が行われるまでの流れから、少年少女が徐々に孤立感を深めつつあること、また、ヴァーリという単語を前面に出し始めたのもこの頃のことです。ヴァーリはV A L Iと表記します。本当はなら英単語並べてV ~ A ~ L ~ I ~でV・A・L・Iなんてものを考えたはずなのですが、その資料をなくした上、私自身英語力に自信がなかったことになりました。ちなみに、ヴァーリとはゲルマン神話に登場する神様の名前です。

ヴァーリという人とは決定的に異なる出生を持つ存在が徐々に明らかになるつつある状況と、忌まわしい深きものとの混血について書かれながら不完全なものでしか本であることから、『妖蛆の秘密』

をタイトルに設定しました。余談ですが、妖蛆はヨウシュという特別な読み方をします。

第13話「フサンの謎の七書」

筆者

年代

不明

不明

解説

中国語で書かれた巻物のセット。その成立過程は明らかでなく、中国の神話の時代に書かれた未知の古代言語から中国語に翻訳されたものであるという説さえ存在する。この書は秦の始皇帝をはじめとして権力者によって幾度か焚書とされた。そのため不完全な版しか残存していない。1792年に英語版が出版されたが、これは大層不完全なものであり研究本としての有用性は低いとされる。その後1900年代にはいつて再び英語版、フランス語版が出版されたが、完全なものを見つけることは現在のところ不可能に近い。扱われる内容は非常に幅が広く、中には暗号化された危険な呪文が隠されているという。また、這い寄る混沌ことニャラトテップの千の姿についての言及がなされている。

作者解説

申し訳ありませんが、このタイトル自体、実は今後の展開に対する伏線であるため、今は敢えてこのタイトルに設定した意味を記さないことにします。ただ、1つヒントとして、ブルー・コスモスの代表ことムルタ・アズラエルを指し示す言葉として、私は好んでこの無貌の神ニャラトテップの存在を引き合いに出します。

『フサンの謎の七書』をタイトルに設定した意味は、やがてわか

っていただけるようこれからの展開を心がけます。

第14話「カルナマゴスの遺言」

筆者

年代

カルナマゴス

不明

解説

預言者カルナマゴスによって書かれたこの本はグレコⅡバクトリアなる人物の墓所から『エイボンの書』とともに発見された。ある修道士がこの本をギリシア語に翻訳するとともに2部の写本を作るも、オリジナルは行方不明となり、後の異端審問の折に写本の1部も失われてしまった。内容は未来と過去に関する多くの記録であるが、この書の場合、特筆すべきことは読むことそのものにある。この本を読む者の周りの時間が通常よりも早い速度で流れるようになるのである。必ずしも致命的な時間の浪費ではないが、危険で不愉快な現象であることに違いない。

作者解説

ユニウス・セブンです。ここではキラとゼフィランサスの生誕の地であるとともに、妖しげな地下施設の存在など、少々きな臭い過去を連想させる場所に設定を変更しました。キラは10年前にこの場所でゼフィランサスとの別れを経験し、10年を経た今でもその状況は変わることがありません。

ただ自分の時間ばかりが過ぎて周りの状況には変化が見られない。そんなキラの現状を端的に表現するために、『カルナマゴスの遺言』をタイトルに設定しました。

第15話「狂気の暗黒神」

筆者

年代

アマデウス・カーソン

解説

恋愛小説作家であったアマデウス・カーソンによって書かれた小説。彼は恋愛小説を主に執筆する作家であったが、セイレムの魔女屋敷で知られる奇怪な館に暮らし始めたことでその作風は不気味でおどろおどろしいものへと豹変してしまった。この本はどの出版社にも受け入れられず、出版されることはなかった。だが、個人的な収集家の中にはその本を所有している者がいるとされている。

作者解説

キラが恋人のゼフィランサスを失いました。この回、重要なことはそれくらいです。

恋を書くことができなくなった恋愛作家が書き出した本である、『狂気の暗黒神』をタイトルに設定しました。

第16話「ナト史」

筆者

年代

ルドルフ・ヤーグラー

1653年

解説

ドイツ生まれの盲目の神秘主義者ルドルフ・ヤーグラーによって書かれた。ルドルフは盲目であるが、それは先天性のものではなく、

この本を書き終える直前にその視力を失ったとされる。その後ルドルフは精神病院で余生を過ごすことになり、摩訶不思議な方法で死去した。その後、1700年代になって削除修正された英語版が出版された。内容はナトという3つの太陽を有する土地の歴史について書かれたものであり、また、星が生んだ怪物を呼び出す戯曲について記されている。

作者解説

もはや戦後ではない。こんな言葉がありますが、戦後という概念は歴史上存在したことはありません。すべてが戦前であったからです。戦争の後、結局新たな戦争がまた起きます。戦後とは所詮戦前に過ぎないのです。さて、この話でもユニウス・セブンでの戦いを終えましたが、両軍は次の戦いにすでに備えようとしています。こんな時、ゼフィランサスは歌を歌いました。それはこれからの戦いに重要なA・L・I・C・Eというシステムを解放するためのパスワードでもあったのです。これによって、人は自ら望んで大きな力を呼び寄せてしまいました。余談ですが、ゼフィランサスやラクスが歌っている物語の出典はすべてギリシア神話です。

音と曲とが巨大な力を呼び寄せてしまう、そのための戯曲が記された本である、『ナト史』をタイトルに設定しました。

第17話「ドール讃歌」

筆者

年代

不明

不明

解説

1650年に所在不明の修道院で発見された中国語の写本。他に

も英語版が数冊発見されている。555の讃歌が収録されている。この中には正体不明の存在を呼び出す呪文などが多数含まれているが、そのすべてが実在する呪文ではない。知られている呪文の中で特に有名なものは復讐の呪文と呼ばれるもので、これは術者の死後に効果を発揮する特殊なものである。

作者解説

戦場が一段落して、子どもたちが自身の居場所を探し始めた回でした。そのためアイリス・インディアをはじめとする彼らが軍属になったり国に帰ることを決めたり、それぞれの道を模索し始めた回です。しかし、ここで重要なことは状況が落ちついた分だけ死んでしまった人たちのことを考え始めた時期でもありました。特にフレイ・アルスターは銃を懷に忍ばせているなど、その傾向が顕著です。まだそれがどのような形で結実するのかは29話になっても明らかではありませんが、それが芽生えたのはこの回近辺になります。

生きている時には意味がないのに、死後、その影響をじわりじわりと示し始める。そんな復讐の呪文に似た作用が始まった回であるとして、その呪文が記載されている本である、『ドール讃歌』をタイトルに設定しました。

第18話「呪われし者たちより」

筆者

カラヤ・ハインツ・フォーゲル

年代

不明

解説

元々はドイツ人であったフォーゲルによって書かれた無名の書。出版後、この書は差し押さえられ、わずか2部を残してすべてが破

棄された。その後フォーゲル自身が謎の失踪を遂げたため、本の内容は長らく人目に触れることはなかった。ところが、残された2部をドイツの図書館に閲覧制限をかけられた上で保管されていることを見出したイーデス・ブレンドールは幸運にも閲覧を許され、その類まれな記憶力で本の内容を丸暗記、その後彼女自身の注意書きを書き加えて『呪われしものたちより』と題して自費出版を行った。しかし、残念なことに、その本の多くは出版後すぐに買い占められるか、未知の存在に盗み出されてしまった。また、イーデスは追跡者の影に怯え、街から街に移り住んだ果てに、川に遺体が浮いていることが確認された。

作者解説

A・L・I・C・Eです。ビームです。フェイズシフト・アーマーです。実は、私がこの作品でガンダムを定義する3大機構がようやく揃った回もありました。これらの機構、ガンダムが異常に強い理由付けであるほか、それぞれがストーリーに直接関わります。まあ、小道具の類ですが。もっとも、それがどのように関わるのかを説明するのはまだ早いので、解説もこのままにしておきます。

隠された禁忌の暴露であるとともに、その暴露は不完全なものに終わってしまったという事実から、『呪われしものたちより』をタイトルに設定しました。

第19話「セラエノ断章」

筆者

年代

ラバン・シュリュブベルイ

1915年

解説

ラバン博士によってミスカトニック大学図書館に預けられた翻訳本。博士はプレアデス星団に属するセラエノと呼ばれる星において、旧支配者が旧き神から盗み出した知識を保管している大図書館におかれた石版より得た知識を書き記した。残念ながらオリジナルとなる石版は割れており、その記録は不完全なものにとどまっている。そのため断章自体は非常に短いものである。しかし、断章の記載は人類史以前にまで起源を求めることができるかとされている。余談ではあるが、博士は星間を移動する異形の怪物であるビャーキーを使用する術を断章で得ていたともされている。

作者解説

この回ではA・L・I・C・Eがその力をようやく発揮し始めた回でした。A・L・I・C・Eは通常、ガンダムにおける学習機構とOSにおける重要な部位を占めているのですが、発動させることでパイロットの知覚を拡大するとともに敵機の動きを予測することで戦闘力を飛躍的に向上させます。単に強くて固いだけでは量産型モビル・スーツ相手にそう何度も大立ち回りできるはずがないと考えたため、このような機構を与えることにしました。もっとも、砂漠編ではA・L・I・C・Eを使っても倒せない相手が登場したりしますけど。

一息に新たな境地に誘う力。それはA・L・I・C・Eであり、ビャーキーであるということから、『セラエノ断章』を19話のタイトルに設定しました。

第20話「スラング年代記」

筆者

不明

年代

不明

解説

通常考えられている人類の歴史以前の書かれたとされる書物。その詳細は現在不鮮明であるが、イドラなる存在について記載されているとされる。イドラは地球誕生とともに生まれた怪物であり、捕食すると、喰らった生物と同じ姿をとることもできるとされる醜悪な怪物である。イドラは知性を有し、人の歴史が始まるとともにその能力を利用し、人々の間に潜んでいまだ生存している。その性質は邪悪であり、現在に至ってもそれは微塵も軽減していないと記されている。

作者解説

この回はラクス・クラインを登場させたり、モーガン・シュバリエとの出会いがあったり、色々詰め込んだ回であったような気がします。徐々にこの作品のテーマが表に出てきた回でもありました。原作ではムルタ・アズラエル、パトリック・ザラの2人が戦争を助長させていたように描かれていました。実は私も同じような構成になります。いきなり犯人はお前だ、といっても盛り上がりませんので、徐々に明らかにしていこうと考えています。この回が、そうした試みが強調され始めた回ではないかと考えています。

人の間に巣くい、そしてどこか世界を歪める存在。そのわずか一端でも明らかにしようとする試みが共通しているとして、『スラング年代記』をタイトルに設定しました。

タイトル解説(11-20話)(後書き)

ところで、皆様は旧支配者や外なる神という用語はご理解いただけているのでしょうか。

諸説、様々な意見ありますが、とりあえず私の見解を簡単に乘せておきます。

・旧支配者

人類以前の地球を支配していた神格。崇拜の対象となることもあり、人に対して必ずしも敵対的ではない。ただし、毒は悪意なくとも人に害なすことと同じように、その存在自体が人にとって大変有害である。

・外なる神

この宇宙の生誕にさえ関わっているとさえされる超自然的な神格。その多くは意識を失っているが、その強大すぎる存在は人類にとって害悪以外の何者でもない。

・旧き神

旧支配者と敵対していると神格。比較的人類に対して友好的とされているが、それはあくまでも旧支配者と人類が相容れない存在であり、敵の敵は味方という理屈であるともされている。そのため、必ずしも人類に寄った存在ではない。

とりあえず、こんなところです。異論様々あると思いますが、少なくとも私はこのようなイメージでタイトルを設定しています。

タイトル解説 21-30話 (前書き)

徐々に書き進めていきます。思いのほか、タイトル解説は書きにくくて困ります。

タイトル解説〈21—30話〉

第21話「怪物とその眷族」

筆者

年代

不明

16世紀

解説

クトゥルフ神話に関する記録をまとめたとされる1冊。残念ながら唯一知られているのは1冊のみであり、大英博物館に保管されていたが、1898年に盗まれてしまった。そのため、その詳細は不明である。しかし、その記載は「竜王」と呼ばれる残忍な武将の一族について割かれている。竜王は人類以前のイギリスを統治していたとされているが、詳細な記録はやはり現存していない。

作者解説

砂漠編が本格的に始動した回として、新たに登場した人との人間関係を構築しようとした回でした。ともかく砂漠編ではキラ・ヤマトとアンドリユー・バルトフェルド、アスラン・ザラとモーガン・シュバリエの2組が主題となるお話であったと思います。互いが上官ではなく、敵方の武将と接触しなければならなかったため、キラとアンドリユーは原作やらを借りましたが、アスランとモーガンはキラたちと被らない形で、かつ不自然だとかご都合主義にならないよう苦心した覚えがあります。

アーク・エンジェルが訪れる以前から砂漠に君臨していた將軍アンドリユー・バルトフェルドの存在が立ちふさがるとして、『怪物とその眷族』をタイトルに設定しました。

第22話「ダゴンへの祈り」

筆者

年代

アサフ・ウェイト

不明

解説

かのマサチューセッツ州インスマス市の住民であるアサフ・ウェイトによって書かれた。アサフは1928年に連邦政府の襲撃によって死亡している。その後、この本は彼の一族によって伝えられたとされているが、その所在は明らかでない。

作者解説

ゼフィランサス・ズールとアイリス・インディア。2人が同じ顔をしていることからクローンであろうと予見した方は多いことでしょう。しかし、まさか26人もいるなんて考えた人はいなかったことを期待しています。字数の関係上、23話に移ってしまいました。が、本来はここでヴァーリについて解説するはずでした。ちなみに、わかる人にはわかると思いますが、インスマス市の住民であるということは、ウェイト一族が人ではない可能性が非常に高いはずです。

秘密の一族が伝えている書物と、やはり一部の人たちでのみ共有されるヴァーリという存在から、「ダゴンへの祈り」をタイトルに設定しました。

第23話「クハヤの儀式」

筆者

年代

不明

不明

解説

その曖昧な内容と隠喩で、常人には理解を許されないことで有名な写本。そのため、その内容は明らかでない部分が多い。

作者解説

ようやくヴァーリの設定を出すことができた回です。ゼフィランサス・ズールのイニシャルがZ・Zであることを示しておいたりなど、それぞれの名前の由来についてヒントは出しておいたのですが、どれくらいの方に気づいていただけたかわかりません。しかし、この説明自体が実は罫でして、設定を一通り語った振りをして、まだ隠されている事実があるなど、この回でヴァーリのすべてを理解しえもらおうとは考えていませんでした。

内容が不鮮明で、必ずしも正しく情報を拾い上げることができるわけではない。そんなヴァーリを前面に出した回として、「クハヤの儀式」をタイトルに設定しました。

第24話「黒の経典」

筆者

ユー・パオ

年代

700年頃

解説

ミャンマーの学者であるユー・パオによって書かれた。地球上の生命に関する洞察が示され、その中には進化論を示す内容があるとされている。また、イドラと呼ばれる人の姿に変化することができる異形の怪物について書かれている。

作者解説

今なら明かせますが、ニュートロン・ジャマーを無効化する装置を出すための伏線を張った回でした。作中でもあります。科学とは再現性であり、その技術は金と時間さえあれば原則誰であっても再現できるものです。だからこそ軍事機密などは厳重なプロテクトがかけられるわけです。これはやはり、大西洋連邦へと流出する伏線でもあります。

イドラは姿を変え、人に成り代わってしまえます。それはどんな技術も、使い始めれば敵にも必ず使われてしまう。そんな、代わりのきくものとして、「黒の経典」をタイトルに設定しました。

第25話「屍食教典儀」

筆者

ダレット伯爵

年代

不明

解説

カルトに傾倒したダレット伯爵の書とされているが、他にも3人ほどこの書をしたためたとされている人物がいる。また、出版されたことがないともされているが1737年に出版されたという話も残されている。本の中では屍食鬼カルトに関する話題に触れられており、その内容は宮廷人を震え上がらせたとされている。

作者解説

ともかく、バクウの初登場を飾る回であったように思われます。初めてのビーム兵器を搭載した量産機であるため、どんな戦闘になるかは不安でしたが、これからビームを装備したモビル・スーツが当たり前になるため、その予行練習とは思ったよりも楽に書けた気がします。ビームを牙のように表現しようとは初めから決まっ

ていたため、人を喰らうような印象を強調しました。

人の亡骸を喰らうとされる屍食鬼について語られる「屍食教典儀」をタイトルに設定しました。

第26話「秘密を見守るものたち」

作者

ハルピン・チャーズマン

年代

不明

解説

オカルティストとして有名なハルピン・チャーズマンによって書かれた本。内容は作者の心霊実験に関するものであるとされているが、明確なことはあまり知られていない。その理由の1つは、作者であるチャーズマンが狂気の発作を起こした後、自宅アパートで殺害されていることが発見されるなど不可解な死に方をしたためでもあるようだ。

作者解説

アリスというシステムは、強いガンダムがさらに強くなってしまったため、私として扱いにくいシステムであるとともに、ガンダムが俗に言う無双をするためにはこれくらいの設定は必要だろうと判断したものでもあります。敢えてシステムの全容は明かしていないのですが、場合にはパイロットを凶行に駆り立てることがあります。

狂気に駆られた末の死。実はアリスにつき動かされ、やがて死ぬ定めにあるニコル・アマルフィの死を暗示するために、「秘密を見守るものたち」をタイトルに設定しました。

第27話「国境の要塞」

作者

年代

ロリウル・ウルビカス

183年

解説

ローマ学者ロリウス・ウルビカスによって書かれた本。本の内容はウルビカス、及びその周りの人物が体験した不可思議な事件を記録したものである。その中にはイエグⅡハなる異形の怪物による襲撃が含まれている。

作者解説

キラ・ヤマトとアンドリユー・バルトフェルドの決戦がやはり重要な要素を占めた回でした。キラが得ようとしているさらなる力は、まさしくキラが忌み嫌う存在が使役する力でもあります。キラは知らずにそれを体得するのですが、そのきっかけを与えてくれたのもやはり敵と呼ばれる存在でした。

ローマ人がそれを何とは知らずとも、その異質なる力を知ったことと同じようにキラは力を得ました。このことになぞらえて「国境の要塞」をタイトルに設定しました。

第28話「断罪の書」

作者

年代

ヤヌス・アクァティカス

1647年

解説

ヤヌス・アクアティカムがロンドンにおいて出版したとされる本であうが、残存しているものは少ないとされている。様々な魔術的な呪文、方法が記載されているほか、人類の大多数が滅びるとされる大いなる死なる出来事が記載されている。

作者解説

この回では、大西洋連邦製のモビル・スーツを初登場させるために演出に凝ったものにしました。主人公の危機に颯爽と現れて敵を倒す。ロボット物の王道ですね。ただ、主人公が最大の強敵を倒した後に現れるなど、若干ひねくれた登場をするのは私がひねくれ者だからです。同時に、この辺りでザフト優位の姿勢が揺らいでいるという流れを見せておきたかったので、デュエルダガーには少々頑張ってもらいました。

この戦闘に参加したザフト兵に多数の死者が出るほどの激戦であったこと。これが「断罪の書」をタイトルに設定した理由です。

第29話「イステの歌」

作者

年代

不明

不明

解説

遙か古代にまでさかのぼることができる魔術師の一族によって伝わってきた魔導書。3つの言語に翻訳されたこの書は、太古の時代から現在にまで伝わっているとされている。

作者解説

ニユートロン・ジャマーにまつわる2人の少年のお話が本格的に

始まった回です。この2人は未来を与えられるべき側にいながらも、ともに死に急ぐようにその命を落としてしまいます。奇しくも、ニユートロン・ジャマーを無効化する装置に関わる形で。

未来を継ぐべき若者から命を落としていく。古くから子へ孫へ、先祖へと伝わってきた「イステの歌」をタイトルに設定したのは、ちょっとした皮肉です。

第30話「プノムの羊皮脂文書」

作者

プノム

年代

不明

解説

かの著名なハイパーボリア文明の予言者プノムによって書かれた本。様々な魔術について書かれているが、その内容の中には、人類の起源が決して祝福されるべきものではないということを暗示する文面が載せられている。

作者解説

ついガンダム同士の戦闘に力を入れてしまいましたが、本来ならカルミア・キロとアイリス・インディアの話に重きがおかれる予定の回でした。ゼフィランサス・ズールは何も話したがらず、キラ・ヤマトは肝心の部分を決して教えようとはしませんでした。

それは「プノムの羊皮脂文書」にあるように、その生誕に忌まわしきものが含まれているからです。

タイトル解説く21ー30話く（後書き）

一応、こんな理由でこんなタイトルにしましたなんて書いていますが、たとえクトゥフル神話を知っている方でも、この本がタイトルに選ばれたのはこんな理由からだとは推測できる人はいないだろうと、わかってはいます。

タイトル解説 31-40話 (前書き)

タイトル解説はひどく久しぶりの更新です。ただ、本編がそろそろ終了してしまうため、少しずつでも更新していきます。

タイトル解説〈31－40話〉

第31話「魔術と黒魔術」

筆者

年代

ケイン

不明

解説

むさぼり食うものビーモスについて記載された書物。ビーモスとは世界各地で海洋神として知られている神格である。その性質は凶暴であり、人類の文明を忌み嫌っている。判然とはしないが、クトゥルフの別名であるとする説が存在している。

作者解説

人は文明を持つことで他の動物とは異なります。そして、突出した大きな力を有しています。現在、地球上に人類を脅かす生命体がいるのだとしたら、それは間違いなく人間に他なりません。第31話ではアーク・エンジェル艦内での白兵戦を描きました。実際、この襲撃は人的被害ではガンダムによってもたらされたものと同程度の損害を被っていると設定されています。文明の敵対者はあくまでも人であり、人の敵は人でしかありません。

人という文明の敵対者の襲来を指し示すものとして、『魔術と黒魔術』をタイトルに設定しました。

第32話「ルルイエ異本」

筆者

年代

不明

15000万年以前

解説

人類の歴史以前に書かれたとされる謎の書。その起源はハイパーボリア文明にまで見られるとされる。この本はクトゥルフとその眷族について詳細に扱っており、クトゥルフ・カルトの間では神聖な本として認識されている。この本は信者以外にも重要な参考資料であり、その価値は計り知れない。

作者解説

怒ると、その間は自己を徹底的に肯定しようとする意識が働いてしまいます。自分だけが正しい気がして、周りのすべてが自分のことを理解できない馬鹿であるかのように考えてしまいがちです。ただし、冷静でない頭で考え付いたことなど、もちろん正しいことではありません。両親が殺されてしまったことの悲しみを認めてもらえなかったフレイは、やはり怒りに支配されてしまいます。もちろん、怒りも正常な心の機能であることに変わりありません。ただし、それは人を決してよい方向へと導いてはくれません。

異形の聖典と怒りという感情、どちらも誤った教えであることを共通点に見出し、『ルルイエ異本』をタイトルに設定しました。

第33話「ゼゲムブリ写本」

筆者

年代

不明

不明

解説

元々は石版に描かれていたものを興したものの。写本は魔術師であるニコラス・ゼゲムブリによって作成されている。石版に書かれて

いたものは今ではゼゲムブリの印と呼ばれる非常に古い文字で描かれたものである。その内容は忌まわしきものの召喚方法などが書かれており、非常に危険なものである。ゼゲムブリが失踪した後、地元の牧師によって写本は焼かれたとされている。

作者解説

この回は、アーノルドとフレイの世にも珍しいカップリングを本格的に目指し始めた回でした。SEEDの小説は数あるとは思いますが、このマイナー・カップリングを実行したのは私だけではないでしょうか？　ただし、それまでにはいくつもの障害が横たわっていました。その1つが、フレイによる捕虜虐待疑惑です。マリュー艦長はこれを広めることを禁じました。しかし、アーノルドは敢えてそれをアイリスに伝えました。

誰もが知らなくてもいいような危険な知識であり、その対処は2つに分かれた。それが『ゼゲムブリ写本』のたどった道筋と同じであることから、第33話のタイトルは決定しました。

第34話「狂える修道士クリタナスの懺悔」

筆者

年代

クリタナス

400年頃

解説

かの『ネクロノミコン』を読んだクリタナスが、封印されていた怪物を危うく解放してしまうところであったという話が伝わっている。封印は辛うじて解かれることはなかったが、自身のしようとしていたことに恐れおののいたクリタナスは精神を病んでしまう。その後、書かれたこの本では、様々な怪物が大陸を荒らしまわった事

実と、それが現在は封印されている事実を語っている。

作者解説

オーブについて到着しました。原作とはだいぶ異なった展開になっていますが、ここで一気に伏線をより確かな形にした回でもありました。たとえば、オーブは中立国などではなくて、それは単に国外から干渉されないための方便でしかなかったこと、あるいは空母を所有していることは侵略戦争も想定していることなどです。これらは私の創作ではなくて、設定を厳密に解釈しようとした結果です。オーブのように、見えているものとは違うものが世界の裏側には潜んでいる。それが少しずつ姿を現し始めた回でした。

封印された世界の裏側の存在、それを明らかにしようとしたクリタナスの行いと重ね合わせて、『狂える修道士クリタナスの懺悔』をタイトルとしました。

第35話「緑の書」

筆者

年代

不明

不明

解説

無名の若い少女によって書かれた日記。単なる体験を書きしただけの日記であるのだが、その内容は非常に魔術的であり、偶然少女が体験した貴重な内容が記されている。そのため、クトゥルフ神話に関わる者にとって、大変貴重な資料となっている。

作者解説

この回の主題なテーマは、間違いなくゼフィランサスの過去のお

話でしょう。キーワードに生命倫理と銘打っている私にとって、ゼフィランサスの設定は大変重要でした。どこでどのように出すのかを色々考えさせられましたが、プレアに聞かせる形で明かすことができたことは自画自賛ではありますが、うまく書けたのではないかと考えています。

ただ、1人の少女が体験したことに過ぎません。ただし、それが世界にまつわる大きな出来事であつた。『緑の書』とゼフィランサスのお話は、同じ性質を備えています。

第36話「アルソフォカスの暗黒の大巻」

筆者

年代

アルソフォカス

不明

解説

魔術師アルソフォカスによって書かれた本。ラテン語に翻訳されたとされているが、本の所在は明らかではない。内容は、輝くトラペゾヘドロンに記載されているなど、その情報は強力なものであるとされている。

作者解説

YMF-X000Aドレッドノートガンダムの初陣です。初めての核動力搭載機として、GATシリーズ以上の機体であることを印象づけようとした回でした。ただ、個人的にはフレイとアイリスの和解の方がよほどテーマとして重要であつた気がします。ただ、ガンダムは世界的規模の問題ですので、とりあえずドレッドノートガンダムを前面に押し出しました。

ここは単純に、強力な機体の覚醒として、強力な様々な知識について触れられている『アルソフォカスの暗黒の大巻』をタイトルに設定しました。

第37話「ナコト写本」

筆者

年代

不明

不明

解説

人類以前の種族によって書かれたとされる書物。その起源、時代は一切が明らかではない。その内容は多岐にわたるが、特筆するなら、この本にはある種の守護者が存在するということが挙げられる。本を読むものはその守護者に対価を支払わねばならないとされているが、守護者が実在するのか、あるいは何らかの暗示にすぎないのかは明らかではない。読者は注意を払うべきであることだけは確かである。

作者解説

ドレッドノートガンダム。それは、完成を急ぐあまり、脆弱なフレームにガンダムの皮を被せたような機体でした。そのため、出力の高さについていくことができずに性能を発揮することができなかった。また、プレアは能力を高めることばかりに腐心し、その結果人としてあまりにアンバランスな存在となってしまった。彼らはともに対価を支払いましたが、果たして、得たものは本当に対価に見合うだけのものだったのでしょうか。

対価なくしては得られないものの、『ナコト写本』の知識と彼らの得た力を兼ねて、この本をタイトルに設定しました。

第38話「地底を掘るもの」

筆者

年代

ゲオルグ・ロイター・フィッシャー 1936年

解説

フィッシャーが夢より得たインスピレーションを元に書いた詩集。同様の詩集として有名なものには、『アザトースその他の恐怖』があるが、フィッシャーは影響を受けたことを認めている。その内容の中には不可解な言葉が並んだが、その意味が説明されることはなかった。なお、フィッシャーは出版の1年後、地震によって家の倒壊に巻き込まれたことで死亡している。

作者解説

キラとゼフィランサス。フレイとアイリス。この2組を和解させられたことが大きな回でした。ただし、まだ話は中盤を終えたがいいところ。まだまだお話は続きます。そして、戦争という現実は人の都合なんてお構いなしに進行してしまうものです。そして、見えているとしないに関わらず、悲劇は生じています。

アザトースその他の恐怖からなお、悪夢は続いている。まだお話は終わらないことの暗示のため、『地底を掘るもの』をタイトルに設定しました。

第39話「ポナペ教典」
筆者

年代

イマシュⅡモ

1907年

解説

神官イマシュⅡモとその子孫によって書かれた本をアブナー・エゼキエル・ホーグ船長が写本としてまとめたもの、当時、この本を出版しようとした際、宗教的な反対を受けたため、それは断念された。その後、船長の孫娘によって出版されたが、それは不完全なものでしかなかった。その後、ハロルド・ハドリー・コープランドなる研究者によって改めて出版された経緯を持つ。この本の内容はダゴン信仰について詳細に書かれたものであり、そのおぞましい内容を、既存の宗教は容認できなかったのである。

作者解説

ついにヴァーリのお父様、シーゲル・クラインが登場した回でした。実は、途中までさもエインセルがヴァーリのお父様であるかのように書いていましたが、こちらが本命です。さらに、ラタトスク社はラタトスク社で簡単な説明を入れておきました。これはムウがかつて言っていたように。世界をおかしくしている2つの存在について言及を始めた回でありました。

既存の価値観と相容れない存在の登場を、『ポナペ教典』で示しました。

第40話「淵みに棲む者」

筆者

ガストン・ル・フェ

年代

不明

解説

クトゥルフとその眷族について書かれた書物。筆者であるガストンは狂気の発作のすえ、死んだとされる。内容は深きものと呼ばれる水棲生物と彼らが崇拝する何者かを知る手がかりを詳述している。

作者解説

オーブ編が終了し、いよいよ物語が終盤に入った頃のお話です。今後に関がる展開として、様々な人物を登場させました。ムルタ・アズラエルしかり、シーゲル・クラインしかり。ブルーマンガルテンを完結させるために欠かすことができない人物が、まだその真意を明らかにしないまでもその姿を見せました。

隠された事実への大きな手がかりである『淵みに棲む者』をタイトルに設定したのは、物語がいよいよ終局へと動き出したことを意味しています。

タイトル解説〈41—50話〉

第41話「アザトースその他の恐怖」

筆者

年代

エドワード・ダービー

1919年

解説

エドワードによって書かれた魔王アザトースとの夢の中での出会いを綴った詩集。決して著名な本ではないが、他の本へ影響を与えたことで知られている。アザトースとは白痴の魔王であり、その存在は宇宙の中心であり、異形の楽団に囲まれながら自らの城で惰眠に耽っているとされている。その名前にさえ強大な力が秘められているとされ、かの『ネクロノミコン』にさえその真名は記載されていない。

作者解説

ガンダムとは、キラとゼフィランサス、そしてユツカにとっての夢でした。さらに、3人のムルタ・アズラエルにとってガンダムとは手段でしかなく、しかし、その目的とは20年にも及ぶ彼らの夢をかなえるためのものです。この回ではついに主人公のためのガンダムが登場しました。フリーダムガンダムではないどころか、格闘に特化しているというおかしな機体ですが、ブルーメンガルテンが始まった頃に完結したユニコーンガンダムをモデルにした機体になりました。ハウنز・オブ・ティンダロスを長々かけて体得させた理由の1つは、キラをこの機体に乗せるためでした。

2つの夢と悪夢との邂逅を描いたこの回を示すものとして、『アザトースその他の恐怖』をタイトルに設定しました。

第42話「惑星の歴史」

筆者

年代

ローラン・ド・ロンネ

1792年

解説

フランス人ローランによって書かれたとされる本。ただし、修道士エーベンハルト・ケツアーの作だとする説も存在する。この本には天球の音楽なる耳障りな音楽について記述されている。その音楽を耳にすると、様々な影響が出ることを書き記している。

作者解説

この回は、アラスカ編を終えて新しくオーブ侵攻に移る間際の回でした。最大のテーマはなぜ大西洋連邦はオーブへ侵攻したのか。原作ではよくわかりません。とりあえず、マスドライバーがあったからくらいしか。ブルーメンガルテンでは、ここでは敢えて明らかにせず、言葉の遊びを楽しんでいるかのようなエインセルの様子を描きました。単なる個人でしかないエインセルの言葉が大きな影響を与える。

そんな様子を、同じ言葉の組み合わせである音楽と言葉で表現するため、『惑星の歴史』をタイトルとしました。

第43話「アザトースの書」

筆者

年代

不明

不明

解説

魔王アザトースに仕える無貌の神ニャルラトテップが所有するとされる書物。その内容は冒瀆的であり、神を愚弄するものであるとされる。また、アザトースに忠誠を誓う者はこの書に血の署名をしなければならないとされる。

作者解説

ZZ-X000Aガンダムオーベルテューレがその真の力を発揮した回でした。しかしその力は魔王とまで呼ばれるエインセルが与えたものです。普通に生きていくにはあまりに過ぎた力であり、またゼフィランサスを利用して作られた力でもあります。それはキラにとって最も忌むべき力でもあります。ガンダムを得ることそれ自体、魔王の力を借りることに他ならないのです。

エインセルとアザトース。共に魔王と呼ばれる両者との契約がここに成ったことを示すため、『アザトースの書』がタイトルに選ばれました。

第44話「黄衣の王」

筆者

年代

不明

1891年

解説

起源は諸説あり判然としない戯曲。その内容は幻想的でありそして破滅的。黄衣の王と呼ばれる恐るべき王が登場するこの戯曲は、見た者を狂気に誘うとまでされている。その詳細な内容は、2説別れるが、どちらも黄衣の王の恐ろしさと悲惨な結末は共通している。

作者解説

ZZ-X300Aフォイエリヒガンダムが初登場した回でした。この機体は通常のモビル・スーツの1.5倍もの大きさを持ち、全身が金色というあまりに異質な機体であるとともに、主要なオリジナル・キャラクターの中で唯一の男性であるエインセル・ハンターの専用機ということもあって思い入れのあるものになりました。この回ではそのお披露目ということで、印象深い回となりました。

エインセルの魔王とも言える力と、黄金の機体。『黄衣の王』となぞらえるため、この戯曲をタイトルに設定しました。

第45話「ムンⅡラス・パピルス」

筆者

年代

イブン・シヨダトウア

不明

解説

イブンによって翻訳され、注釈をつけられた本。旧支配者についてかかれており、大きな手がかりとなる資料であるとされる。

作者解説

今回は、エインセル・ハンターに続き、世界の裏から大きな影響を与え続けてきたムルタ・アズラエルの1人、ムウ・ラ・フラガが前面に出た回でした。本当はザフト軍の戦いがメインなのですが、それはあくまでもこの場限りのお話です。ところが、ムルタ・アズラエルは今後重要なキャラクターです。

旧支配者のように世界の裏側に潜みながら影響を与え続ける存在としてのムルタ・アズラエル。『ムンⅡラス・パピルス』がタイト

ルに選ばれた理由はそのためです。

第46話「ヨハンセンの手記」

筆者

年代

グスタフ・ヨハンセン

不明

解説

1925年3月23日に死の都ルルイエに足を踏み入れた船員ヨハンセンの書き記した手記。その訪問は偶然であったが、その体験は大変貴重なものであり、クトゥルフの研究を行うものにとって有益なものである。

作者解説

イザーク・ジュールの部隊から裏切り者が出ました。イザークは議員の子息でありながら、家を飛び出し、自身を単なる一兵卒と思いついて戦ってきました。ところが、議員の子息というのは政治的に利用価値が高く、イザークが望むと望まざるとに関わらず陰謀に限りなく近い場所にいたのです。イザークの場合、偶然ではないにしろ、何気なく世界の裏側へと足を踏み入れてしまいました。

偶然と必然の違いこそあるにしろ、世界を蝕む悪意に触れてしまった様を、『ヨハンセンの手記』として表現しました。

第47話「ミサ・ジ・レクイエム・ペル・シュジャイ」

筆者

年代

ベンウェヌト・チエティ・ボルジゲラ 1768年

解説

イタリア語で書かれたオペラ。ただの1度しか公演されなかったにも関わらず、当時の教皇によって上映禁止の処置がとられた。この際、ボルジゲラは異端の疑いで捉えられ、投獄された翌年に処刑されている。オペラに使用される音楽は、未知の楽器が使用されていること、発音不可能な音程が用いられていることなどから、演奏不可能である。内容は魔王アザトースを崇拝するシャツガイなる昆虫について語られている。このオペラを最後まで演奏すると、アザトースの召喚に成功するとされている。

作者解説

とりあえず、ちょっと休憩です。オーブ編が無事に終わったことで、次の舞台に移るための準備をしていた回です。新しいモビル・スーツが登場したり、伏線を張ったりしていました。言わば、次の舞台を招くための準備の回です。

召喚と準備。両者に共通点を見出すことで、『ミサ・ジ・レクイエム・ペル・シュジャイ』をタイトルとしました。

第48話「アフリカ各部の考察」

筆者

年代

ウェイド・ジャーミン卿

不明

解説

コンゴの探検を3度にわたって行ったジャーミン卿によって書かれた。ただし、彼はその発見よりも奇行によって知られ、ついには精神をやんで入院してしまうほどであった。本の内容はコンゴに存

在する白人文明の遺跡について触れられている。

作者解説

準備期間第2弾。キラとゼフィランサスの2人がこのブルーメンガルテンの中で重要なキャラクターであることは間違いありません。よって、この2人がどのような場所を目指しているのか、それを示すための伏線をしっかりと張っておこうと1話を用いた回でした。もちろん、彼らは普通に好き、嫌いで割り切ることはできない特殊な関係と立場にあります。2人は真摯に行動しながらも、それは傍から見たなら異常なものに他なりません。

ゼフィランサスを縛り付ける狂気と筆者のたどった末路を重ね合わせ、『アフリカ各部の考察』をタイトルとしました。

第49話「魔術師の知恵」

筆者

年代

オスタネア

不明

解説

偉大なペルシアの炎の魔術師オスタネアによってラテン語、ギリシア語で書かれた本。ローマ時代にはすでに稀少な本であり、現在では閲覧すること事態ほぼ不可能であるとされている。中には様々な神格にまつわる様々な呪文が記載されているほか、ある神殿が焼き払われた本当の理由について書かれている。

作者解説

核がはじめて使われた回です。このブルーメンガルテンでは主戦場が宇宙であるということもあり、核兵器そのものについては比較

的無頓着に描いています。あくまでもテーマは人であり、どのような兵器かが問題ではなく、どのような人が扱うかを問題としているためです。ムルタ・アズラエルは核を使いザフトを焼き払いましたが、その真意を垣間見せるのはまだ先の話となります。

焼き討ちの理由が鮮明ではないという事実と、その事実を記した本が閲覧できないことをかけて、『魔術師の知恵』と設定しました。

第50話「ヴァチカン写本」

筆者

年代

不明

不明

解説

ヴァチカン市国図書館で発見されたマヤの本。創世神話について記載されているが、それは一般に知られているものとは異なっている。そこにはイグと呼ばれる人類の起源となった存在が記されている。

作者解説

散々引っ張っておきながら、ユニウス・セブンの真実をついに公開です。ただし、ブルーメンガルテンのオリジナルですが。この回はこれまで細切れにした形で明かしてきた内容を取りまとめる回です。それは、当然血のバレンタイン事件で語られる顛末とは異なります。この真実との相違が、プラントという国の考え方とそのあり方を徐々に明かしていくこととなりました。プラントの問題点を前面に出すようになったのは、この回からです。

血のバレンタインとして語られた事実と異なる真実。それは、す

べてのはじまりとも言えるこのお話は異なる創世神話について語る『ヴァチカン写本』と通じるものがあるとタイトルに選択しました。

タイトル解説「51」最終話

第51話「ヴィクトリア時代のクトゥルフ」

筆者

年代

ラバン・シュリユズベリイ

1929年

解説

ミスカトニック大学教授であるラバン・シュリユズベリイが20年にも及ぶ行方不明の間に大学出版局より出版された本。この本には19世紀末に、世界は非常に危機的状況にあったことを示している。つまり、クトゥルフとその眷族が勢力を回復しようと大きく動き出したことを意味する。

作者解説

いよいよ、物語終盤がスタートした回です。主に戦場に向かうジャスミンの動きを追いながら、プラントとは何か。大西洋連邦軍の動向はどうかなど、お話を膨らませた回でした。

後の歴史がもしあるのだとすれば、あの時、世界はあまりに危険な状況にあったと記載されるであろう戦争の始まりです。『ヴィクトリア時代のクトゥルフ』がタイトルに設定されたのは、そんな戦争を描こうとする覚悟と決意の表れです。

第52話「イラーネクのパピルス」

筆者

年代

不明

不明

解説

大英博物館にある写本のみが確認されている。ドリームランドと呼ばれる土地で書かれたとされるこの本は人の起源について触れている。

作者解説

ジャスミンのことが大きく取り上げられた回でした。人は、何と言おうと生まれた時に大体の方向性は決められています。多くの場合、才能だから仕方がないと偶然を受け入れて生きていきます。ところが、もしそれが意図的に仕組まれた素質であるとすれば、誰かの意図したとおりに生きなければならないということなのでしょう。うか。

人とジャスミンの起源。『イラーネクのパピルス』がタイトルに選ばれたのはそんな理由からです。

第53話「ゴール・ニグラス」

筆者

年代

不明

不明

解説

地球上には1部しか現存していないとされる書。現在中国の僧院に保管されているとも、実はミスカトニック大学に貯蔵されているともされている。ただし、どちらも閲覧は困難な状況にある。その理由として、この本は長らく忘れ去られていたためである。

作者解説

原作では、とにかくナチュラルを持たざる者、コーディネーター

を持つ者として描いています。果たして、本当にそうなのでしょう。能力のない人間はすべて能力のある人間に羨望の眼差しを向けなければなりません。能力のある人にはない人を見下すことが許されますか。それはあくまでもコーディネーターの社会とその価値観でしかありません。それでは、この戦争の本当の姿は見えてはきません。

コーディネーターが忘れている事実と、存在を忘れられた本。『ゴール・ニグラス』が示すのは忘れてはならない真実そのものです。

第54話「カグワモン・クタート」

筆者

年代

アドルフアス・クレステロス

13世紀

解説

地中にすむ異形のものについて書かれているとされる本であるが、その特徴はスレストロス自身がホワイウィという独自の言語で書かれていることにある。何故そうしたのかについては不明であるが、ある秘密のカルト団体によってラテン語の注釈が加えられている。

作者解説

この回は、いよいよ最終決戦、ということと最後の伏線回収の場であり、終わりへの足がかりをつくる場所でした。内容はそれぞれの戦う理由などが表されていますが、人の行動は様々な解釈可能であり、解釈次第ではまったく正反対の結論に落ち着いてしまうことがままあります。

解釈こそが大切である。この『カグワモン・クタート』をタイト

ルとして託したのは、そんなメッセージです。

第55話「マレフィキウム写本」

筆者

年代

不明

不明

解説

残存するものはヴァチカンに保管されている。閲覧は禁じられているが、この本はほかのいくつかの写本と非常に類似しているとされている。

筆者解説

決戦前夜。まさに戦いを前にした最後の夜です。登場する人物は様々な悩みや苦悩を抱えて最後の夜を思い思いにすごします。それは珍しいものではありません。人は誰しも悩み、そして支えあっているのですから。そして、2人きりのお話は、本来であれば他の誰かが見ていいものではありません。

見てはならない出来事を少し。『マレフィキウム写本』が選ばれたのは、ごく普通に悩む人々のお話を語るためです。

56話「イエーの儀式」

筆者

年代

ニゴウムⅡゾーグ

不明

解説

預言者ニグウムⅡゾーグによって書かれたとされる本。この本はかのエイボンの蔵書に加えられていたとする話もあれば、アブドウル・アルハザードが若き日に弟子入りした魔術師が所有していたともされている。この本に記載された31の儀式のうち、31番目に語られる異形の神格を呼び出す呪文は、術者が最悪の危機に陥った場合のみ使用すべきとされている。

作者解説

ジェネシスが使用されました。この兵器はとにかく威力とその範囲が大きく、地球に照射すれば全土に被害が及ぶということは公式設定です。これを持ち出すことは非常に危険であることは言うまでもありません。同時に、話の流れを決定付けてしまおう、まさに最終兵器です。

『イエーの儀式』。ここに語られる儀式とジェネシスの共通点から、タイトルにふさわしいと考えました。

第57話「ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究」

筆者

年代

ラバン・シュリユズベリイ

1913年

解説

ミスカトニク大学教授シュリユズベリイによって書かれたこの本は、クトウルフの研究者として著名なシュリユズベリイのクトウルフ・カルトの儀式と活動に関する推測が述べられている。その後、シュリユズベリイ教授は20年にもわたる謎の失踪を遂げることとなる。

作者解説

少々原作の展開を早めて、ブルー・コスモスの、地球軍の側の視点から最終決戦を描いた回です。

ブルー・コスモスは何故コーディネーター排斥を謳うのか。そして、それがどうして軍内で強大な影響力を有するに至ったのか。様々な考察を積み重ねた、その結論を示すのがこの回からのお話です。

おこがましいとは言え、私なりの考えを示すものとして、『ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究』と同じベクトルの内容であると考え、これをタイトルとしました。

第58話「モノリスの人々」

筆者

年代

ジャスティン・ジェフリー

1926年

解説

ジャスティンによって書かれた詩集である。これは、彼が旅行で訪れたハンガリーのズトゥルタンとして知られていることに何らかの関連を見出すことが可能であるとされている。何故なら、その詩の内容は不吉なものであり、またズトゥルタンとはカルトによって近隣の村から攫ってきた生贄を神へと捧げる場所であるからである。また、イスラムの軍隊によって徹底的な破壊がなされた場所でもある。ジャスティンは旅行の後、精神を病んでしまった。1982年にこの本を題材に映画が製作されたが、上映された映画館が謎の崩壊に見舞われ、フィルムは封印された。

作者解説

地球を救うためプラントに攻撃を仕掛ける地球軍と、プラントを

救うため地球を滅ぼそうとするザフト。どちらも正しいことなど決してしてはいません。地球軍は核さえ躊躇うことなく使用し、味方の犠牲を厭わないばかりかプラント要人の子息を暗殺するような手段にまで及んでいます。ザフトはプロパガンダを繰り返し、国民にさえこの戦争の真の姿を見せないままその理想を肥大させていく一方です。ただ、どちらにも大義名分は存在し、だからこそ戦いは続きます。そして言い訳とは、相手に対して通じる必要は一切ありません。ただ、自分たちが正しいと思い込ませてくれれば、それです。分なのです。

カルトも世界も、言ってしまうえばどちらも自分たちの世界と価値観を守っている点においては変わらない。カルトの地、ズトゥルタに影響されたとされる『モノリスの人々』がタイトルに設定されたのは、そのような理由からです。

第59話「ヤデイスからの幻視」

筆者

年代

アリエル・プレコット

1927年

解説

オークディーン療養所に入院しているアリエル・プレコットによって書かれた詩集。それはアリエルが毎晩見る夢に触発されたものであった。出版後、一時期ロンドンのオカル好きな大学生の間で流行したが、アリエルの親族は本をほとんど購入し、そのことごとくを破棄してしまった。アリエルが見た夢とは、地球から遠く離れた惑星ヤデイスにおいて、母星を救おうとする人々の戦いとその最後の日々を綴っている。

作者解説

最終回まで後1話。そこで、すべての情報を並べ終えたとしてそれぞれの登場人物の立場を明確にした界でした。地球軍につけば地球を救うことができる。ザフトにつけばコーディネーターを救うことができる。それぞれの人がこれまでの戦いや出会いと別れを踏まえて一体何のために戦うのかを定めた回でした。はじめから地球軍にいた者はいれば、地球軍に協力したものもいるでしょう。ザフト軍に残るとははじめから決めていた者もいました。作中では表現されていませんが、もしかするとザフトに協力を表明した人もいたかもしれません。ただ何にせよ、最後の瞬間が近づいています。

最後の戦いとそれまでの日々を描いた『ヤデイスからの幻視』はこのタイトルに相応しいものと考えました。

最終話「キタブ・アル・アジフ」

筆者

年代

アブドウル・アルハザード

不明

解説

クトゥルフ神話に関わる者ならばエイボンの書と並んで必読の書とされるあまりに著名な書。通常ネクロノミコンと呼ばれる書のアラビア語の現代である。アラビアの狂える詩人アブドウル・アルハザードによって書かれたとされるこの書はいまだ謎が多い。その後様々な言語に翻訳されたが、現在までに完全なものは数えるほどしか存在していないともされている。内容はそのため判然としないことも多いが、様々な異端の知識について書き記されているとされる。なお、アルハザードはこの本を執筆後、暴露が異形の神の怒りに触れたのか、生きながらして不可視の獣に体を喰い散らかされたとき

れている。

作者解説

最終回で、張った伏線や、人々の話のすべてを終わらせなければならぬ回でした。正直な話、これでよかったのか、もう少し別の書き方があったのではないか、こんな伏線を張った方がよかったのではないかと後悔や悔恨はつのるものです。ただ、それでも終わらせなければなりません。

不完全でも、それでもガンダムSEED Blumen Gart enのすべてを書き記す回にしたかった。そんな決意を込めて、『キタブ・アル・アジフ』を最終回のタイトルとしました。

モビル・スーツ解説〜大西洋連邦〜（前書き）

モビル・スーツの解説です。ちなみにこの解説も例に漏れず、設定の変更と捏造が多々あります。特に、デュエルダガーは原作でいうところのストライクダガー、ストライクダガーは105ダガーのことです。

モビル・スーツ解説〜大西洋連邦〜

G A Tー01デュエルダガー

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.0m 55.3t 1250kw

武装

57mmビーム・ライフル

ビーム・サーベル

頭部バルカン砲

シールド

100系フレームのG A TーX102デュエルガンダム、G A TーX105ストライクガンダムの両者の形質を受け継ぎながら、簡略化された装甲を有する。色合いはデュエルに近いものが採用されており、灰色を基調としたものである。ガンダムとの相違は、目の形状がゴグル型、ブレード・アンテナが額ではなく側頭部に1本だけといった部位に見られる。

大西洋連合初の量産型モビル・スーツ。デュエルガンダムの量産型と言える機体であり、特色がない代わりにビーム兵器を安定して運用できるなど、一定の成果を上げている。ジェネレーター出力の関係上、ガンダムほどの火力は持ち得ないが、ビームを使用できるという事実はザフト軍モビル・スーツを圧倒するに十分である。

G A Tー01A1ストライクダガー

機動戦士ガンダムSEED MSV

全高 重量 ジェネレーター出力

18.0 m 57.1 t

1420 kW

武装

ビーム・サーベル×2

頭部バルカン砲

エール・ストライカー装備時

57mmビーム・ライフル

ビーム・サーベル×2

ソード・ストライカー装備時

対艦刀高出力ビーム・サーベル

射出アンカー

ランチャー・ストライカー装備時

高出力ビーム・ライフル

肩部バルカン砲

GAT-01デュエルダガーとは異なり、ガンダムを簡略化したものではなく、より量産機として洗練された装甲を有する。ゴーグル・タイプのカメラを搭載しているが、アンテナは2本に増設され、よりガンダムに近い印象となっている。背部には各種ストライカーを装備可能であり、GAT-X105ストライクガンダムの正式な量産機であると言える。

大西洋連邦軍の量産型モビル・スーツでありながら、生産コストの高さから主力機とはなり得ない。現在のところ、指揮官機、あるいは熟練兵のための機体と認識されている。しかし、その性能と汎用性は高く、デュエルダガーとは一線を画す機体である。

GAT-X102デュエルガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力
17.5 m	61.9 t	1710 kw

武装

57mmビーム・ライフル

ビーム・サーベル×2

頭部バルカン砲

シールド

白みがかった装甲を基調としつつ、胸部、膝などの各所に青を配色している。股関節、足首を防備する装甲が廃されており、性能の維持と低コスト化が試みられている。バック・パックはビーム・サーベルの台座とスラスターを兼ねたもので、箱型のシンプルな作りながら安定した性能を発揮する。

軍需企業ラタクス社のゼフィランサス・ズール技術主任によって開発された5機の機体群の1機。最も基本的な性能を有する10系フレームの初号機である。そのため、ガンダムというモデル・スーツの基本形であると言える。そのため、特色がなく、言葉を選ばなら汎用性が高く、言ってしまうなら特徴がない。まさに特徴がないことが特徴である。だが、フェイズシフト・アーマー、A・L・I・C・E、ビーム兵器を装備し、その性能はザフト軍のモデル・スーツを圧倒する。

当初、テスト・パイロットによって稼働中にザフト軍の襲撃に遭遇した。結果として、コクピットを破壊されパイロットが戦死するという苦い初陣を飾ることとなった。その後修復されるとパイロットには志願兵であるアイリス・インディア2等兵が任命されるも、出撃直前のトラブルによって同じく志願兵であるサイ・アーガイル2等兵によって運用される。同じくGATシリーズに数えられる、鹵獲されたGAT-X103バスターガンダムと交戦するも、中破

させられ、パイロットが行方知れずとなっている。2度もパイロットを失うという数奇な運命をたどったデュエルだが、以後アイリス2等兵が正式なパイロットとなり、砂漠の虎支配する北アフリカ戦線を戦い抜いた。その後、オーブにてラウ・ル・クルーゼを退けるも、YMF-X000Aドレッドノートと対峙するも、圧倒的な性能差の前に撃墜されている。

GAT-X1022ブルデュエルガンダム 機

動戦士ガンダムSEED C.E.73 STARGAZER

全高 重量 ジェネレーター出力

16.9 m 84.5 t 1710 kw

武装

ビーム・ピストル×2

ビーム・サーベル×2

レールガン

頭部バルカン砲

GAT-X102デュエルガンダムの改修機。機体本体にはほとんど手が加えられたおらず、鎧のような外部追加装甲によって機体の印象を変えている。装甲は渋い水色と深い青で構成されており、上半身に集中している。また、背部には突き出る形で大型のスラスタ・カバーが増設されており、特徴のなかったデュエルガンダムのシルエットを大きく変えている。

あくまでもモビル・スーツの基本設計のための開発が行われたデュエルガンダムを追加装甲によってどのような性能向上が見込めるかを判断するための実験機である。フェイスシフト・アーマーの弱点である衝撃に対する脆さを多重装甲による衝撃緩和によって防御する試みがなされており、増設されたスラスタとともにブルデュ

エルガンダムは凶暴な接近を可能とする機体となっている。

運用当初はカズイ、後にサイ・アーガイルであったことが判明するブーステッドマンによって使用され、堅実な戦果を叩き出した。しかし、サイの肉体強化の副作用が顕在化するにつてその戦い方は徐々に安定を欠くものとなった。最終的にキラ・ヤマトの搭乗するZZ-X000Aガンダムオーベルテューレを相手に果敢に攻撃を仕掛けるも、暴走にも近い戦い方が通用するはずもなく胴体へ攻撃を与えない形で大破させられてしまった。

GAT-X103バスターガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.9 m 84.2 t 1860 kw

武装

94 mmビーム・ライフル

350 mmレールガン

肩部220 mm6連装ミサイル

腰部に多節アームで連結された2丁の長大なライフルが特に目を引く。砲撃に特化した機体であり、射撃時の反動に耐えられるよう、胸部に重厚な装甲が採用されている他、肩、膝などの関節を守る装甲が他機に比べ大型である。色は象牙色を基調として、胸から肩にかけてダーク・グリーンで塗装されている。

100系フレームの2号機。射撃に秀でた設計思想が盛り込まれている。その反面格闘用の武装は一切ない。だが、素手による格闘戦が可能なほど優れた基本設計が施されている。基本戦術は右腰に装備されたビーム・ライフルに攻撃力を依存し、左のレールガンで牽制を行うものである。また、2丁のライフルは連結することが可

能であり、その場合、ビームの射出速度を高めるなど、より高い射撃能力を発揮することが可能である。

GATシリーズとして開発されたが、ザフト軍によって奪取され、以後アスラン・ザラの乗る機体となる。圧倒的な火力を生かし、宇宙要塞アルテミスを破壊するなどの武功を挙げている。パイロットであるアスランの安定した運用から相手を選ばず高い性能を見せた。その後戦場を地球に移した後も戦いを続けたが、友軍を逃がすため殿を務める仲間を援護しようとして圧倒的不利な戦況の善戦するも大破している。

GAT-X103APヴェルデバスターガンダム 機

動戦士ガンダムSEED C.E.73 STARGAZER

全高 重量 ジェネレーター出力

18.5m 99.4t 1860kw

武装

ビーム・ライフル×2

350mmレールガン×2

バヨネット×2

肩部220mm6連装ミサイル

GAT-X103バスターガンダムの改修機。頭部センサーを防備するバイザーが大型化し、腰のライフルを両方とも中型ビーム・ライフルに、両肩にレールガンが増設されるなど、大きな改修が加わっている。暗い緑の色が装甲、ライフルにも採用されており、全体としてより重厚かつ緑を意味するヴェルデにふさわしい印象である。

バスターガンダムが射撃にこそ特化しながらも格闘用の兵器を持たず、2丁のライフルのみでは弾幕をはるということができなかった。

た点を踏まえ、火力を抑えながらも銃器を増設、総合的な火力向上が追求されている。バスターガンダムが狙撃に重点を置いた機体であるとするならば、この機体は砲撃の特化した、点ではなく面の攻撃を行う機体である。

ブーステッドマンであり、ヴァーリでもあるロベリア・リマによって運用された。ロベリアは機体特性を掴んだ戦い方を心得、GAT-X1022ブルデュエルガンダムとの連携は様々な場で見られた。しかし、ブーステッドマンそのものが不安定な面を有しており、戦闘中に発作を起こしたことでその隙をつかれることでコクピットを破壊されている。

GAT-X105ストライクガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力

17.7m	64.8—85.1t	179

0kw

武装

ナイフ×2

頭部バルカン砲

エール・ストライカー装備時

57mmビーム・ライフル

ビーム・サーベル×2

ソード・ストライカー装備時

対艦刀高出力ビーム・サーベル

射出アンカー

ランチャー・ストライカー装備時

高出力ビーム・ライフル

肩部バルカン砲

胸部の青、腹部の赤を除いた部位の装甲が白い。ストライカーと呼ばれる背中に装着する換装機構の使用するためにバック・パックがなく、スラスターが下に向けられている。ザフト軍のモビル・スーツの装甲が防弾性を鑑みて丸みを帯びたものであるのに対して、角張った装甲が採用されている。そのためより力強いシルエットになっていることに加え、開発者の決してザフトの2番煎じではないという確たる信念を感じさせる機体である。

100系フレームの3号機。換装によって汎用性の向上を試みられた試作機である。母艦と連携し、様々な性能を発揮すべく開発されたが、モビル・スーツの汎用性を高めるために汎用性に乏しい戦艦と足並みを揃えなければならぬという自己矛盾に陥っており、その試みは成功したとは言いがたい。また換装装備であるストライカーなしでは戦闘力が極端に低下する弱点を抱えている。今後の課題の多い機体であると言える。

志願兵キラ・ヤマトによって扱われたこの機体は、キラの類まれな操縦技能から高い戦闘力を発揮した。敵対する機体はガンダム・タイプを除きことごとく撃墜され、総撃墜数は30機を超える。しかし、多様な換装機構は格闘戦を得意とするキラには無用の長物でしかなく、次第にソード・ストライカーが選択される傾向が強まった。なお、ストライカーを装備しない状況での戦闘も少ない回数ではない。主な戦果として砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドを撃墜し、また、核動力を搭載したYMF-X000Aドレッドノートガンダムを相打ちながら撃墜している。オーブで大破するまで、アーク・エンジェル的主力として活躍を続けた。

GAT-X105 ストライクノールガンダム 機

動戦士ガンダムSEED C.E.73 STARGAZER

全高 重量 ジェネレーター出力

17.7 m 90.5 t 1790 kw

武装

ビーム・ピストル×2

ビーム・ブレイド×2

レールガン×2

頭部バルカン砲

GAT-X105 ストライクガンダムの改修機。ストライクガンダムとは細部を除いた形状こそ変更されていないが、全身を黒、灰色と暗い色調でまとめているため、その印象は大きく異なっている。背部には専用の追加装備であるノール・ストライカーが装備されている。これはウイングとウェポン・コンテナを兼ね備えたものであり、これ自体も黒い。全体が鋭角な外観であることと相まって悪魔じみた姿をした機体である。

本来は新型ストライカーの実験機として開発が進められた。ところが100系フレームの中で換装機構の実験機として開発されたストライクガンダムによって換装機構の欠点が露呈したことを受け、急遽開発中であつたノール・ストライカーを汎用固定装備として設計し直した機体である。そのためストライクガンダム本来の設計思想である幅広い汎用性こそ失われたが、3つのストライカーの性能を高い次元で併せ持つにいたり、距離を選ばない性能を発揮することとなった。

Hのヴァーリであるヒメノカリス・ホテルによって運用された本機はその機体特性を十二分に発揮、距離を選ばない安定した戦いを見せた。アスラン・ザラ、キラ・ヤマトの2人とも互角以上の戦いを演じており、その性能は決して低くはない。しかし、アリスの力

によってその性能を最大限に引き出されたG A T-X207SRネロブリッツガンダムとの戦いで中破。ヤキン・ドゥーエ内に放置された。

G A T-X207ブリッツガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.6 m 73.5 t 1850 k w

武装

57 m m ビーム・ライフル

ビーム・サーベル

射出兵器

全身が黒くまとめられている。装甲は丸みを帯びたものでありながら端々が鋭角になっており、他のガンダム・タイプとは異なった設計思想が組み込まれていることがわかる。後ろに大きく突き出たノブル・カバーによってスラスターが守られている独特の構造が採用されている。実験的要素の極めて強い独特の形状をしている。

200系フレームを有する試作機であり、装甲表面のフェイズシフト・アーマーの密度を調整し電波を吸収する完全なステルス性能を発揮することが可能である。複合兵装、射出兵器などユニークな武装が多く、特殊な機体であるからには汎用性を求める必要はないという製作者の遊び心が垣間見える。しかし、武装を腕に集中してしまうという構造でもあり、改善点がないではない。

ザフト軍によって奪取されたガンダムの1機であり、奪取を担当したディアッカ・エルスマンがその後もパイロットを担当した。しかし、ユニウス・セブンにおける戦いにおいてディアッカが敵の捕虜となったことでニコル・アマルフィがその役割を受け継いだ。し

かし、ニコルはガンダムの性能を恐れるあまり暴走し、その結果仲間へ攻撃を仕掛けてしまう。そのことの贖罪を果たすように殿を務め、G A T-X105E ストライクノワールガンダムにコクピットを破壊されている。その後、大西洋連邦軍に回収された本機はG A T-X207SR ネロブリッツガンダムへと改修が施された。

G A T-X027SR ネロブリッツガンダム

機動戦士ガンダムSEED Δ A S T R A Y

全高 重量 ジェネレーター出力

不明 不明 1850kw

武装

57mmビーム・ライフル×2

ビーム・サーベル×2

基となったG A T-X207ブリッツガンダム同様黒を基調とした機体であり、その外見に大きな変化は見られない。しかし、右手のみであった複合兵装が両腕に増設され、背部の武装に変更が見られている。

武装を実戦データから汎用性の広いものに変更されている反面、特色のないものとなってしまっている。だが、それは裏を返せば特化してはいなくとも安定した性能を発揮できるということである。また、その最大の特徴は背部の構造に施されたミノフスキー・クラフト・システムである。核動力搭載機ではないため一部にしか使用されていないが、この機構によって飛行能力を獲得し、機動力を高めることとなった。

G A T-X207ブリッツガンダムに引き続き、パイロットはディアッカ・エルスマンが務めた。ステルス機構は強化されているはずだが、ディアッカが部隊長として小隊行動を行うことが多く、そ

れが生かされることはなかった。宿敵とも言えるGAT-X105
Eストライクノワールガンダムとは3度に渡る戦闘を行い、圧倒さ
れるも、アリスの力を借りることで逆転を果たしている。しかし、
パイロットであるディアッカの意志により不殺の戦いが貫かれ、敢
えてコクピットを外した攻撃によって大破させられている。

GAT-X303イージスガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.9 m 79.6 t 1800 kw

武装

60 mm ビーム・ライフル

580 mm 腹部ビーム・ライフル

ビーム・サーベル×4

シールド

全身を赤で覆っている。袖口、つま先に備えられたプレート、及
びトサカ状のセンサーは白い。可変機構を有する機体であり、その
形状は独特である。バック・パックは変形時に機体の重心を整える
ために後ろに突き出す構造となっており、スラスターが配置されて
いない。スラスターは腰に備えられた幅広のバインダーに設置され
ており、推進力の大部分をこのバインダーに依存している。変形と
いう機構のために各機関を精巧なパズルのように配したこの機体は
芸術のようでさえある。

300系フレームの特徴は可変機構である。C・E・71の技術
力では可変機構機を開発するには30 mを超えるほど大型化するか、
あるいは装甲を極端にすり減らさなければ不可能と言われていた。

その問題点を完全に克服した本機はガンダムという機体がどれほど優れた設計で開発されたかを証明する好例である。高い機動力と攻撃力は戦艦さえ脅かすものであると実証されている。

カガリ・ユラ・アスハによって持ち出されたこの機体は、そのままカガリの手によって大西洋連邦軍、ザフト軍の両軍に攻撃を仕掛けた。GATシリーズの中で唯一可変機構を有する機体であったが、カガリはこれを使いこなしてみせた。しかし、オーブ攻防戦においてZZ-X300AAフォイエリヒガンダムと交戦。すべてにおいて上を行くフォイエリヒガンダムの性能に圧倒され、大破させられた。その後、修復とともに武装の調整が計られ、GAT-X303AAロッソイージスガンダムへとその姿を変えた。

GAT-X303AAロッソイージスガンダム

機動戦士ガンダムSEED C.E.73 Δ ASTRAY

全高 重量 ジェネレーター出力

18.9m 不明 1800kw

武装

60mmビーム・ライフル

580mm腹部ビーム・ライフル

ビーム・サーベル×4

シールド

GAT-X303イージスガンダムの赤をより深くした深紅の機体である。シルエットはイージスに順ずるが背部に新たに1対のユニットが増設されている。これによってモビル・アーマー強襲形態は6本の爪を展開可能であり、また、ユニットを足として使用することで4本足の形態へと新たに変形が可能となった。

ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムとの戦闘で大破したイ

ījスガンダムを基に再設計がなされた機体。基本的なコンセプトは同様であるが、細部に改良が計られている。よく言えばījスと同様の感覚で扱えるということだが、大きく性能が向上している訳ではない。

カガリ・ユラ・アスハによって運用された本機は、ザフト軍として月面からプラントに至る戦いを戦い抜いた。カガリは機体そのものを扱いこなしてはいたが、特化した性能がなく、目だった戦果を上げることはできなかった。しかし、パイロットの性格にしては不似合いなほど堅実な戦いに努め、ジェネシス破壊に貢献した。その後、閉鎖される隔壁に押し潰される形で消失したが、パイロットであるカガリは無事に脱出している。

ZZ-X000Aガンダムオーベルテューレ

オリジナル

全高

重量

ジェネレーター出力

19.7m

54.6t

2980kw

武装

ビーム・サーベル×4

全身を未塗装と見紛うような白で覆われている。ガンダムの名を冠しながら、ガンダム・タイプとは思えない特徴を有する。装甲の形状は際立って特殊なものではなく、GAT-01デュエルダガーなどの量産機を彷彿とさせるもので、継ぎ接ぎされたような切れ目の入った装甲は不恰好と評された。また、ブレード・アンテナは角を思わせるものが見られるだけであり、ガンダムでいうところの顔を持たない。

ミノフスキー・クラフト・システムなる特殊な機構が搭載されており、全身のフェイズシフト・アーマーと周囲に展開したīフィー

ルド、ミノフスキー粒子の膜との間に生じる反発力で機体を加速させることが可能である。そのため、極めて高い機動力を有するほか、飛行することを可能としている。また、発生させた斥力の位相を揃えることでミノフスキー・クラフト・システムを攻撃に使用することもある。

その真の姿は、装甲を展開し、額の角をブレード・アンテナに変形させることでガンダムの姿と顔を持つものである。この形態になると、機動力が増す他、フェイズシフト・アーマーに付与される電圧も強化され、衝撃にも強固な防御力を発揮するようになる。

本来は実験機であり、実戦配備の予定はなかったが、エインセル・ハンターの独断に寄ってキラ・ヤマトに移譲された。極端な性能を、キラは扱いこなし、オーブからプラントに移動する戦況のすべてを戦い抜いている。最終的に同じゼフィランサス・ナンバーズに数えられるフォイエリヒガンダムと交戦するも、機体性能とパイロットの実力さに溝を開けられ、手足を破壊されるほどの損傷を負っている。結果として勝利を収めることはできたが、それは勝利を譲られたものであった。ジェネシス破壊後、地球軍と合流したものと考えられる。

ZZ-X300Aフォイエリヒガンダム

オリジナル

全高

重量

ジェネレーター出力

25.6 m

148.0 t

7340 kW

武装

ビーム・ブレード×8

ビーム・ライフル×16

全身が黄金のフェイズシフト・アーマーに包まれるエインセル・

ハンター専用機。細長い手足に、大型の肩のアーマー、大腿部後ろのスラスター・カバーを有する。その最大の特徴は奥へと長いバック・パックであり、ここには4機の盾のような構造が取り付けられている。モビル・スーツとしては現段階で最大規模のスケールを誇る機体である。

可変機構を有し、GAT-X303 イージスガンダムと類似したシークエンスで変形する。ただし、機体そのものが大型であること、手足の長さに加え肩のアーマー、スラスター・カバーを基部として前へと突き出す機構であるため、長大なシルエットへ変形することになる。

ゼフィランサス・ズールがブルー・コスモスの最高幹部である3人のムルタ・アズラエルのために開発したゼフィランサス・ナンバーズと呼ばれる機体群、その初号機。そのコンセプトは機体を大型化させてまで得たジェネレーター出力による圧倒的な防御力と火力によって一方的に敵を殲滅するというものである。

装甲の黄金は伊達ではなく、ビーム・サーベルに使用されるようなビームを弾くIフィールドを全身に張り巡らせている。そのため、ビームに対しては完璧な防御力を発揮する。1つの狙いとして圧倒的な火力で敵を一方的に殲滅するというものがあるが、高い機動力と手足、背部の4機のユニットすべてに発生させることができるビーム・ブレードは極めて高い攻撃力を有するため、死角というものが存在しない。

ゼフィランサス・ズールがエインセル・ハンターのために開発した実質的な専用機である。というのも、性能が高すぎ、これを扱いこなすにはエインセルほどの実力者でなければ不可能であるという意味である。事実、オーブ、月面、ボアズ、ヤキン・ドゥーエの戦場で投入されたフォイエリヒは破損することなく多大な戦果を叩き出していた。最終的にオーベルテュールによってバック・パックを破壊されこそしたが、それはあくまでも意図的に被弾したものであり、望んでフォイエリヒを傷つけることができたものは皆無であっ

た。

ZZ-X200DAガンダムトロイメント

オリジナル

全高

重量

ジェネレーター出力

18.6m

90.1t

5320kw

武装

大型ビーム・ライフル×2

独立機動ユニット「ナイトゴースト」×12

白銀の装甲を有する機体。モビル・スーツ本体は比較的細身のシルエットにまとめられているが、その最大の特徴はバック・パックとして装備されている円形の台座にある。12の剣を思わせるようなユニットが等間隔に配置されており、後光を背負うようにも表現できる。ブルー・コスモス3幹部の1人であるラウ・ル・クルーゼの専用機である。

背部のナイトゴーストは分離し、独立に機動を行う。また、ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムに搭載されたビームを弾く機構がナイトゴーストにのみ搭載されており、それを多数展開することで領域内のすべてのビームを操る結界を張ることを可能としている。

ゼフィランサス・ナンバーズでは2号機に登録されている。ビーム兵器を開発したゼフィランサス・ズールによってビーム兵器が主力となることは予見されており、そのためビームを弾く機構を利用した攻防一体のシステムを搭載するに至った。ビーム兵器に攻撃力を依存する機体でトロイメントを撃墜することは至難の技である。

ナイトゴーストはビームを弾くばかりでなく、任意の方向へと誘導することが可能となる。そのためトロイメントは自らはなつたビ

ームの他、敵のビームさえも攻撃に利用し、自在な戦法を見せた。機体本体は通常のフェイズシフト・アーマーしか装備されていないためビームに脆いが、接近するということはそのままビームの網の中に飛び込むにも等しい。

ムルタ・アズラエルの1人であるラウ・ル・クルーゼに託されたゼフィランサス・ナンバーズである。宇宙空間においてその真価を発揮する性質上、大気圏内で使用されることのなかった唯一のゼフィランサス・ナンバーズである。その性能こそ高位にありながら、パイロットであるラウは遺伝上の疾患による発作に度々苦しめられており、そのことを原因として左腕を失っている。しかし、その後も戦い続け、ジェネシスに突入した仲間を援護するためその性能を発揮した。全身に被弾しながらも見事生き残り、ジェネシスを離れる姿が確認されている。

ZZ-X300Aガンダムシユテウルメント

オリジナル

全高

重量

ジェネレーター出力

18・3 m

69・4 t

5252 kW

武装

ビーム・サーベル×2

大型ビーム砲×2

独立機動ユニット×2

赤銅色のゼフィランサス・ナンバーズ。機体そのものは比較的目的立つところがないが、脚部に一見するならウェポン・ポッドにしか見えない独立機動ユニットを、両手にはビーム・サーベルを発生させる箆手状の追加武装、加えてバック・パックにウイングとビーム砲を備えていると、武装を追加することで性能を発揮するよう設計

されている。

武装そのものは他のゼファイランサス・ナンバーズと比べると凡庸であるが、非常に高い汎用性を有している。ビーム兵器を水中でも使用できることが確認されているのはシミュルメントだけである。そのため、戦場を選ばない安定した性能を発揮できる。

ゼファイランサス・ナンバーズの3号機。特化した性能を求めるのではなく、ひたすら安定性を求めた機体である。そのため、これまでに性能、実用性の確認された武装を中心に採用されている。また、バック・パックはストライカーの設計思想が反映されており、着脱が可能である他、交換することも可能としている。

特段優れた性能を有していない代わりにすべての性能が高い次元でまとまっており、明確な弱点というものが存在しない。その点においてもっとも戦いにくい機体である。どのような機体でも一定程度叩けることからどんな相手とも相性が悪いとも言えるが、その反面どのような機体とも安定して戦える性能を有していることになる。

ムウ・ラ・フラガがパイロットを務める。ゼファイランサス・ナンバーズの中では最も安定した性能を有するためか戦場を選ぶことなく様々な局面に対応した。ジブラルタル基地攻略では水中戦を、ヤキン・ドゥーエ宙域では対艦戦を行った。フリーダムガンダムとの戦闘でバック・パックを破壊されたが、最終局面ではジェネシスを破壊するためその内部に残され、パイロットごとジェネシスの爆発に巻き込まれる形で消失してしまった。

モビル・スーツ解説〜大西洋連邦〜（後書き）

オリジナル・ガンダムは、一応これでコンプリートです。

モビル・スーツ解説（ザフト）（前書き）

ザフト軍の解説です。

ところが、やはりここでもオリジナルの機体がありません。一応ジェネレーター出力なんてものは捏造していたり、若干設定が異なるなどありますが、ほとんど同じものです。

よくよく考えて見ると、ザフト軍の機体はあまりオリジナルの機体を出す予定がなかったりします。

よって、あまり意味のないものになってしまいましたが、ここでもジェネレーター出力でも比べて見てください。私がどの機体をどのくらいの位置だと考えているかよくわかります。

モビル・スーツ解説（ザフト）

AMF-101 デイン

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.9 m 37.3 t 899 kW

武装

アサルト・ライフル

散弾銃

背部に通常は畳まれた3対6枚のウイングを備えている。ZGMF-1017ジンなどと比べると細長い手足をしており、全体としてスマートな印象にまとまっている。両腰にそれぞれライフルを武器として装備している。

6枚のウイングを広げることでザフト軍内で初めて飛行を可能とした機体。アサルト・ライフルと散弾銃という武装の組み合わせで安定した戦果を期待されたが、地上侵攻用モビル・スーツは開発が遅れているという例に漏れず、わずか数十台が製造されるに留まった。また、開発された頃にはすでにビーム兵器の量産開発が進められており、新型機でありながら誕生とともに時代遅れの烙印を押された機体でもある。

ジブラルタル基地にて仲間を宇宙へと逃がすための時間稼ぎのために動員された。ガンダムを除き唯一飛行可能である性能を遺憾なく発揮したが、ビームを使用できず、圧倒的な物量差に追い詰められ全滅してしまった。

TF A-2 ザウート

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

17.9 m 83.59 t 878 kw

武装

2連キャノン砲

アサルト・ライフル

バルカン砲

両肩に2連キャノン砲、右手にアサルト・ライフルをかまえ左手にはバルカン砲が取り付けられている。大腿部と腰部には無限軌道が設置され、前屈の姿勢になることで戦車のような姿になる。モビル・スーツというよりは移動式の砲台とした方が正解となるいであちである。

高火力で友軍を支援することを想定された砲撃に特化した機体。そのため機動力に乏しく、同じような場所にとどまりながら攻撃するような運用がなされる。この高い攻撃力は確かにザフト軍のアフリカ戦線を支えたが、ビームの開発によりモビル・スーツの高火力化が推進されると予測される現在、ザウートのように汎用性に乏しい機体は徐々に姿を消す定めにあるとされている。

バルトフェルド隊が北アフリカ戦線にも用いたことで知られている。敵機と距離をおいた射撃を行ったが、フェイズシフト・アーマ―が開発されたことにより、攻撃そのものが効果のない相手との戦闘を強いられ、成す術なく撃墜されてしまった。

TMF/A-802 バクゥ

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力
11.1 m	69.3 t	1034 kw

武装

ビーム・サーベル×2

レールガン×2

人型という従来のモビル・スーツの概念に流されない、4足獣の姿をしている。猟犬とも呼称されたことがあるように犬を彷彿とさせる姿であり、各脚のすね部分に無限軌道が配されている。また、推進力は四肢の他、背中から横へと突き出たウイングに搭載されたエンジンで担った。ちなみに、背中には各種射撃武器が設置可能なターレットが置かれている。

ザフト軍で初めてビーム兵器を搭載した量産機である。ジェネレーター出力の関係上ビーム・ライフルの搭載は見送られたが、4足歩行の特性と無限軌道の走破力、サーベルの高い攻撃力は砂漠のような不整地であってもその戦闘能力を遺憾なく発揮する。開発者であるカルミア・キロがアンドリュー・バルトフェルドの部隊の者であったため、北アフリカ戦線にて実戦配備が先行して行われた。余談ではあるが、ビーム・サーベルの装備はバクウ完成間近に急遽決定したものであり、ジェネレーターにつながれたケーブルが体外に露出しているのはその名残である。

バルトフェルド隊の中にはバクウによる連携に長けた者が所属しており、3機が敵機に連続して攻撃を仕掛けるジェット・ストリーム・アタックはその攻撃力の高さを示すとともにバクウの高性能ぶりを実証している。

T M F / A - 8 0 3 ラゴウ

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力
11.8 m	72.2 t	1269 kw

武装

ビーム・サーベル×2
ビーム・ライフル×2

バクウをより大型にし、橙色に染め上げた4足獣がその姿である。ウイングに搭載されたエンジンはより空気抵抗の少ない平たいものに変更されており、つま先に装備された爪や頭部のトサカと相まって全体が鋭利な印象でまとまっている。まさに虎である。

本来は指揮官機として開発が進められた機体であったが、大型ジェネレーターの設置にともない機体が大型化。重量と出力の増大で非常に扱いにくい機体となってしまうため砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドがその専用機とした経緯がある。バクウとは異なりジェネレーター出力が高いためビームを安定して運用可能である。そのため、背中のターレットにはビーム・ライフルが2門装備されている。

重さからくる固い動きの割りに出力が高い。まさに暴れ馬ならぬ暴れ虎のごとき機体であるが、アンドリュー・バルトフェルドはまるで自身の体であるかのように操縦してみせた。砂漠の虎が見せたハウンズ・オブ・ティンダロスの力はガンダムさえも翻弄するほどであった。

TMF/S-3 ジンオーカー

機動戦士ガンダムSEED MSV

全高 重量 ジェネレーター出力

21.4 m

不明

899 kW

武装

アサルト・ライフル

バズーカ

ZGMF-1017ジンのバリエーション機であるため、その外観はとてもよく似ている。丸みを帯びた甲冑を思わせる装甲は褐色とくすんだ橙色で覆われている。また、ジンとは違い、背部に大型のスラスターを内蔵するユニットを装備していない。

地上、主に砂漠などの乾燥地帯で使用されるZGMF-1017ジンのバリエーション機。防塵フィルターの装備をはじめ、迷彩に適した塗装に塗りなおされている。砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドが運用するものが特に有名であり、北アフリカ戦線の維持に務めている。しかし、ジンの性能に限界が見え始めている今、そのバリエーション機である本機も同様の問題を抱えている。

北アフリカ戦線では鹵獲され、青くカラーリングを施された機体がユーラシア連邦軍で運用されたことが確認されている。その鹵獲機の中には「月下の狂犬」の異名をとるモーガン・シュバリエがいたことでジンオーカーは皮肉にもその安定した性能をザフト軍相手に遺憾なく発揮した。

UMF-4Aグリーン

機動戦士ガンダムSEED

全高

重量

ジェネレーター出力

20.7 m

70.5 t

1870 kW

武装

フォノンメーザー

魚雷

薄い茶色をした三角状の頭部が胸部と一体となって上半身を形成している。暗い茶色に覆われた手足はその胴体から伸びるように取り付けられている。全体として烏賊を思わせるシルエットをしたモビル・スーツである。

ザフト軍が開発した水陸両用のモビル・スーツ。その尖った頭部から水中を高速で移動できた。多様な魚雷を装備し、水中での減衰が小さいフォノンメーザーとその完成度こそ高かった。しかし、開発の遅れによって戦況は急速に宇宙へと移る中誕生するという悲劇に見舞われた。初陣では水中から敵軍の艦船に襲い掛かかり、多大な犠牲を支払いながら大きな戦果を上げた。

ジブラルタル基地にて行われた戦闘にて出撃する。水中では多大な戦果を上げたが、水上ではビームを常備するGAT-01デュエルダガーに敵うことなくその多くが撃墜されている。はつきりとした記録は残されていないが、全滅したものと思われる。

UMF-5ゾノ

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力

21.2 m	69.4 t	2480 kW

武装

フォノンメーザー

クロー

ずんぐりとした体に短い足。大きく、長く伸びた手の先には爪が備えられている。頭部は胴体に埋まっているようにも見える小型のものしかなく、隊長機としての運用が想定されていたためかトサカ

状の構造が頭部にある。

U M F—4 A グリーンとともに水陸両用機として開発された機体。

その大型の爪は接近戦において極めて強力な武器であるとともに仕込まれたフォノンメーザーは戦艦を沈めるほど強力である。「紅海の鯨」と呼ばれたマルコ・モラシムによって運用された機体は敵機を次々となぎ払い、獅子奮迅の戦いぶりを見せたことで知られている。

ジブラルタル基地防衛にあたった。その戦果は目を見張るものであったが、G A T—01 A1 ストライクダガーが水中でも十分な格闘能力が発揮されることが判明すると、得意であるはずの水中で撃墜された機体もあったようである。

Y M F—X000 A ドレッドノートガンダム

機動戦士ガンダム S E E D X A S T R A Y

全高 重量 ジェネレーター出力

18.2 m 67.5 t 2860 k w

武装

ビーム・ライフル

ビーム・サーベル

シールド

G A T—X105 ストライクガンダムと似た配色でトリコロール・カラーに染められている。際立って特徴のある部位は存在しないが、ガンダムと呼ばれる機体の多くが直線を多用した装甲を有するのに対して、ドレッドノートはところどころ丸みを帯びている。その特徴はザフト軍製モビル・スーツに見られるものであり、大西洋連邦、ザフト軍両勢力の特徴を併せ持つ機体となっている。

元々はザフト軍次世代モデル・スーツとして開発されていたものをガンダムの開発者であるゼフィランサス・ズールがファースト・ザフト・ガンダムとして再設計したもの。プレア・ニコルと命名されたニュートロン・ジャマーを無効化する装置の搭載、核動力の搭載、ミノフスキー・クラフト・システムの搭載という3つの新技術が搭載された実験機。

本来実戦を想定されたものではなかったが、開発者の1人であるプレア・アマルフィによって無断で持ち出されオーブ首長国にてGAT-X105ストライクガンダムと交戦したことが確認されている。ガンダムのシールドさえ一撃で貫く高い火力と初のミノフスキー・クラフト搭載機という圧倒的な機動性でストライクを追い詰めるも、フレーム強度が激戦についていくことができず大破させられてしまった。

YMF-X999Aプロト・ザク

機動戦士ガンダムSEED Destiny MSV

全高 重量 ジェネレーター出力

19.4 m 74.7 t 2340 kw

武装

腰部レールガン×2

ビーム・アックス

ザフト軍の伝統的な意匠を残し、よりガンダムに近い形状を獲得した機体。橙色の装甲が特徴で、あくまでも実験機であるため、最低限の武装しか装備されていない。

ザフト軍が大西洋連邦、正確にはガンダムのデータを利用し、核動力搭載型の量産機として開発が進められていた機体。量産機として破格のジェネレーター出力が想定されており、その機動力、ビー

ム兵器の攻撃力は極めて高い。ただし、あくまでも実験機であり、データ入手用の2機が辛うじて稼動状態にあり実戦に投入された。

GATシリーズに属するガンダムを圧倒するほどの高性能ぶりを見せ付けたが、やはりわずか2機の機体で戦況を覆すことはできるはずもなく、また武装の少なさが災いする形で十分な戦果を上げることができなかった。

ZGMF-515シグー

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力
21.4 m	80.2 t	976 kw

武装

重斬刀

バルカン砲

背部にスラスターを2基搭載するユニットを装備していることはZGMF-1017ジンと同様であるが、四肢はより鋭角に細身の印象を与える。肩には放熱フィンが2枚ずつ取り付けられている。腰の装甲は細く長く脚部を保護するもので、ウイングを各所に配したような優雅な雰囲気有している。

ザフト軍にて、主に指揮官に配備される機体。ZGMF-1017ジンに比べジェネレーター出力こそ変わっていないが、ラジエーターの性能向上など稼働時間の延長が計られている。そのためにコスト面でジンに劣っており、これ以上の量産は予定されていない。また、指揮官の中でも特に戦功のあった者には独自に塗装することが許されており、パーソナル・カラーとして士気高揚に一役買っている。

パイロットの腕前次第では大西洋連合軍のガンダムとも互角以上に戦える機体であることは、ラウ・ル・クルーゼによって証明され

ている。ただし、ビームを装備することができないため機体性能は明らかに不足している。設計自体すでに数年が経過したものであることはジンと共通している。

ZGMF-1017ジン

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

21.4 m 78.5 t 976 kW

武装

アサルト・ライフル

重斬刀

バズーカ

攻城ミサイル

甲冑を着た一つ目の巨人と言った姿をしている。モビル・スーツの代名詞とも言える機体であり、背部にスラスターを備えた折りたたまれた羽を思わせるスラスターを装備し、この設計は他のザフト軍機でも見られるものである。モノアイが採用されたのもこの機体が初めてのことであり、ザフト軍機の中でジンの影響が見られない機体は現在のところ存在していない。

ザフト軍主力モビル・スーツ。多様な武装に高い拡張性から戦場を選ばず扱われるほか、バリエーション機が豊富である。コストが比較的安価ながら完成度は高く、大西洋連邦を初めとする地球各国の兵器を圧倒した。しかし、戦線投入からすでに3年近くが経過しており、新型機の開発が急務であることも現実である。このことは、戦争が新たな段階に入ったことを象徴しているようである。

ザフト軍の宇宙における主力であり、大西洋連合の新型であるガンダムとの戦闘に多くが動員された。しかし、新機軸の技術を多数

投入されたガンダムにはまるで歯が立たず、その多くが撃墜されるという悲惨な結果に終わっている。

ZGMF-X09Aジャスティスガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高 重量 ジェネレーター出力

18.6m 75.4t 3960kw

武装

ビーム・ライフル

ビーム・サーベル×2

シールド

背部ユニット

ザフト軍の特徴と大西洋連邦軍のガンダムの要素を併せ持つ機体。まず目に付くのは背部に背負われた大型のユニットであり、水平翼、ビーム砲を2門備えている。バック・パックに機動力、攻撃力を担わせる発想はGAT-X105ストライクガンダムに見られたことからわかるように、ストライクガンダムの思想を受け継いだ後継機である。

ゼフィランサス・ズールから渡されたデータを元にサイサリス・パパが独自に設計した機体。武装の豊富さから距離を選ばない安定した性能を発揮する。中距離、近距離戦を得意とし、姉妹機にあたるZGMF-X10Aフリーダムガンダムとの連携が想定されている。核動力が搭載された機体であり、イザーク・ジュールがパイロットを務めている。

ジブラルタル基地ではじめて実戦投入された本機は目覚ましい活躍を見せたが敗走。月面における戦いでも勝利を得ることができないまま敗走している。ボアズ戦においてイザークのかつての部下であ

ったシホ・ハーネンフース、カナード・パルスのストライクガンダムEと交戦し、これを撃破するも自身も中破するほどの損傷を受け、地球軍に拿捕されている。その後、満足な修復もなされないままゼフィランサス・ズールの要請を受けたイザークの手によって再び戦場に舞い戻ると、損傷しているとは思えない戦いぶりで最後まで戦い抜いた。

ZGMF-X10Aフリーダムガンダム

機動戦士ガンダムSEED

全高	重量	ジェネレーター出力
18.0 m	71.5 t	3960 kw

武装

ビーム・ライフル

ビーム・サーベル×2

シールド

レールガン×2

ビーム砲×2

5対10枚の翼を有する機体。ZGMF-X09Aジャスティスガンダムに比べるとより大西洋連邦軍の特徴が色濃いシルエットをしている。腰に折りたたまれたレールガン、翼にビーム砲が収納されており、長大な火砲を備えながら全体として整った姿をしており、あらゆる局面において高い機動力を発揮することができた。

ジャスティスガンダム同様GATシリーズであるGAT-X103バスターガンダムのデータから生み出された。ビーム砲、レールガンの圧倒的な火力によって敵を殲滅するとともに汎用装備の拡充がなされており、中距離、長距離戦にその真価を見せる。核動力が搭載されたこの機体は、バスターガンダムのパイロットを務めたアスラン・ザラが引き続き担当している。

初陣であるジブラルタル基地ではガンダムシユテウルメントと交戦し、低軌道上ではガンダムトロイメントと戦い、月面ではムルタ・アズラエル最後の1人であるエインセル・ハンターのフォリエリヒガンダムとすべてのムルタ・アズラエルとの戦闘経験を有する。最終的にはムウ・ラ・フラガと交戦し、味方の犠牲を増やさないために装備を破壊するも、地球を守るためにシユテウルメントに道を譲る形で大破させられた。

モビル・スーツ解説（ザフト）（後書き）

余計な話になりますが、ジェネレーター出力、フリーダムガンダムやジャスティスガンダムが出てくる頃になると数値が跳ね上がります。現在、1000～2000の間を彷徨っていますが、これが4000とかになったりもします。

さらにオリジナル・ガンダムはその上を行います。

ガンダムは意識して性能を抑えないとすぐにスーパーロボット化してしまいますが、フリーダムやらを登場させてからはもう解禁だろうと開き直ってとことん高性能ぶりを追求する所存です。

用語設定（前書き）

とりあえず、オリジナルの単語と、設定を大きく変更してしまった単語などを取り上げて見ました。これからこの単語も加えた方がいいかと考えたものがあれば付け加えていこうと考えています。

用語設定

アリス A. L. I. C. E Advanced Logistical & amp; In-consequence Cognizing Equipment

ガンダムに搭載されたオペレーティング・システム。通常はガンダムの学習機構として機能している模様だが、未確定の条件で発動する。この際、他のアリス搭載機にそのことが伝えられ、パイロットに回りの状況を直接投影する、反応速度が高まる、リミッターが解除されるなどの現象が生じているが、それがどのようなものであるのか明確でない。

それぞれが意志と個性を持つらしく、パイロットに赤い瞳をした少女の姿で語りかけることがある。その場合、投影される映像はルイス・キャロルによって書かれた童話、『不思議の国のアリス』を模したものである。これは設計者であるゼフィランサス・ズールが幼少の頃、この童話を好んだためとされている。

ガンダム3大定義の1つ。

ヴァーリ V. A. L. I

1つの受精卵から26のクローン胚を作成し、それぞれに異なる遺伝子調整を施して誕生した26人の姉妹。それぞれに花の名前とフォネティック・コードというアルファベットの読み替えを姓として与えられている。9つの研究所において第1世代から第3世代までの3個体が作成されている。また各研究所は縦割りであるため、姉妹は同じ研究所の2名とは親しい関係でありながら、他の研究所の姉妹とは面識さえない場合がある。

姉妹は顔は同じであるが、髪や瞳の色は各研究所のパーソナル・カラーとして設定されているため異なる。なお、姉妹関係は第1研

究所の第1世代が長女にあたり、第2研究所の第1世代が次女と続く。

この姉妹が生み出された理由の1つはお父様が至高の娘を求めるためであり、26人の中からもっとも高性能なヴァーリは至高の娘としてお父様の傍にすることが許される。また、ダムゼルと呼ばれる6人が至高の娘ラクス・クラインが選出される前段階で選ばれており、この6名はその高い能力を認められ、他20名のフリークと呼ばれる失敗作とは一線をひいた扱いがされている。

A…長女…不明
D…次女…デンドロビウム・デルタ
G…3女…ガーベラ・ゴルフ
J…4女…ジャスミン・ジュリエッタ
M…5女…ミルラ・マイク
P…6女…サイサリス・パパ
S…7女…不明
V…8女…不明
B…9女…不明
E…10女…エピメディウム・エコー
H…11女…ヒメノカリス・ホテル
K…12女…カルミア・キロ
N…13女…ニーレンベルギア・ノベンバー
Q…14女…不明
T…15女…不明
W…16女…不明
Y…17女…ユッカ・ヤンキー
C…18女…不明
F…19女…フリージア・フォクスロット
I…20女…アイリス・インディア
L…21女…ロベリア・リマ
O…22女…不明

R…23女…ローズマリー・ロメオ

U…24女…不明

X…25女…不明

Z…26女…ゼフィランサス・ズール

ガンダム G・U・N・D・A・M

? General Unilateral Neuro-
link Dispersive Autonomic Maneu-
ver

ゼフィランサス・ズールによって開発された機体群の総称。共通する特徴は額にV字のブレード・アンテナを持つことと、顔が擬人化を濃くしていること。加えて、そのすべてがワンエンドの高級機であることである。兵器としてはじめてビームを搭載した機体であり、その設計にはありとあらゆる新機軸の設計思想が組み込まれている。モバイル・スーツ開発史に残る名機である。

? Generation Unsubdued Nuclear
Drive/Assault Module

ゼフィランサス・ズールがプレア・レヴェリー、ユーリ・アマalfの協力の元完成させた核動力搭載型の新たなガンダム。ブレード・アンテナと顔を持つ機体であることなどガンダムたる姿に変化は見られない。しかし、ジェネレーター出力が極めて向上しており、その過剰とも言える余剰エネルギーは様々な特殊機構を各ガンダムに与えている。

また、設計者であるゼフィランサスはガンダムを以下のように定義付けている。

- ・ビーム兵器を搭載すること
- ・フェイズシフト・アーマーを装備すること
- ・アリスを備えていること

以上の3大定義を満たした機体をガンダムと呼ぶこととなる。

現在のところ、以下の機体が登録されている。

GAT-X102デュエルガンダム
GAT-X102ブルデュエルガンダム
GAT-X103バスターガンダム
GAT-X103APヴェルデバスターガンダム
GAT-X105ストライクガンダム
GAT-X105ストライクガンダムルージュ
GAT-X105ストライクノールガンダム
GAT-X105ストライクガンダムE
GAT-X207ブリッツガンダム
GAT-X207SRネロブリッツガンダム
GAT-X303イージスガンダム
GAT-X303ロッソイージスガンダム
YMF-X000アドレドノートガンダム
ZZ-X000ガンダムオーベルテューレ
ZZ-X300Aフォイエリヒガンダム
ZZ-X200Dガンダムトロイメント
ZZ-X100GAガンダムシユテウルメント

ダムゼル

26名のヴァーリの内、特別に選ばれた6人のこと。乙女を意味する言葉であり、至高の娘ラクス・クラインが選出されるまでの前段階であり、ラクス候補の6人と言ってもよい。最終的にGのヴァーリであるガーベラ・ゴルフがラクス・クラインに選出されたが、他の5名もそれぞれ高い能力を有している。

なお、ダムゼルに選ばれなかった20名はフリークと呼ばれ、失敗作としてその扱いは粗雑である。

ダムゼルは以下の6名である。

D・デンドロビウム・デルタ

G…ガーベラ・ゴルフ
P…サイサリス・パパ
E…エピメディウム・エコー
N…ニーレンベルギア・ノベンバー
Z…ゼフィランサス・ズール

ドミナント

ヴァーリと平行して開発が薦められていたより高性能なコーディネーターの総称。

ユニウス・セブンで研究開発されていた。ヴァーリは花の名前を冠するのに対して、こちらは数字が名前に採用されている。数字に置き換えることができるアルファベットを名前に、と英語の数を姓としている。全9名が誕生し、その内もつとも高性能であると認定された素体がザラ家の子息として迎えられた。

ヴァーリとは異なり、汎用性と高性能を追求しているため、特化した能力は有していない。また、王になるべき誕生したコーディネーターであり、洗脳が施されていないこともヴァーリとの違いである。ユニウス・セブンにてその大半が失われたものとされている。

また、ドミナントはユニウス・セブン以前から開発が行われており、その前にも成功作が得られている。それが、ムルタ・アズラエルの1人であるエインセル・ハンターである。

- 0…エインセル・ハンター
- 1…アルファ・ワン
- 2…不明
- 3…ギーメル・スリー
- 4…不明
- 5…不明
- 6…不明
- 7…不明

8…不明

9…テット・ナイン

ハウنز・オブ・ティンダロス

戦闘機乗りの間で語られる伝説的な操縦技法。

元々はクトゥルフ神話にその名を見出すことができる。ティンダロスの猟犬とは人とは次元の異なる世界に存在する異形の怪物のことであり、その姿は必ずしもこの世界の犬と同じではない。この猟犬は普段は決して人の世界と交わることはないが、人が世界の枠を超えて禁忌に手を出そうとした場合、その匂いを嗅ぎ付けどこからともなく現れる。1度付けねらわれたなら、逃れる術はない。

攻撃を当てるためには近づけばいい。近づくには最短距離で直進すればいい。こんなごく単純な思想の下編み出された技法。ただし、敵機も攻撃を行う上、その攻撃を最小限の動きでかわさなければならぬという無謀を通り越した技である。そのため、完璧にこなせる人物は3人しかいないとされている。戦闘機ではただ、攻撃をすれすれの位置でかわすことが求められたが、この技をモビル・スーツの操縦に転用する者が現れ始めると、必ずしも最低限の回避は必要ではない。時には大きくかわして相手の虚をつくなど、より高度に発展を見ている。

しかし、この技の完成形とは相手の動き、呼吸を完全に読んだ上で回避を行い、反撃も同時に行うという超絶的なものであり、それを完全に体得しているのは先述の通り、3名のみである。

現在、完全、不完全問わずこの技を体得していることが確認されている人物は以下の通りである。

地球連合軍

エインセル・ハンター

ヒメノカリス・ホテル

ムウ・ラ・フラガ

モーガン・シュバリエ

ラウ・ル・クルーゼ

オーブ軍

キラ・ヤマト

ザフト軍

アスラン・ザラ

アンドリュー・バルトフェルド

ビーム

ミノフスキー物理学を応用した兵器群、あるいは高エネルギーを帯びた粒子の総称。ミノフスキー粒子と呼ばれる特殊粒子の特性を利用し、極めてエネルギー効率の高い兵器である。そのためモビル・スーツ程度のサイズで艦砲並みの攻撃力を発揮することを可能とする。その反面ミノフスキー粒子をメガ粒子化してビームとして用いるためには一定以上の高いジェネレーター出力を必要とする。

ガンダムなどの高級機から運用が始まり、大西洋連邦軍はビームの運用を前提としたモビル・スーツの開発を行った。

ガンダム3大定義の1つ。

フェイズシフト・アーマー

エネルギーを吸収し、蓄積するミノフスキー粒子の性質を利用した特殊装甲。攻撃を受けた際、そのエネルギーを装甲表面のミノフスキー粒子の皮膜が吸収し、緩和した上で光として発散する。そのため装甲そのものに伝わるエネルギーははるかに小さいものとなり、その防御力は極めて高い。理論上、モビル・スーツが携帯可能である兵器では破壊することができない。

破壊する方法は現在2つが考えられている。

艦砲など、大口徑大火力の兵器を直撃させること。

ビームなど極めてエネルギー効率の高い兵器を用いること。

以上のことからビーム兵器を搭載できないモビル・スーツ相手にはフェイズシフト・アーマーは無敵の防御力を発揮する。

ガンダム3大定義の1つ。

ミノフスキー・クラフト・システム

ミノフスキー粒子が電荷を運び、一定条件下では斥力を発生させる仕組みに着目して構築されたシステム。フェイズシフト・アーマーがミノフスキー粒子で構成された膜構造、Iフィールドであるため、これとは逆の電荷のミノフスキー粒子を散布することで生じる応力で機体を推進させるシステムである。

利点として、装甲そのものを推進器とすることができると、非常に高い機動力と推進力を発揮することが可能である。その余剰推進力はモビル・スーツの飛行を可能とし、また従来の機体とは一線を画す機動力を獲得できる。

その反面、非常に消費電力が大きく、ジェネレーター出力の要求数は3000kw弱と実質核動力搭載機専用の機構となっている。また、フェイズシフト・アーマー自体非常に高価な機構であり、PS装甲の装備を前提とするこのシステムは必然的に高コストになってしまう。また、フェイズシフト・アーマー自体が推進力を発生する度に余剰となる運動エネルギーを光として放出してしまうため、戦場における隠匿性、秘匿性は皆無である。加えて、装甲の破損がそのまま推進力の低下に直結するため、身を守るべき装甲でありながら、被弾は許されないという非常にピーキーな運用を求められる。以上の条件を満たすことができるのは現在のところガンダムのみであり、実質ガンダム専用のシステムと化している。

ミノフスキー博士によって発見された特殊な挙動を行う粒子を基に構築された物理体系。ミノフスキー粒子は重力を解明する過程で発見されたものであり、その性質は質量に関するものからエネルギーにいたるまで、物質全般にまつわるものである。

ミノフスキー粒子は極めて強い電荷を帯びており、親和力、反発力が非常に強力である。そのため、皮膚の構成が容易である他、斥力、引力の発生が可能であるなどの性質が見られる。また、特筆すべき性質として、一定条件下でミノフスキー粒子に高エネルギーを加えると質量の一部を核融合反応を伴うことなくエネルギーに変換し、見かけ上はロスなしにエネルギーを蓄積し、メガ粒子と呼ばれる状態に移行する。

このメガ粒子を兵器として用いた場合にビームと名称が改められる。ミノフスキー粒子は学会に発表された当初は絵空事と否定派の意見が目立ち、長く本格的な研究が行われないできた。そのため、ミノフスキー粒子が日の目の見るには、C・E・71年にラタトスク社所属のゼフィランサス・ズール女史が開発したガンダムという機体群の登場を待つことになる。

ラタトスク社

3大軍需産業の1つにして、最大手。若き盟主エインセル・ハンターが代表を務めている。

大企業ではあるが、その歴史は若く、設立からわずか10年ほどである。3大財閥であるアズラエル財団を若くして継いだエインセルによって設立され、当時は若すぎる世継ぎの乱心と経済界を騒がせた。しかし、当時成熟していた軍需産業は、その分停滞期を迎えておりラタトスク社の新機軸の設計思想が投入された兵器群は驚きと賞賛をもって受け入れられた。

メビウスなど、機動力に攻撃力、防御力を兼ね備えた機動兵器という概念はラタトスク社によって生み出された。メビウスがザフト

軍の開発したモビル・スーツに敵わないと見るや、独自にモビル・スーツを開発し、大西洋連合軍に採用させるなどしたたかな経営戦力が見え隠れする。

なお、ラタトスクとはゲルマン神話に語られる獣の名である。ラタトスクは巨大なトネリコの樹を走り回る。樹上には大鷲が翼を広げ、地中の根には竜が纏わりついている。この両雄は互いに中が悪くいがみ合っている。ラタトスクは両者の間を走り回っては互いに互いの悪口を吹き込み、その争いを煽っているのだとされている。

用語設定（後書き）

おそらく、これが最後の設定紹介になると思います。ただ、完結にはまだしません。本編が終わったら、後書きでも載せてみようかなと考えています。特に、人物既存のキャラクターでもどうしてこんな人になったのか、自分なりに考えていることがありますので、それぞれの理由でも書こうかと。

なぜなにSEED第1回くブルー・コスモスの歴史と成立背景及びその現状く

BlumenGartenの作中では紹介できない設定を、既存のキャラクターとオリジナルのキャラクターを司会にして、セリフだけ並べてしまおうと言う邪道、外道、小説ではないとんでも作品です。

なお、もちろんのことですが、これはBlumenGartenにのみ通用する設定であり、他では原作、他の2次創作とは一切関係しません。

また、40話前後の人間関係が採用されています。

なぜなにSEED第1回〜ブルー・コスモスの歴史と成立背景及びその現状〜

アイリス

「さてさてはじまりました、なぜなにSEED！ 第1回の司会は妙に囃ませ犬させられるアイリス・インディアと！」

フレイ

「原作のファザコンぶりから年上好きと作者に決めつけられたアイ・アルスターがお送りします」

アイリス

「さて、第1回のテーマはかの過激思想団体ブルー・コスモスについて」

フレイ

「思ったんだけど、それならエインセルさんとかムウさんとか、もっと適任がいる気がするんだけど？」

アイリス

「それが、ブルー・コスモスの3幹部を出すと收拾がつかなくなったりそんなことばかり話し出しそうで怖いって作者が……………」

フレイ

「確かに……………。それに、みんな妙に遠回しだったり、余計な言い回しが多いから、とても説明に向きそうにないしね」

アイリス

「大丈夫。資料はいただいていますから私たち2人でも」

フレイ

「で、まずはどんなことから？」

アイリス

「歴史からです。まず、ブルー・コスモスは元々、世界的な環境保護団体の一部、遺伝子組み換え作物や、遺伝子技術そのものの規制や監視を訴えるところだったみたいですよ」

フレイ

「それがコーディネーター専門の活動をはじめたのはジョージ・グレンの告白のせい？」

アイリス

「はい。ブルー・コスモスはいち早く反対を表明して活動を活発化したみたいです。さすがにコーディネーターは受け入れられない人も多かったらしくて、ブルー・コスモスは勢力を拡大するとともに5年後には独立して現在の組織の礎を築いたようです」

フレイ

「原作ではやたらとテロばかりで、とても環境保護団体には思えないけど、そのことについては？」

アイリス

「作者はさすがにそれはないって考えてるみたいです。いくら民主主義国家で精神的自由の1つとして結社の自由が認められているとはいっても、保障の限界は存在します。ほら、シー・シェパードみたいな現実の過激環境保護団体なんて、酪酸投げ込んだだけで捕まったり、捕鯨反対派の国からもあれはやりすぎだって意見も起きてるみたいです」

フレイ

「たしかに、とりあえず安易な悪役として使われてる感が強いわね。子ども向け番組の悪の組織じゃないんだからさ。親がいない、ならとりあえずブルー・コスモスのせいにしとけなんてあまりに安易。潜在コーディネーターなんて言葉もあるくらいだから、戸籍に人種の記載はされてないはずなのに、コーディネーターを標的にするテロができるとも考えにくいし」

アイリス

「フレイさんもナチュラルですけど、髪赤いですよね。それに、美形の人がコーディネーターとも限りませんし」

フレイ

「コーディネーターが建国したプラントや、コーディネーターの研究している施設が襲われるならまだわかるけど、単なるテロを起こすだけのグループなんて印象が先行している気がするわね」

アイリス

「原作でブルー・コスモスのテロで親を失った、なんて人がいるのはフレイさんの言った通りですけど、その背景は不明でないことの方が多くて、理念そのものが見えてこないんですよね」

フレイ

「そもそも無差別テロをしているようなグループを世論が認められるはずがないしね。でも、ブルー・コスモスは研究施設に対しては結構過激なことしてるって設定なんですよ？」

アイリス

「はい。施設や研究者への脅迫行為がよく社会問題になっていたそうです」

フレイ

「それでも、あくまでも環境保護団体。それが今みたいに強大な影響力を持つようになったのはどうして？」

アイリス

「だいたい10年くらい前に転機があったみたいです。血のバレンタイン事件が生じて、逆説的ですけどそれが悪名として世界的に名前を広めることになったとともに、プラントとの関係悪化によって地球での反コーディネーター感情が悪い方向に高まったことがあったそうです。これまではコーディネーター技術の禁止くらいでしたが、プラントの解体まで謳うような、より過激な文面が増えてきたそうです」

フレイ

「それでエイプリルフル・クライシスだっけ？」

アイリス

「はい。その時期はちょうどラタスク社が急速にシェアを拡大している時期でもあって、非常に重要なスポンサーだったみたいです」

フレイ

「で、ムルタ・アズラエルが代表に就任か。単なる環境保護団体としては随分戦略的だと思ったけど、軍需産業のノウハウが加わったからなんだ」

アイリス

「世間一般からは多少過激な環境保護団体として認識されてるみたいです。原作ほど無茶なこととしてませんか」

フレイ

「でも、血のバレンタインはブルー・コスモスの仕業なんですよ？」

アイリス

「それが……、資料に検閲が入ってまして……、よくわからないんです」

フレイ

「何それ!？」

アイリス

「ネタバレが含まれてるみたいで、今ばらされたらまずいそうです・
……」

フレイ

「じゃあ、何のための設定紹介よ!」

アイリス

「設定そのものに伏線仕込む癖、何とかした方がいいですよね」

フレイ

「そんなことしてるから文字数が60万字超えてんのにいままだ終わりが見えないのよ……」

アイリス

「そろそろまとめに入ります。そう、指示がありましたので」

フレイ

「はいはい」

アイリス

「ブルー・コスモスは過激な思想団体ではあってもテロ組織ではありません」

フレイ

「これは2つの理由からです。1つは単なるテロ組織が民主主義国家の中で大きな支持を得ることは不可能であること。そして、成熟した国家では国民の支持なしでは影響力を行使できません。そもそも、一般市民からは危険な団体だと思われるのに、軍の上層部にはやたらシンパが多いのも不自然」

アイリス

「また、ただの都合のいい悪役でしかなくなってしまい、せっかくのコーディネーターという設定を生かしきれなくなってしまったこと。重要な組織であるはずが、その思想性や理論対立をいっさい見せることなくやられ役で終わってしまったことがとてももったいないと考えたそうです」

フレイ

「実際、生命倫理の観点から見たら、コーディネーターって相当やばい存在らしいしね。ところで、青い薔薇を紋章にしてるのオリジナル設定でしょ？ どうして遺伝子操作を反対しているはずのブルー・コスモスがそんなの掲げてるの？」

アイリス

「……………そのことも、検閲が入りまして、塗りつぶされてます……………」

フレイ

「だ、か、ら！ それじゃあ設定紹介にならないでしょうが！」

アイリス

「これも伏線なんだそうですよ……………」

フレイ

「本当に回収し切れるんでしょうね!？」

アイリス

「一応プロットだと回収できていることになってますけど、まだまだ伏線張りたいみたいで……………」

フレイ

「デステイニー編まで考えてるって噂聞いたけど？」

アイリス

「それでも、BlumenGartenはBlumenGartenで完結はさせるみたいですよ。ただ、何人にご退場願うか、まだ決め切れていないらしくて……………」

フレイ

「……………一応聞くけど、私、まさかグレー・ゾーンにのっかってるとかじゃないんでしょうね?」

アイリス

「絶対に死ぬ人と死なない人は決まってるみたいですけど……………」

フレイ

「……………」

アイリス

「・・・・・・・・」

フレイ

「だ、第1回なぜなにSEEDはこれで終わりです。作者曰く、せりふだけ並べるのは楽でいいけど、脈絡がなくなりがちで面倒なところもあるとのこと」

アイリス

「第2回はミノフスキー粒子のお話です。司会者はまだキラ・ヤマト、ゼフィランサス・ズールの両名を予定、不定期更新です」

フレイ

「でもこれ、本当に設定紹介になってるのかしら？」

アイリス

「それは言わないお約束です、フレイさん」

なぜなにSEED第1回くブルー・コスモスの歴史と成立背景及びその現状く

どこかで似たようなものを見たという方、それはきっと気のせい
です。人は深層意識で繋がっているそうですから。

なお、まだ少しずつではありますが書き進めるつもりです。い
いとは思いますが、この人に司会をさせたいというリクエストがあ
る方いらっしゃるかもしれませんメッセーじなりで意志表示していただ
ければできる限りお応えします。

また、これは不定期更新です。原作が終わるまでには、一通り並
べておきたいところですけど。

なぜなにSEED第2回くミノフスキー粒子の性質と可能性の理論的考察く（前

さて、セリフがやたらと並ぶ邪道説明も第2回です。

正直、あまり読者様が読んでも仕方がないかな、という気もしないではありませんが、せっかくなので、ミノフスキー粒子の説明です。

無論、宇宙世紀の同名の粒子とは同じものではありません。

なぜなにS E E D第2回くミノフスキー粒子の性質と可能性の理論的考察く

ゼフィランサス

「第2回……、なぜなにS E E D……、始まり
ます……」

キラ

「司会は、不殺の誓いより必殺の一撃、キラ・ヤマトと」

ゼフィランサス

「妹キャラで無表情……、天才でアルビノでゴスロリ美少女という設定を作者の友人に話したら……、それはやりすぎと言われてしまったゼフィランサス・ズールです……」

キラ

「第2回のテーマは、ミノフスキー粒子とそれに纏わる物理体系について紹介します。まず、ゼフィランサス、ミノフスキー粒子は元々宇宙世紀に登場する粒子だけど、それはあくまでも参考にしたただけで、BlumenGartenとは関係がないんだよね？」

ゼフィランサス

「うん……。モデルにしてるから……。たとえばビームの原理とか共通するところも多いけど……。フェイズシフト・アーマーをミノフスキー粒子で説明していることなんて完全にオリジナルだから……」

キラ

「フェイズシフト・アーマーだけど、原作では実弾を無効にして、ビームでは破壊できる、いや、強いビームでなら破壊できるだった

かな？」

ゼフィランサス

「私も詳しくは知らない……。けど……。小説でフェイズシフト・アーマーでビームを弾く描写がされてしまったため……。弱いビームなら防げることになったんだって……」

キラ

「そもそもビームでなら何故破壊できるのかも明らかにされていない面があるし、フェイズシフト・アーマーが明らかに実体剣で破壊されている描写もあるよね」

ゼフィランサス

「ZGMF-X10AフリーダムガンダムがZGMF-X56Sインパルスガンダムに撃墜された時……。金属の刃で貫かれてたよね……」

キラ

「その後、小説版ではビームで切断されたみたいな描写に変更されたかと思えば、高出力時には金属部分にもビームの被膜が構成されるなんて設定に変えられもした」

ゼフィランサス

「作者もよくわからなくなって……。もういいやって……。独自に設定しなおしたみたい……」

キラ

「フェイズシフト・アーマーを絶対の装甲ではなくて、あくまでも衝撃緩和材にしたんだったよね？」

ゼファイランサス

「うん・・・・・・・・・・。攻撃されたら・・・・・・・・、その攻撃の運動エネルギー・・・・・・・・、熱エネルギーを粒子が吸収して・・・・・・・・、次々横へと伝わらせていく・・・・・・・・。その後・・・・・・・・、取り込んだエネルギーを光として放出する・・・・・・・・。」

キラ

「だから実際攻撃を受け止めているのはガンダムに使用されているチタン系の合金で、いくらフェイズシフト・アーマーを装備していても元々の装甲が薄ければ貫通されるんだよね？」

ゼファイランサス

「作中で表現できるかはわからないけど・・・・・・・・、結局高価な装甲を使わないと効果が出ないから・・・・・・・・、どうしても割高になる・・・・・・・・。それが量産機へのフェイズシフト・アーマーが普及しない要因の1つにもなってるから・・・・・・・・。」

キラ

「ビームなら破壊できるのは、別に特別な理由じゃなくて、単に攻撃力が高いから。ミノフスキー粒子の特性である、エネルギーを擬似的な質量として保存する性質から、エネルギー効率がとても高く、同じエネルギーを使用しても高い攻撃力を得られるからだよね」

ゼファイランサス

「結論として・・・・・・・・、フェイズシフト・アーマーはどんな兵器でも破壊できるよ・・・・・・・・。ただ・・・・・・・・。モビルスーツが携帯できる火器で現実的なものがビームであるだけだから・・・・・・・・。」

キラ

「まさか、モビル・スーツの倍はあるような大砲を担いで戦うわけにはいかない。それはわかるけど、艦砲についてよくわからないんだ」

ゼフィランサス

「艦砲くらいの規模なら……、十分に破壊できるよ……」

キラ

「そうじゃなくて、ビーム兵器はすでに量産が始まってる。それなのに、戦艦は未だにビーム兵器を乗せてない気がして」

ゼフィランサス

「それは意味がないから……。艦砲は十分に高い攻撃力を持ってるし……。ビームはあくまでも粒子の集合だから……」

キラ

「わからないよ……」

ゼフィランサス

「モビル・スーツが携帯するくらいの口径ならまだいいよ……。でも……。大型化すると、それぞれの粒子の運動エネルギーが高まって……。トンネル効果から……。ある種の親和力……。引力を振り切ってしまうの……。わかる……。？」

キラ

「僕は、いつだって君のことを考えてたよ、ゼフィランサス」

ゼフィランサス

「わからないんだね……………」

キラ

「気のせいかな？ 作中よりも君がクールに見えるよ」

ゼフィランサス

「泥を投げるイメージかな……………。小さな玉をゆっくり投げると崩れないけど……………、大きくしたり……………、勢いよく上げてしまうと崩れてしまうでしょ……………」

キラ

「そうになると、艦砲くらい大きくするとビームが素早く拡散してしまう。有効射程が短くなって、そんなところかな？」

ゼフィランサス

「うん……………。ガンダムの攻撃力は戦艦にとっても驚異だから……………、距離は開けたいけど……………、ビームは大型化すると射程も極端に短くなってしまう……………」

キラ

「実際問題、ガンダムに届く頃にはモビル・スーツ並の威力しかないなら、命中率から考えてもあまり意味はないね」

ゼフィランサス

「それに……………、これはビームが視認できる速度で射出されている理由にもなってるから……………」

キラ

「それは知らなかったよ。ただ、ミノフスキー粒子は他にも使われてるよね、ミノフスキー・クラフト・システムとか核動力もそうだし、それに、電波妨害もそうだって聞くけど」

ゼフィランサス

「ちょっと整理しようか……。ミノフスキー粒子の性質は……。大別するなら2つだけ……。電荷を帯びていること……。エネルギーの吸収性……。」

キラ

「思ったより少ないけど、これが性質？」

ゼフィランサス

「細かい現象もすべてひっくるめてるから……。たとえば電荷を帯びていることは……。同じ電荷のものを集めればフェイズシフト・アーマーやフィールドの説明になるし……。異なった電荷なら斥力を発生させることでミノフスキー・クラフト・システムにもなる……。」

キラ

「ビームが塊となって飛ぶのも電荷のためなんだね？」

ゼフィランサス

「他にも核動力では……。炉内に異なる電荷のフィールドを何重にか配置して、発生した放射線と熱量を吸収……。それによって生じたフィールドの運動エネルギーからフィールド間に静電気を発生させて……。それを取り出すことで原子炉から直接電気エネルギーを取り出すことができる……。そんな設定もあるよ……。」

キラ

「初めてきいたけど……………」

ゼフィランサス

「さすがに作者自身原理を説明しきれ自信がなかったから……………
・、一応設定しておいただけみたい……………。他にも熱その
ものを利用する機構があつて……………、色々複雑になるから……………
・……………、自分でも理解しきれない部分もあるみたいだし……………
……………」

キラ

「色々な意味で無茶だよ」

ゼフィランサス

「でも……………、この設定は大きな意味があつて……………
、Iフィールドがあれば隔壁もいらない……………、電気を直
接取り出せるからタービンや冷却水も必要ない……………。原子
炉をモバイル・スーツに搭載できるくらい小型化するためには必要だ
つたんだつて……………」

キラ

「必要な設定を何でもかんでもミノフスキー粒子で説明しようとする
ところが宇宙世紀とよく似てるけど、明らかに違う点はないのか
い？」

ゼフィランサス

「あまりニュー・タイプを前面に出す作品じゃないから……………
、BlumenGartenだとサイコ・ウェーブは発生しない……………
……………」

キラ

「オカルトがやっている面を除外した、そういうことかな？」

ゼフィランサス

「作者はゼータガンダムがビームを弾いたことも……、アクシズの地球降下が阻止されたことも科学的にこじつけられる氣でいるけど……、ニュー・タイプが多くない以上わざわざ用意する必要を感じなかったんだって……」

キラ

「そうになると、原作のミノフスキー粒子からニュー・タイプにまつわるものを削いで、独自解釈を加えたもの、そんな考え方でいいのかな？」

ゼフィランサス

「そう……、かな」

キラ

「逆に、ニュー・タイプって誰がいるんだい？」

ゼフィランサス

「原作でもあるように……、ムウお兄様とラウお兄様……、それにエインセルお兄様も……」

キラ

「3幹部って、核動力搭載型のガンダムに乗るんだよね？ 作者、倒させる氣があるのかな……？」

ゼフィランサス

「ZZーX300AAフォイエリヒガンダム……、ZZー

X200DAガンダムトロイメント・・・、ZZ-X100
GAガンダムシュテルメント・・・。特に・・・、
フォイエリヒガンダムは私の最高傑作・・・」

キラ

「どこことなく嬉しそうだね、ゼフィランサス・・・」

ゼフィランサス

「ちなみに・・・、他にもアイリスお姉さまや・・・、
設定上はジャスミンお姉さま・・・、それに私にもニュー・
タイプ適性があるよ・・・」

キラ

「ジャスミンはともかく、アイリスさんと君はわかる気がするよ・
・・・」

ゼフィランサス

「・・・じゃあ・・・、そろそろまとめようか・
・・・」

キラ

「まず、ミノフスキー粒子は宇宙世紀の同名の粒子のニュー・タイ
プに関する部分を取り払い、コズミック・イラの技術、世界観にな
じませたものです」

ゼフィランサス

「ミノフスキー粒子の発生方法・・・、保管方法について設
定の不備がありますけど・・・、それはとある事情から意図的
に空白にしています・・・」

キラ

「その事情はまだ未定の要素を多々含み、作中に表現されないか、場合によっては無視して別の設定を登場させるかもしれません」

ゼフィランサス

「大切なことは……、ミノフスキー粒子の軍事転用が兵器に多大な技術革新をもたらしたこと……」

キラ

「言ってしまうなら、ガンダムの高性能ぶりを無理なく受け入れてもらうための設定でもあります」

ゼフィランサス

「……私たち……、思った以上にまじめに話してたね……」

キラ

「うん。作者なんて、僕と君を2人きりにすることに危惧さえ覚えてたみたいけど、説明しないといけないことが多かったから……」

ゼフィランサス

「次は……、もっと軽い話題の司会……、させてもらえないかな……?」

キラ

「そうだね……」

ゼフィランサス

「でも……、次は先にまだ紹介しきれなかったミノフスキ

「粒子の紹介だって……………」

キラ

「正直な話、そんなに設定がりがり組んでも読んでる人少ないと思うよ……………。それに、本当にSFが好きな人には荒唐無稽な設定も多いだろうし……………」

ゼフィランサス

「それでも……………、この設定がないとお話が動かないから……………、我慢して……………、キラ……………」

キラ

「それはそうと、次回は特別ゲストが来るみたいだよ。誰かは知らないけど……………」

ゼフィランサス

「では……………、第3回でお会いしましょう……………」

なぜなにSEED第2回くミノフスキー粒子の性質と可能性の理論的考察く(後

次回も投稿予定は未定。気が向いた時に書いているため、いつ書きあがるかわかりません。

なぜなにSEED第3回くフェイズシフト・アーマーの具体的検証く

ゼフィランサス

「では……、第3回も引き続きミノフスキー粒子のお話をC・Eに
咲いた黒い薔薇……、ゼフィランサス・ズールと……」

キラ

「神聖なる悪意、白銀の魔弾キラ・ヤマトがお送りします」

ユツカ

「そしてゲストはこの私、実質1話しか登場していない無名キャラ、
ユツカ・ヤンキーだ」

キラ

「ユツカ、何だか、小さく見えるけど……」

ユツカ

「仕方があるまい。私は享年5歳だからな。ゲストとして引っ張り
だされたところで5歳児のままだ」

ゼフィランサス

「お姉ちゃんがかわいい……。膝に抱いてもいいですか……?」

ユツカ

「抱き上げてから聞くな」

ゼフィランサス

「頭撫でててもいいですか……?」

ユツカ

「撫で始めてからきくんじゃない」

キラ

「じゃあ、定位も定まったところで、話を始めようか？　今回はフェイズシフト・アーマーのちょっと具体的な話をして説明するみたいだね」

ユツカ

「ああ。そうしないと色々不都合が大きいからな。たとえば、原作ではフェイズシフト・アーマーはとにかく堅いという設定だったが、BlumenGartenでは違う。確かに、元々の装甲であるチタン系合金の強度から脆いはずはないが鉄壁の防御というわけではない」

キラ

「フェイズシフト・アーマー、作者がいちいち打ち込むのが面倒だから、ここからはP S装甲と書くそうだけど、これはエネルギーを拡散吸収して装甲を守る。ここで問題になるのはその性能だね」

ユツカ

「そう。P S装甲はそれの実、運動エネルギーそのものの吸収を苦手としている。熱エネルギーはその性質上効率的に吸収できるのだが、案外と実弾兵器に弱いことになる」

キラ

「それじゃあ実はビームを受け止めることの方が得意ってことになるじゃないか」

ゼフィランサス

「お姉ちゃんがかわいい……」

ユツカ

「逆説的だが、実はその通りだ。それでも何故ビームなら貫通できるかと言うと、それは単純に威力が高いからだ。たとえば、PS装甲がビームに対しては100、実弾に対しては50の防御力を発揮するでしょう」

キラ

「設定上、ビームは通常兵器の3倍の威力があったね」

ユツカ

「そう。そのため、実弾が50の威力を得るためのエネルギーをビームに回せば150の攻撃力を得ることができる。実弾には50の防御力を発揮する以上、防ぐことはできるが、ビームに対しては倍もの防御力を有しながら破壊されてしまう」

キラ

「モバイル・スーツが使用できるビーム以外の兵器は50を超えることができないんだね」

ユツカ

「まだ細かい設定もあるが、それは特に気にする必要はないだろう。結局、モバイル・スーツ程度の武器では破壊できないと覚えておけばいい」

キラ

「その運動エネルギーに対する防御の弱さが質量兵器への脆さに繋がってるんだね？」

ユツカ

「そうなるな。どうしてもIフィールド内部に衝撃が伝わってしまうからな」

キラ

「Iフィールドも面倒な単語だね。ミノフスキー粒子の膜構造をすべて指すから性質や用途も千差万別。把握しきれないところがあるんだけど」

ユツカ

「あまり気にするな。単にミノフスキー粒子の膜と何度も書きたくなかっただけだ、作者がな」

ゼフィランサス

「お姉ちゃんがかわいい……」

キラ

「でも、オーベルテューレがレールガンを弾いたり、PS装甲が搭載されているフレームが強度を増しているような描写が見られるけど、これは強度強化でない設定と矛盾しないかい？」

ユツカ

「オーベルテューレには特殊なPS装甲が採用されているからな。電圧を調整してより強固に形成されたIフィールドが外からフレームを押さえつける形で瞬発的な負担を軽減する作用がある。もっとも、こいつはとにかくエネルギーを食う上、発生する熱量が膨大になる。オーベルテューレがわざわざ装甲を解放するのは、強制排熱量を増やすための苦肉の策だ」

キラ

「ビーム・ライフルが装備できないのもジェネレーター出力と消費量が釣りあってないからだってね」

ユツカ

「そう。また、ミノフスキー・クラフト・システムを使用して斥力を発生させる構造は核動力搭載機と一部のバッテリー式の機体に搭載されているが、この中でも攻撃や防御にこのシステムを利用できるのはオーベルテューレだけだ」

キラ

「斥力を任意のタイミングと方向で照射できるってことだよね？」

ユツカ

「そう。たとえば攻撃された際、それに反応して斥力が攻撃を受け止める方向へ働くと同時に、その衝撃を広域に分けて受け止める。それによって実弾からのダメージもより軽減される。また攻撃の際もやっていることは同じことだ」

キラ

「この機構も、作用反作用の法則からフレームへの負担が大きくなるからオーベルテューレにしか搭載できなかった。そう言うことかな？」

ユツカ

「正解だ。まあ、オーベルテューレはやはり実験機としての意味合いが強い。異質な機体であることに間違いないな」

キラ

「フォイエリヒガンダムはまったく別のPS装甲が採用されているけど、これが他の機体に搭載されていない理由は？」

ユツカ

「正確にはガンダムトロイメントにも装備されている。だが、言ってしまうならエネルギー消費が膨大だからだ。設定上、ビームを弾くIフィールドは相当なエネルギーを加える必要があるが、それを全身に張ろうとすると、7000とかいうジェネレーター出力が必要になる。ジンが大体1000、フリーダムでも4000程度だということを見るとこれがどれだけ異常な値かわかるな」

キラ

「核動力を使っても難しい値だね」

ユツカ

「フォイエリヒガンダムが他の機体に比べて大型であるのは、ジェネレーターの大型化を余儀なくされたためでもある」

キラ

「その代わり機体の重さが通常の倍ほどもある。動かすにも止めるにも倍の運動エネルギーを必要とする。これだと操縦は難しくなるだろうね」

ユツカ

「そうそう高性能な機体を生み出せるわけがないというものだ。もつとも、作者はこんな装甲をPS装甲、相転移装甲と呼んでいいのか悩んでいるようだ」

ゼフィランサス

「ああ……、お姉ちゃん……」

ユツカ

「ゼフィランサス、いつまで撫でているつもりだ？」

キラ

「ゼフィランサス、そんな子どもが欲しいのかい？」

ユツカ

「貴様！ 私が死んでいるのをいいことにゼフィランサスに子どもには聞かせられないようなことをしでかしたんじゃないかな！」

キラ

「どこからつつこんだらいのかわからないけど、まず、君だって子どもだろ！ それに、僕とゼフィランサスの間に割って入って欲しくない」

ユツカ

「ゼフィランサスに何かしてみろ！ 化けて出てやるからな！」

キラ

「作者は無神論者のカトリックだよ。魂は信じてても、幽霊は信じてない。それに、こんな子ども発言は、ファースト・ガンダムのランバ・ラルが愛人にかけて言葉だよ」

ユツカ

「作者がお遊びで色々なガンダムの台詞を仕込んでいるのは知っているが、変に仕込もうとして唐突な台詞になってしまっている部分があるだろうが！」

キラ

「ユツカ、君は、ガンダムは宇宙世紀派なのにガンダムSEEDの2次創作を書いているせいで、SEEDファンからはどことなく受

け入れてもらえず、宇宙世紀派の人からは何となく距離を置かれているように感じている作者の疎外感がわからないのかい？」

ユツカ

「知ったことか！」

ゼフィランサス

「そろそろお話に収拾がつかなくなり始めているので……、第3回はここまでというお達しがありました……」

キラ

「第4回はモビル・スーツのお話を予定しているそうです。司会者はまだ未定。ただ、これまでの流れからして、ヴァーリと既存のキャラクターの誰か、という流れになりそうです。ところで、ユツカ、最後にこれだけは言っておくけど、僕はゼフィランサスを諦めるつもりはないよ」

ユツカ

「ふん。ところで、ゼフィランサス、お前は一体どれだけ私の頭を撫で回せば満足するんだ？」

なぜなにSEED第4回くモビル・スーツの誕生とその現状く

ナタル

「第4回を任せられたのは、ちよつと設定を弄くっただけで立場が180度変わってしまい作者を大層慌てさせたナタル・バジールと」

サイサリス

「ゼフィランサスとサイサリスは絶対にライバル関係にあらねばならない。そんな作者の考えから悪役路線まっしぐらのサイサリス・パパです」

ナタル

「ところで、まったく面識のないはずの我々がどうして司会に選ばれたのだろうか？」

サイサリス

「きつと、作者が面白がってるんですよ」

ナタル

「まあ、言っても始まらない。第4回のテーマはモビル・スーツについて。モビル・スーツがどのようにして誕生したのか、まずはこのことについて語りたいと思う」

サイサリス

「まず、モビル・スーツ以前の兵器のお話から。年号がC・Eに入ってから、大規模戦闘は行われていませんでした」

ナタル

「ほぼ半世紀以上に渡って安定していたのだが、そのため、宇宙への本格的な進出後も戦艦こそ建造されたが、戦闘機などの独立兵器はほとんど造られてこなかった」

サイサリス

「宇宙は広大。だから誰もがレーダーに頼った遠距離からの撃ち合いを想定していました」

ナタル

「ところが、C・E・40年代頃から電波異常が確認されるようになった。実のところ、この異常の原因はいまだもって統一された見解を持たない」

サイサリス

「ドクター・ミノフスキーが発見した粒子、ミノフスキー粒子がその原因であると、細かな論文は言ってますけど、これも結局1学説にすぎませんでした」

ナタル

「それが明確にミノフスキー粒子の作用によるものと判明するためにはゼフィランサスの登場を待つことになる」

サイサリス

「もつとも、ゼフィランサスは主にミノフスキー粒子の兵器転用を中心に研究してまして、詳細な原理までは知っていません」

ナタル

「実はこの電波障害がモバイル・スーツをはじめとする機動兵器の開発を促すようになる。レーダーが役に立たなくなった時のための保険というわけだ」

サイサリス

「初めての機動兵器はラタトスク社のメビウス・ゼロ。この機体、はじめは初号機でしたけど、あまりに難しい操縦性から、ゼロの劣化版ともいえるメビウスが正式に採用され、型式番号が1つ繰り下がる形でゼロの名称を得ました」

ナタル

「メビウスは確かに優れた兵器ではあったが、あくまでも対艦戦を想定した大雑把な動きを想定されたものだった」

サイサリス

「メビウス・ゼロの開発者であるゼフィランサスは、当初から対機動兵器を想定した設計をしていたことはあまり知られていません」

ナタル

「ゼフィランサスは当時からモバイル・スーツの登場を予見していたのだな」

サイサリス

「というより、モバイル・スーツそのものが私たちが基本設計を組んだものですから」

ナタル

「なるほど。確かにモバイル・スーツのことなら私だけでも語り尽くせると思うが、歴史の裏は君の担当らしいな」

サイサリス

「任せてくださいな。人型の兵器。まず、これに意味はないように思われますが、その汎用性の高さは言うまでもありません。た、だ、

し、そうすんなりと受け入れられた訳でもありません」

ナタル

「大西洋連邦でもモバイル・スーツを取り入れるまでには開戦から4年近く経過した後だった」

サイサリス

「ゼフィランサスがまずメビウスの開発に携わったのはそんな意味があります」

ナタル

「10年前は、せいぜい君たちの年齢は5歳だとか6歳だと思うが、よく設計などできたものだな」

サイサリス

「実はヴァーリという設定は、私たちに天賦の才を付与する以上に、こんな小娘相手に莫大な資金と知識が与えられているという設定の不自然さを解消するための設定という側面の方が強いのですから」

ナタル

「要するに、君はプラントでより大きな理解と協力を得られたからこそザフトはいち早くモバイル・スーツの投入に成功したのだな」

サイサリス

「そうそう。それは私たちヴァーリの性能テストの意味合いもあり、予算は流動的に扱うことができました」

ナタル

「正直ゼフィランサスに与えられた額は小国を買えるほどの推測もあるが、それで一応の納得はできる」

サイサリス

「さて、ではここでモビル・スーツのちょっとした分類についてお話ししますね。モビル・スーツは世代で分けることができます。ZGMF-1017ジンのような機体は第1世代、ガンダムは第2世代です」

ナタル

「分類の方法として、第1世代はムーバブル・フレームを採用していない機体群のことで、外骨格系と呼ばれている。人のように骨格と筋肉を持たず、装甲と装甲の間にモーターを設置してこれを動かしているためだ。この構造の利点は設計が比較的容易で安価なこと。また、量産体制が整っていることだろうな」

サイサリス

「反対に装甲が骨格を兼ねてしまっていますから、被弾すると様々な不具合が生じます。防御のための装甲なのに被弾が許されないという自己矛盾が弱点です。第2世代モビル・スーツはムーバブル・フレームと呼ばれる骨格と筋肉の機能を併せ持つフレームを有していて、そこに装甲を貼り付けた構造をしている機体のことです」

ナタル

「もつとも、コストの問題からムーバブル・フレームはすべてのガンダムで採用されている反面、量産機には両軍ともに搭載されていない。よって、第1世代か第2世代かを分けるのは乱暴な話、量産機は第1世代モビル・スーツ、ガンダムが第2世代モビル・スーツだと思っておけばいい」

サイサリス

「おまけに第3世代モビル・スーツは可変機構を有しているモビル・

スーツのことです。そして変形できるモビル・スーツはムーバブル・フレイムを必要とします。ムーバブル・フレイムを有するのはガンダムです。AⅡB、BⅡCならAⅡC。結局、第3世代もガンダムの特等席になります。ただ、GAT-X303イージスガンダムは第3世代ですけど、ZZ-X300AAフォイエリヒガンダムは第4世代モビル・スーツです」

ナタル

「第4世代モビル・スーツは核動力を搭載した高性能モビル・スーツのことだからな。結局、第2から第4までガンダムが事実上独占していることになる。わざわざ分類する必要があったのかも疑わしいな」

サイサリス

「宇宙世紀派の知識を変なところでひけらかすの悪癖ですよ。おまけにミノフスキー・クラフトなんて装甲そのものを推進器に使用したものですから第4世代モビル・スーツもまた被弾に弱いなんて点を抱えていますし」

ナタル

「ともかく、次だな。次はモビル・スーツ1機あたりの運用コストについて。正直鬼門だな」

サイサリス

「作者はF-22ラプターくらいじゃないかって1,200億とか考えてた時期もあったみたいですけど、これだと、大変です。1000機とか揃えようとするとそれだけで腐っても経済大国である日本の年国家予算の円グラフが目に見える形でえぐられます」

ナタル

「しかし、数千万にもできそうにない。他の作者との話などで、50〜100億くらいに抑えられればとも考えているそうだが、それでもガンダムは1000億、ゼフィランサス・ナンバーズに至っては数千億とか考えているらしい」

サイサリス

「他にも戦艦を作ったり基地を整備したり人件費も必要になれば食糧や医薬品、軍服を揃えるだけでも一苦労。さらに兵士が敵1人を倒すのに10万発もの弾を必要とするなんてデータを考えると消耗品がそれだけで膨大な数必要になって、さらに物資を輸送するだけでもコストがかさみます。こんなにお金がかかるのに、人ってどうして戦争をするんでしょう」

ナタル

「それが次のテーマであるらしい。最も、まだ軍需産業ラタトスクにするかザフトの話をするかは悩んでいるらしいが。まあ、パターンはいつもと同じだ。ヴァーリと既存のキャラクターの組み合わせだ。全部で13回なんて無茶な数を設定しているようだが、よくヴァーリが足りるものだな」

サイサリス

「キャラクターの数だけはそんじゃそこらの2次創作に負けませんよ、きっと。では、次回はザフトかラタトスク。ゲストについてはお楽しみですよ」

ナタル

「ところで、君が実はローズマリー・ロメオかもしれないというのは本当か？」

サイサリス

「秘密です」

なぜなにSEED第5回く軍需産業ラタトスクの設立経緯及びブルー・コスモ

ヒメノカリス

「第5回司会はムルタ・アズラエルが強すぎるせいで適度な強さの敵役をさせられるヒメノカリス・ホテル」

メリオル

「原形は一体どこに？ 名前と姿しか設定が守られていないメリオル・ピステイスがお送りします」

ヒメノカリス

「どうして私がこんな泥棒猫と……」

メリオル

「それは私の台詞です。あなたが来る前は私とエインセルさまは2人だけの蜜月を……」

ヒメノカリス

「お父様の前じゃいつもカマトトぶってる嫌な女の癖に」

メリオル

「四六時中つきまとわれて、エインセル様がどれほど迷惑を被っておられるか。いつになったらお気づき願えるのですか？」

ヒメノカリス

「説明が終わったら覚えてなさい」

メリオル

「何でしたら、エインセル様のほくろの位置を教えて差し上げまし

ようか？」

ヒメノカリス

「……第5回は軍需産業ラタトスクについて。作者は、いまだにラタトスクなのかラタトクスなのか判然としないで、調べてもすぐに忘れてしまうことからもうラタトスクで通すことに決めたそう」

メリオル

「設定上軍需産業とされていますが、様々な企業を吸収合併して誕生した経緯もあり、原作と同様複合体としての性質もあります」

ヒメノカリス

「世界でも有数の企業であるとともに、軍需産業では業界最大手。本社は大西洋連邦」

メリオル

「メビウスの開発を手がけたことにより、大きく成長したラタトスク社ですが、これがゼフィランサスの協力によるものであったことは明言こそしていないとは言え、小出しにしてきた事実とかわれま

ヒメノカリス

「ここで、歴史を簡単におさらい。元々ラタトスクはほんの10年ほど前にお父様たちが立ち上げた会社でした。成熟しきっていた軍事の業界に新規参入することを周りは冷ややかな目で見ていたとのこと」

メリオル

「ところが、ラタトスク社はアズラエル財団、ピスティス財団の2大財閥の資金援助を受けて急成長することになります」

ヒメノカリス

「いい加減金目当てに利用されてるんだって気づきなさい」

メリオル

「ムルタ・アズラエルという人物は実在します。アズラエル財団の若き総帥であります。誰もその人物とブルー・コスモスの幹部が同一人物であるかどうか確証を掴むことが今までできませんでした。アズラエル家には3人の子息がおり、その内の1人、エインセル・ハンターがピステイス家の令嬢と結ばれました。それが私のことであり、エインセル・ハンターは誰が何と言おうと私の最愛の夫です」

ヒメノカリス

「単にお父様の妻だっただけの女の癖に」

メリオル

「エインセル様の娘というだけでなれなれしい」

ヒメノカリス

「……ムルタ・アズラエルは元々ムウ・ラ・フラガの本名」

メリオル

「エインセル様も本名は私と同じピステイス姓です」

ヒメノカリス

「いい加減になさい。誰もあんたとお父様のことなんて聞きたくありません」

メリオル

「エインセル様の前だけ猫を被って、あなたのような人が女性とい

うものの評判を下げてしまおうのです。まったく、嘆かわしい」

ヒメノカリス

「ラタトスクの発展によって、お父様たちはブルー・コスモス代表の座を得た」

メリオル

「紛らわしいのですが、ブルー・コスモスそのものは母体であった環境保護団体から独立してすでに半世紀以上経ちます。また、ラタトスク社が関わる以前から大きな規模を有していました」

ヒメノカリス

「お父様たちはユニウス・セブンにはあくまでも1構成員として侵入した。もつとも、お父様たち3人がブルー・コスモスの中でも過激な部類に入る人たちを唆したのは事実のよう」

メリオル

「それが代表に上り詰めるほど力を得るには約8年かかりました。ラタトスク社の成長に伴い資金力が増加。その資金力を背景にブルー・コスモスの代表に就任しました」

ヒメノカリス

「元々ブルー・コスモスの理念の賛同者にすぎなかったお父様たちだけど、その主導権を得たことで政界への強力な発言権を持つに至った」

メリオル

「共和制では国民の大多数の意思が反映されやすく、ブルー・コスモスという大票田はどのような政治家にも無視できるものではありません。地球上の多くの国で遺伝子調整が禁じられているのは残念

ながらエインセル様の功績ではなく政治団体として活動していたブルー・コスモスの成果です」

ヒメノカリス

「そんな、ブルー・コスモスは軍内への影響力や賛同者こそいながらも市民団体の枠からは出ていない。幹部が戦艦に乗り合わせていないのはそのため」

メリオル

「ムルタ・アズラエルという例外こそありますが、大半の幹部はあくまでも文民であるため、軍事面が強く表にでている現在では登場の機会が与えられていません」

ヒメノカリス

「戦えない人はみんな地球にお留守番」

メリオル

「また、ここからもわかるように、ブルー・コスモスが軍事へのつながりを強めたのはこの10年の間のこと。それ以前は過激ながらも単なる環境保護団体にすぎませんでした」

ヒメノカリス

「軍事と繋がったことはお父様の成果」

メリオル

「そうですね。まだまだ小さかったラタトスク社をエインセル様と2人で切り盛りしていた頃が忍ばれます」

ヒメノカリス

「余計なこと言ってる暇があったらラタトスクの説明したら？」

メリオル

「言っておきますが、私とエインセル様は5歳の頃からの知り合いで、ハイスクールまで机を並べて学んだ仲です。正式に籍を入れたのは卒業後でしたが、私たちはそれはそれは周りの同級生が羨むほどのベスト・カップルでした」

ヒメノカリス

「わ、私だって肩を並べて戦うとかなら……」

メリオル

「これでわかったでしょう。所詮あなたは私とエインセル様の娘です。どうあがこうと、私とエインセルさまがすごしてきた時間を追いつくことなどできません」

ヒメノカリス

「問題は長さじゃなくて密度でしょ」

メリオル

「ここがノクターン小説であれば私とエインセル様の濃厚な一時をとくと聞かせましたのに」

ヒメノカリス

「何だか、作中よりも強気？」

メリオル

「私は原則エインセル様とセットで登場することが常ですから」

ヒメノカリス

「やっぱり猫被ってる」

メリオル

「では、そろそろ締めに入りますよ。感想でわかりにくいというご意見をいただいた、ゼフィランサスのことについて少々。ゼフィランサスはユニウス・セブンからラウ様によって連れ出された後、ラタトスク社で開発をしていました」

ヒメノカリス

「していたことは大きくわけて3つ。メビウス・ゼロなどのモバイル・アーマールの開発。ゼフィランサス・ナンバーズとそれに連なるGATシリーズの開発」

メリオル

「元々はゼフィランサス・ナンバーズを開発していましたが、ゼフィランサスの設計はきわめて強力である反面人を選びます。ゼフィランサス・ナンバーズでは扱える人がムルタ・アズラエルしかない。だからその性能を落としてGATシリーズを開発しました」

ヒメノカリス

「メビウスの時もそう。ゼフィランサスがはじめに設計したメビウス・ゼロは極めて強力だったけど、操縦できる人が少なすぎてメビウスにスケール・ダウンされた」

メリオル

「ちなみに、メビウスの設計はゼロをモデルとしてラタトスク社の社員が行いました」

ヒメノカリス

「実はデュエルダガーやストライクダガーの設計も他の人。ストライクノワールをはじめとする3機も1度ゼフィランサスの手を離れ

て設計の見直しがされたもの。ゼフィランサスは限られた予算内だとか汎用性、扱い易さを重視した設計を大変苦手としている」

メリオル

「高性能ながら扱いにくい機体。それがゼフィランサスの開発した機体群の代名詞になっていることは事実です」

ヒメノカリス

「お金もかかるしね。ゼフィランサス、ラタトスク社に拾われなければその才能の片鱗さえ見せられずに終わったかも」

メリオル

「ですから、ヴァーリというのはお金を工面してもらったための設定である面が大きいのです」

ヒメノカリス

「こんなもの？」

メリオル

「そのようです。では、次回予告を。今回は今度こそザフトについてお話します」

ヒメノカリス

「原作とは異なり、戦争の期間が長いから、そのことについて簡単な戦史のおさらいとザフト軍の今に連なる現状について」

メリオル

「ヴァーリはカルミア・キロを予定しています。原作ゲストは砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドです」

ヒメノカリス

「終わった」

メリオル

「終わりました」

ヒメノカリス

「あなたとは1度決着をつけなきゃいけないと思ってた」

メリオル

「望むところです」

なぜなにSEED第6回くジブラルタル基地を中心とするザフト軍の編成と実態

カルミア

「第6回はアイシャの出番を完全に奪ってしまったカルミア・キロと」

アンドリュー

「砂漠の虎アンドリュー・バルトフェルドがザフトについてお送りする」

カルミア

「では最初に原作との違いについて説明しようかな。ザフトは、原作では政治結社から始まりましたけど、ブルーメン・ガルテンでははじめから軍事的な色合いの強いものです」

アンドリュー

「下手に変な設定を挟んでしまうよりこちらの方がわかりやすいと作者は判断したらしい。ちなみに、プラントでは現在のところ徴兵制は採用されていない。そのため、あくまでも義勇兵としての意味合いが強い組織だ」

カルミア

「階級が設定されていないのも、そんな組織としての性格の現れね」

アンドリュー

「そうそう、カルミア。ザフトが実は若い組織であることは知っているね」

カルミア

「もちろんよ。だから、あなたのような若い人が指揮官なんて任せられてるんでしょ」

アンドリユー

「そう。結成されたのはだいたい2、30年くらい前と考えているそうだが、軍隊として活動をはじめたのはほんの10年ほど前。血のバレンタイン事件を期にプラント国内の急進派の台頭を受けての話になる」

カルミア

「そのため軍内のベテランと言っても、実は30代の人でさえ設立当初からの古参の人ということになる」

アンドリユー

「その上、やはり戦争が長すぎた。ザフトは確かに大西洋連邦軍を地球に押し込めるくらいの快進撃を見せたが、その実多くの兵士を失った。僕のような若造がジブラルタル基地の南を任せられるのも、人員不足が一因だね」

カルミア

「あなたは立派に務めを果たしたわ」

アンドリユー

「男を甘やかすものではないよ。実際、ジブラルタル基地は陥落させられてしまったしね」

カルミア

「それなら北と東の人と同じでしょ」

アンドリユー

「紅海の鯨マルコ・モラシムだね。彼は原作ではカーペンタリ基地の所属だが、ブルーメン・ガルテンでの基地規模は非常に小さい。拠点はジブラルタル基地に置いていたという設定に変更されている」

カルミア

「原作では暴漢に殴られて、傷の手当をしてもらったらストックホルム症候群も真っ青なくらい暴漢にべったりだった国もあるそうだけど、その設定はプラント勲員の余計なものと取っ払ったそうよ」

アンドリュー

「その設定のおかげでカーペンタリ基地は縮小を余儀なくされた。なんと言っても、因果関係を考えられない馬鹿な協力者がいなくなってしまったからね」

カルミア

「ちなみに、現在のヨーロッパ地区に当たる北の守りも設定は一応していたとこのこと。森林の狼シン・マツナガ」

アンドリュー

「冗談がきついね。元々シン・マツナガは白狼と呼ばれるジオン軍のエース・パイロットじゃないか」

カルミア

「そうみたいね。だから、一応考えてはみたけど、作中に登場させるつもりもなかったんですって。まったく、設定の量だけは一人前ね」

アンドリュー

「ただ、南は虎、北は狼、東が鯨とうまく揃っていると個人的には考えているそうだよ」

カルミア

「西にいないのは、ザフトが制海権を有していないから」

アンドリュー

「実際、海まで遮断してしまうと、地球中の国々を敵にしまうからね。原作はファースト・ガンダムを意識し過ぎている。地球連邦なんてないんだから、別に地球すべてを敵に回しているわけじゃない」

カルミア

「その割に協力してくれる国がいるというのは、設定上の不備ね。作者は詳しい裏話を知っているわけではないけれど、SEEDの設定には様々な人が関わったそうよ」

アンドリュー

「そのせいかな。設定に整合性が悪くて、継ぎ接ぎのような世界観に散見されるね。もっとも、作者のように1人でしようとすると細かいところがおざなりになりがちだそうだよ」

カルミア

「特にコーディネーター設定には粗が目立つというか、ご都合主義になりがちね。コーディネーターの子どもはコーディネーターの特性を引き継ぐなんて、生物学的に考えてもおかしなこと」

アンドリュー

「しかし、そうとでも設定しなければらいことになる。だが、こはザフトについての話だ。この話は次の機会に回そう。僕としてはザフトの地上部隊について話したいんだけどね」

カルミア

「たとえば、地球侵攻用のモビル・スーツ開発が遅れに遅れたこととか、かしら？」

アンドリュー

「そんなところだね。実際、君が作ってくれたバクウは優秀だ。量産もザフトが勢力を保っていた時期に始められたし、なんと言っても不整地に対応できる兵器というのは大きいね」

カルミア

「ありがとう。そう言ってくれると、私も努力した甲斐があったわ」

アンドリュー

「ビクトリア基地がいまだに陥落していないのはバクウの力が大きい。もちろん、ダコスタ君のがんばってくれているようだ」

カルミア

「原作ではおとぼけキャラだったけど、ブルーメン・ガルテンだと、ちょっと男前かしら？」

アンドリュー

「僕が少年との戦いで戦死することはプロットの段階から決まっていたからね。さすがに原作通りの性格だとアフリカ方面軍の指揮官代理をさせても説得力がない」

カルミア

「でも、動かしてみたら以外とレイ・ユウキ公安職員と同じようなリアクションが多くて困っているそうよ。どうやら、作者は優秀な人というもののイメージが固まっているみたい」

アンドリュー

「楽しそうだね、カルミア」

カルミア

「さすがに100人も出せばキャラクターだってかぶるでしょ。実際、そのために早めにご退場願った人もいたみたいだから」

アンドリュー

「また話がそれたね。そう、ザフトは元々地球にまで戦火を拡大するつもりはなかったんだ。実際、戦争を短期で終わらせるつもりだったしね」

カルミア

「ところが戦争は終わらない。それに、元々モビル・スーツは宇宙用というイメージがあったから、地上戦線への導入も当初は行われなかった」

アンドリュー

「実際重力下での行動は負担が大きい上、コロニーのように管理されていない環境というものはザフトにとって未知数だからね」

カルミア

「ただ、それでも通常兵器では地球側に一日の長がある。結局、モビル・スーツを投入せざるを得なかった。でしょ？」

アンドリュー

「確かにモビル・スーツは地上でも強力ではあったけど、その代わり、整備性が劣悪だった。早い話が十分な拠点なしに運用できなかったんだ」

カルミア

「ジブラルタル基地やビクトリア基地、バナディーヤなどの拠点を中心に活動せざるをえなかった」

アンドリユー

「言わば点と点の範囲でしかモバイル・スーツを扱うことはできなかったのさ。実際点と点と繋いで線にすることも面にすることもできなかった」

カルミア

「それがザフト軍の地球における膠着状態を招く最大の原因でもあったそうね。戦闘機のように空を飛び回れるわけでもなく、戦車のように数をそろえられるわけでもない」

アンドリユー

「元々国力差は10倍。はじめからザフトに地球全土を制圧する力なんてないからね。制空権云々は制圧しなかったという事情のほか、できなかったという現実もある」

カルミア

「この戦争はするべきではなかったということね。そう、作中でもラウ・ル・クルーゼが誰もが望まぬ戦争と言ってたかしら」

アンドリユー

「戦争は外交の失敗なんて呼ばれてる。少なくとも、喜び勇んでるものではないさ。もつとも、軍人さん方は喜んでするがね」

カルミア

「それが仕事だから。それに、そんな軍部の暴走を止めるために文民統制なんて言葉もあるのよ」

アンドリユー

「そう言えば、オーブは原作だとカガリは軍の階級を持つとともに国の代表でもあったね。総選挙もなしにアスハ家の息女というだけで就任か。完全な君主制国家だね。別に君主制と独裁は必ずしも繋がらないけど、周りからはC・E最後の独裁国家と呼ばれてたんじやないかな。僕にも装甲だけで量産機17機分なんてプレゼントしてくれる親が欲しかったよ」

カルミア

「また話がそれたわね。まあ、大体ザフトについてはこんなところかしら。きりがいいし、ここで終わりにしましょう」

アンドリユー

「今回はC・Eのエネルギー事情について簡単に話そうか。まだ、ゲストもヴァーリも決まっていないようだがね」

カルミア

「エネルギーに詳しい人なんていたかしら？」

アンドリユー

「ゲストの方も謎だよ。軍事面を強調するあまり、政治家があまりいないからね。それに、パトリック・ザラやシーゲル・クラインはちょっと問題だ」

カルミア

「ところでアンディ、ラゴウが撃墜された時、あなたが庇ってくれたんでしょ、私のこと」

アンドリユー

「僕の図体がでかくて、君が小柄だったそれだけの話さ」

カルミア

「アンディ」

アンドリュー

「もっとも、ゼフィランサス君の方がもっと小さいらしいけどね」

カルミア

「アンディ……」

なぜなにSEEED第7回くC・Eにおけるエネルギー問題とニュートロン・ジャ

デンドロビウム

「第7回エネルギー事情については、デラーズ・フリートの戦乱をオーバー・テクノロジーで駆け抜けたデンドロビウム・デルタと」

プレア

「原作なんてあってないようなもの。プレア・レヴェリーがお送りします」

デンドロビウム

「まず聞くけど、あんたは？」

プレア

「僕はプレア・レヴェリー。生前はゼフィランサスさんの元でザフト製のガンダムの開発に携わっていました。あと、原作でいうところのニュートロン・ジャマー・キャンセラー、プレア・ニコルの由来にもなりました」

デンドロビウム

「なるほど、エネルギー事情にあんたが呼ばれた理由もわからないじゃない」

プレア

「デンドロビウムさんは設定上、地球の各国を回っているからですよね」

デンドロビウム

「作者の方じゃ、消去法で選んだらしいけどな」

プレア

「では、そろそろ始めましょう。まず、原作では化石燃料が枯渇した設定になっています」

デンドロビウム

「だが、本当に化石燃料がないなら原子力に依存の度合いを強めざるを得ないことになる。そうになると、ニュートロン・ジャマーなんてももの落とされた時点で地球の文明はあつという間に崩壊する」

プレア

「実際、太陽光や自然エネルギーを利用した発電も存在しますけど、これらはとても効率が悪く、西暦の現在において主力発電ではないのもそのためです」

デンドロビウム

「だからSEEDの世界では太陽光発電のエネルギー効率が9割を超しているなんて茶化す向きもあるんだってさ」

プレア

「反対にそこまでクリーン・エネルギーが高性能なら、核なんて使いません。そうすると、ニュートロン・ジャマーの降下で被害はほとんどでないことになります」

デンドロビウム

「ここで作者がとれる道は3つ。1つは実は、ニュートロン・ジャマーは大したことなくて被害なんてほとんどでなかった。2つ目は1つ目の事実に加えて、それでも被害はすごいんだって、プラントは悪い奴なんだって言うプロパガンダに使ったか。でなきゃ、化石燃料を枯渇させないかのどれか」

プレア

「ニュートロン・ジャマーが効果がないならまず、プラントが降下させる意味がありません」

デンドロビウム

「それって降下と効果をかけたダジャレ？」

プレア

「いえ、そんなつもりは……」

デンドロビウム

「まあいいや。次に、ニュートロン・ジャマーは国力の差を埋める意味もあつたから、できれば効果が働いてほしかった。だから結局化石燃料を残したんだってさ」

プレア

「ガンダムSEEDを原作とする2次創作は作者もいくつか眺めてはみたみたいですけど、なかなかエネルギー問題を扱ってくれている作品はなくて、それに、作者同様、化石燃料を残している人もいました」

デンドロビウム

「急に電気が止まって、もうテレビも見れない、じゃすまないからな。冷蔵庫も使えないし、化石燃料がないなら自動車も電気自動車。もしかしたら、C・Eじゃ地産地消が徹底してて、身の丈にあつた牧歌的な生活を地球はしてたのかもしれないけど」

プレア

「そうしたら大西洋連邦が大量消費社会であるという設定まで変え

ないといけなくなりますから」

デンドロビウム

「それに、停電が怖いのは犯罪の急増を招くから、なんて話もあるから。食べ物もなければ生活もできない。なのに治安は悪化。これですく10億ですんだもの」

プレア

「原作では場合によっては数億なんて表現されることもありますけど……。地球の指導者がそこまで優秀だということは聞きません」

デンドロビウム

「何せ原作じゃ、大西洋連邦とユーラシア連邦がいがみ合ってるわ、オーブみたいに好き勝手やってる国があるやうで無茶苦茶。そう言えば、オーブは地熱発電を頑張ってたから被害はありません、なんだってさ。作者が知らないだけかもしれないけど、なんかSEEDの設定って整合性がなかったり、ご都合主義」

プレア

「僕はそこまでは思いませんけど、ともかく、現在ほどではないにしろ、C・Eでも化石燃料は利用されているということにしたみたいです。ただ、やはり資源量は減っていて、原子力への移行も進んでいるみたいです」

デンドロビウム

「プレア・ニコルも手には入ったし、地球は原子力発電を再開したんだっけ？」

プレア

「まだ、みたいですね。炉は一度止めると大変ですし、それに戦争

中で復興作業もままなりませんから」

デンドロビウム

「ようはこの戦争が終わってからか。ただ、実際、オーブがあればどお気楽でいられたのは地熱発電やらが盛んでニュートロン・ジャマー降下の影響をあまり受けなかったって話もある」

プレア

「作者にしてみると、そんなところもご都合主義に見えてしまったそうです。実際クリーン・エネルギーと呼ばれるものは効率が悪くて、一国の電力を賄おうとすると莫大な予算と施設が必要になります」

デンドロビウム

「原子力発電が一般化している中で金をかけてまでクリーン・エネルギーを使う理由なんてないか。それとも、ウラン鉱石も枯渇しているとか？」

プレア

「それなら代替エネルギーの存在なしに地球の文明が成り立ちません。それに、オーブは基本的にプラントよりの行動が多い国でもあります」

デンドロビウム

「コーディネーターに好意的なことはともかく、マスドライバーを爆破した理由がわからない。マスドライバーが地球連合軍に利用されたところで、オーブは何も困らないだろ」

プレア

「一応、マスドライバーを残しておくでザフト軍の標的にされてし

もう恐れがあるということも危惧されますけど、それなら戦争なんてする前にマスドライバーを破壊して降伏すべきでした」

デンドロビウム

「反対に実はオーブは裏でプラントと繋がっていて、マスドライバーを利用させないためにわざわざ戦争までしてから爆破したなんてことも考えられる」

ブレア

「それだと色々説明がつきます。オーブが中立国でありながらも技術盗用までして自国のモバイル・スーツ開発を急いだことや、地球連合軍があそこまで性急な手段に出たことも。これから宇宙に上がるという時に獅子身中の虫を残しておけない。でも、時間もないということですから」

デンドロビウム

「実際、作者はエネルギー問題とオーブの外交姿勢から鑑みて、エピメディウムを送り込んだらしい。オーブが中立国だというのはあくまでも建前。原作でもカガリが他国と関わらないという意味での中立を厳格に守りすぎて、誰の敵にもならないどころか、世界中を敵に回していった雰囲気さえあった」

ブレア

「他にも実はウズミ代表がとても狭量な人物で、オーブを自分のもののように考えていて、他の誰かに奪われるくらいなら爆破してやると自棄を起こした。なんて話も考えはしたそうですけど、それはやはりあんまりだとやめることにしたみたいです」

デンドロビウム

「実際、半官企業と言え一企業の施設に爆弾仕掛けるなんて為政

者のすることじゃないな。某都知事が某都庁に、実は爆弾を仕掛けていて、有事の際には爆破するつもりだ。なんてことがあったら、みんなどう思う？」

プレア

「悲壮な覚悟の持ち主というより、人命省みない暴君ですよ。なお、これは実際の人物を想定したものではなくて、あくまでもたえ話です」

デンドロビウム

「だんだんと作者の設定批判が激しくなって気がするな」

プレア

「実際、ブルーメンガルテンは設定面の不備を補完しようとしていたらできあがった作品と言っても過言ではありませんから」

デンドロビウム

「作者もそろそろ自分が怖くなってきたみたいだから、今回はこれくらいにするそうだ」

プレア

「自分で自分が抑えられない。何となく格好いいですけど、実際には、ただみっともないだけです」

デンドロビウム

「さて、次はと、地球の国家か、プラント、あるいはヴァーリについて、だそうだ」

プレア

「まだ決め切れていないみたいです。国家はまた原作設定の批判が

始まりそうで、プラントは58、9話くらいにならにと時期早々な気がします。だから、たぶんヴァーリになるのではないのでしょうか」

デンドロビウム

「司会はなんとダムゼルからの登場だ。サイサリスとゼフィランサスは終わってるから、あと3人だな」

プレア

「ゲストはわかりません。その時の気分で決めることが多いそうですので」

デンドロビウム

「では最後に言っておく。別に作者は某都知事のこと、きれいじゃないぞ」

プレア

「では、第8回でお会いしましょう」

なぜなにSEED第8回く略歴、ヴァーリとドミナントく

ニーレンゲルギア

「では、第8回を担当いたしますのは、ダムゼルの中で最も影が薄いことを懸念されておりますニーレンベルギア・ノベンバーと」

コートニー

「残っているのはせいぜい寡黙なことくらい。コートニー・ヒエロニムスがお送りいたします」

ニーレンゲルギア

「今回の話題は皆様お待ちかね、かしら？　ヴァーリとドミナントについてです」

コートニー

「ゲストにどうして私が選ばれたのか、後にブーステッドマンの話も予定されているが何故ここでニーレンベルギア様が登場したのか、尽きぬ疑問を右から左に受け流し説明に入らせていただきます」

ニーレンベルギア

「とは申しまして、ヴァーリやドミナントは作中でも何度も取り上げられています。そんなに付け加えることはありませんけど、補足説明くらい、させてもらいます」

コートニー

「まず、簡単に歴史のおさらいを。プラントはコーディネーターによって作られた国であり、そのため、遺伝子調整というものに対して異常なほどに寛容です。また、次世代コーディネーターの開発は国是でした」

ニーレンベルギア

「そのため、当初はいくつもの研究機関が平行して開発を進めていました。ただし、当時はドミナントもあくまでも汎用性に特化したヴァーリという位置づけでしかありませんでした」

コートニー

「作中でもお話しました通り、命名の仕方に違いが見られるのはその名残です。元々ヴァーリが研究され、そこから派生的にドミナントが開発されました」

ニーレンベルギア

「では、ヴァーリについて。これは元々北欧神話に登場する神名に由来します。まあ、神様とは言っても、オーディンやトール、ロキのように有名どころでは残念ながらありませんけど。おまけに同じ名前の神様が2人います」

コートニー

「1人は主神オーディンの息子として知られる復讐の神。少々長くなってしまいますがお聞きください。主神オーディンには溺愛する息子である光の神バルデルがいました。その息子は誰からも愛されました。ところが、その人気を妬む者がいたのです」

ニーレンベルギア

「それがかの有名な悪神ロキです。ロキはバルデルの兄である盲目の神ホズを騙し、弟であるバルデルを殺させてしまいます」

コートニー

「オーディンは嘆き悲しみ、復讐を誓います。ホズもまた自らの息子であるにも関わらず、殺害してしまうことを決断したのです。予

言によると、さる王国の姫君とオーディンの間に生まれた子が復讐を果たすと啓示されます」

ニーレンベルギア

「オーディンは半ば脅迫紛いのことでして、人間の娘に自らの子を産むことを承諾させます。その結果生まれたのがヴァーリ神でした。ヴァーリは復讐を恐れて隠れていたホズを見つけたすと、これの殺害に成功します」

コートニー

「続いて、ロキの2人の息子の1人がヴァーリの名前を持ちます。バルデル神の殺害を仕組んだことが露呈すると、ロキは神々の手によって重い罰を加えられることとなりました」

ニーレンベルギア

「それは、神々の黄昏と誤訳される、万物の力による破壊を意味するラグナロクの日まで岩に括りつけられ、毒蛇の毒液を浴び続けなければならぬというものでした」

コートニー

「その際用いられた紐は、ロキの息子の腸を魔力で変質させたものでした。神々はその腸を取り出すためにヴァーリに呪いをかけ、狼へと変身させることで実の兄弟を殺害させたのです」

ニーレンベルギア

「私たちがヴァーリと呼ばれる理由もまた2つです。1つは、オーディンの息子ヴァーリがそうであったように、必要と明確な目的の下に生み出された存在であるということ」

コートニー

「また、ダムゼルとフリークに峻別され、血を分けた姉妹の間でさえいがみ合い、殺し合いが想定されていたという事実から、ロキの息子ヴァーリの名が冠されました」

ニーレンベルギア

「こんなところでいいかしら。次はドミナントについて」

コートニー

「わかりました。まず、ドミナントの研究がヴァーリの中の一部でしかないことはすでに話しましたが、それが独立するきっかけとなったのは、アズラエル財団の存在です」

ニーレンベルギア

「作中でも話しているため、詳しい説明はさけますけど、高性能を追求すること、それが可能であることなどから、ドミナントはプラントの注目を集めることとなりました」

コートニー

「ただし、その成果が国外に流出してしまった事態を重くみたプラントはすべての研究をかのユニウス・セブンにて行うようになります。それが、ニーレンベルギア様たちヴァーリを生み出すこととなりました」

ニーレンベルギア

「血のバレンタイン事件ではそれが裏目にでる形でした。ただ、ドミナントはユニウス・セブンで命名されました。これは音楽用語や生物学の用語に見られる言葉で、1つ上だとか、優占種などという意味があります。コーディネーターを超えるコーディネーターとしての存在が期待されました」

コートニー

「まとめるなら、ヴァーリをより好都合な人間を生み出すための研究、ドミナントをより高性能な人間を生み出すための研究とすると分かりやすいでしょう」

ニーレンベルギア

「実際、1つの構図として、ドミナントという優れた指導者の下にヴァーリという特化した能力を有する従者が付き従うというものが想定されていたようです」

コートニー

「それが洗脳がヴァーリにしか施されていない理由です。また、ヴァーリのお父様であるシーゲル・クライン研究の最高責任者でしたが、その際、試作品である娘たちに従うべき王として自らを設定したのです」

ニーレンベルギア

「ドミナントの責任者はレノア・ザラ。よって、アスラン・ザラはパトリック・ザラの息子というよりもレノア・ザラの息子としてザラ家に入ったとする方が正解です」

コートニー

「ヴァーリがドミナントという実質的な成功作が6体であるのに対して、ドミナントはアスラン1人だけが選ばれた理由は、ドミナントが単なる数字の比合いであるのに対して、ヴァーリは様々な特性を持つことが想定されていたからです」

ニーレンベルギア

「ドミナントは試作体も9体だけ。ヴァーリに比べると3分の1程度しかいません。それも、こんなところが理由です」

コートニー

「なお、ドミナントがドミナントと呼ばれる以前の研究で成功したのはエインセル・ハンターのみ」

ニーレンベルギア

「エインセル・ハンターを妙に美形だと書いてきたのは、それだけ優れた技術で作られたコーディネーターであるということの伏線として。一体何人の方がこんな弱い伏線に気づいてくれたかしら？」

コートニー

「設定資料集にも、登場した段階からコーディネーターであると記載がされていました。ですが、美形というだけでドミナントだと判断することは不可能でしょう」

ニーレンベルギア

「作者にしても、複数の伏線で1つの事実に結びつけるという技法がどこまで有効なのか測りかねているところがありますし」

コートニー

「美形であること。ドミナントを圧倒する身体能力。また、最強のガンダムを手足のごとく扱って見せること。また、ラウ・ル・クルーゼが語っていたエインセルが成功作として認められたという発言。そして、レノア・ザラのアスランたちの兄であるという独白。これらすべてが徐々にエインセル・ハンターをプロト・ドミナントであるとするための伏線であったのです」

ニーレンベルギア

「もっと弱いものだと、キラとエインセルが対峙した際、ゼフィランサスがドミナントであるキラを制止している場面も、一応伏線に

上げられるでしょうか？」

コートニー

「ただでさえ長いお話であるのに、これほど細々として伏線を張り巡らせて、本当に覚えてもらっていただけなのか、そればかりが気がかりであるようです」

ニーレンベルギア

「それでも露骨すぎると先の展開を読まれてしまう。作者は、展開を読まれたら負けだと思っているそうよ」

コートニー

「意表をつくことは簡単です。山の洋館に閉じこめられた一行。次々と殺されていく仲間たち。では、犯人は？」

ニーレンベルギア

「はじめに殺されたAを憎んでいたBかしら？ それとも、唯一アリバイのないC？ でなければ一番疑わしくないD」

コートニー

「正解は神様が暇つぶしに1人1人殺しているだけでした」

ニーレンベルギア

「斬新なような陳腐なお話ですけど、意表は確実にについているでしょうね」

コートニー

「ですが、ミステリー小説として失格もいいところです。ノックス氏が聞いたら石版を叩きつけて怒ることでしょう。このように、ただ意表をつくだけなら簡単なのです」

ニーレンベルギア

「問題はその展開にどれだけ説得力を持たせることができるか。それが、目下の悩み所。もつとも、ここは小説の書き方が議題ではありません」

コートニー

「はい。では、8回はここまでといたしましょう」

ニーレンベルギア

「第9回は地球の国家について。担当はエピメディウムお姉さまです」

コートニー

「ゲストは未定。ただ、少々荒れそうな話題であるため、エピメディウム様を配したように、しっかりとした人物を起用したいのとです」

ニーレンベルギア

「でも、今日はありがとうございました。この頃原作の設定批判で荒れがちでしたが、コートニーさんのおかげで穏やかにすみました」

コートニー

「いえ、元々原作とは関わりない部分でした。それに、スーパー・コーディネーターに関する話題を意図的に避けたことが功をなしたと思われます」

ニーレンベルギア

「確かに、スーパー・コーディネーターはご都合主義の塊みたいなところが……」

コートニー

「ニーレンベルギア様」

ニーレンベルギア

「ごめんなさい。では、第9回でお会いしましょう」

なぜなにSEED第9回〜ニュートロン・ジャマー降下後の地球各国の動向〜

エピメディウム

「第9回は、一人称を少し変わったものにしようとしたら、すっかりボーイッシュな感じが定着してしまったエピメディウム・エコーと」

モーガン

「原形は容姿と名前だけ。そんな設定無視の先駆けと疑われるモーガン・シュバリエだ」

エピメディウム

「今日はよろしくお願いします。たしか、モーガンさんはユーラシア連邦の方でしたね」

モーガン

「ああ。もともと、ユーラシア連邦国籍なんてのは、俺くらいなものだが。原作では、大西洋連邦軍人として、ルーラシア連邦軍のカナード・パルスと戦ったくらいなんだがな」

エピメディウム

「原作では大西洋連邦とユーラシア連邦は対立していますから。ただ、お話を始める前に確認しておかなければならないことがあります。このころの、原作の設定批判が多くて、場が荒れがち。そんなことを気にしている小心者の作者が抑えて話を進めて欲しいと要望してきました」

モーガン

「やっではみるが、どうせ書き始めれば止まらなくなるのはいつも

のことだろう」

エピメディウム

「僕もそう思います。だから気にせずいきましょう。まず、設定の変更点から。原作ではプラントよりの国家の存在と、地球連合内での軋轢が描かれています」

モーガン

「作者は詳しく名前を覚えてないんだが、欧州連合だとか、そんな感じの国家が親プラント派だったな。カーペンタリ基地はその協力で建造されたそうだ」

エピメディウム

「では、どうしてこれらの設定を変えてしまったのか、そこから話を初めていきましょう。答えは簡単です。では、1＋1は？」

モーガン

「答えは簡単。だから正解は2ではなくて簡単だ、とか言うんだろ」

エピメディウム

「……、作者が納得できなかったからです」

モーガン

「強引だな。まあ、いいが」

エピメディウム

「地球では各国が疲弊してしまい、窮状にありました。そこへプラントが手を差し伸べたことで友好関係が築かれ、地球の国の中では協力する国が現れました」

モーガン

「ただ、実際はニュートロン・ジャマーをプラントが降下したことがそもその原因だ。奪われたものを返してもらったら友情が生まれるというのは、少々考にくいものだな」

エピメディウム

「強盗が奪ったものを返しにきた。すると、ありがとう、君のためなら何でもするよと答えますか？ それとも返して当然。そもそもこんなことをするなと怒りますか？ こんな話ですよ」

モーガン

「ニュートロン・ジャマーの被害人数ははっきりしていないことが多いが、それにしても被害者が少なすぎる。ブルー・コスモスのテロで億単位の人的被害が出ているとは考えにくい、ブルー・コスモスのテロで肉親を失った登場人物ならいくらでもある反面、プラントのテロで身内を失った登場人物の登場がないのは不思議なものだな」

エピメディウム

「事実の積み重ねではなくて、何となく大西洋連邦を悪役として描きたい。そんな都合から無理な展開にせざるを得なかったのか？」

モーガン

「でなければ国家情勢を考えた人間とニュートロン・ジャマーを考えた人間が別だと言うことくらいだな」

エピメディウム

「モーガンさんや、大佐から大将の格上げされたウィリアム・サザーランド大将の登場は、そんなことからでした」

モーガン

「プラント側の被害者はアスランがいるからな。今更用意する必要はないが、地球側の被害者は見あたらないからな。やはり、無理にファースト・ガンダムを意識しすぎだな」

エピメディウム

「ファースト・ガンダムではコロニー降下で被害をどれくらい受けたかによって対ジオン感情は異なっていましたね。飴と鞭の政策で、実際北米ではうまくやっていたなんて話も伝わってます」

モーガン

「コロニーを落とすなら被害がまばらになることも頷けるが、原子力発電なんてものは世界中で行われている。第8回の話に戻るが、本当に化石燃料が枯渇しているなら、電力の大半を原子力に依存せざるを得ない。そうすれば、確かに損失した総電力では確かに各国に大きなばらつきができるだろうが、被害の程度は変わらない」

エピメディウム

「全体を通して言えることですけど、SEEDは無理してファースト・ガンダムを真似ようとして本当に無理でした、なんてお話が多いですね」

モーガン

「そんなことで、地球の国々を2つに分けざるを得なかったそうだな。1つは大西洋連邦をはじめとする対立派。そして、中立を維持する国々だ」

エピメディウム

「オーブのように、僕たちヴァーリなどが潜入して裏工作を行っている国もありますけど、大半はプラントに対して敵対的。大西洋連

邦のように余力のある国が戦争に参加して、ない国はその援助に回る。そんな形ができあがっています」

モーガン

「悪い宇宙人が攻めてきたから地球が1つになった。言ってしまうならこんな印象だな。まあ中には自分たちの好き勝手に動いていた小国もあるみたいだが」

エピメディウム

「オーブはそのためにも中立国であることを堅持するとともに、それを理念として内外に宣伝することで地球も一枚岩ではないという印象を与え続けていました」

モーガン

「大がかりなプロパガンダだが、そこまでしなけりなかつた理由は何だ？ はじめからニュートロン・ジャマーを降下しなかつたという選択肢はなかつたのか？」

エピメディウム

「ご家族をなくされたモーガンさんには申し訳ありませんが、ここから先はネタバレ要素を含んでいます。だから話せないそうです」

モーガン

「あと5話で終わろうかと言う時にまだ回収されていない伏線があるのか」

エピメディウム

「実際、プラントがニュートロン・ジャマーを降下した理由は不明です。当時の代表はみなさんご存じの通り、シーゲル・クライン。原作では比較的穏健派と知られる僕たちのお父様です」

モーガン

「だが、ニュートロン・ジャマーの降下が核兵器の抑制であるのなら、予告なしの降下である必要はなかった。そもそも、当時ザフトは確か地球侵攻がまともに進んでいないはずだから、核を使用される危険性はない」

エピメディウム

「ブルーメンガルテンにおけるお父様のお考えや、プラントの社会としての閉鎖性はこんなところから来ています。原作では大西洋連邦をアメリカをはじめとする資本主義国家として描いたなんて話もありますけど、遠く離れた場所で何が起きていようと知ったことではない。プラントも十分にアメリカ的ですわね」

モーガン

「脚本家はどちらかと言えば大西洋連邦を悪役に描きたかったのだろうが、それならニュートロン・ジャマーの設定は正直な話余計だ。また、あくまでも大西洋連邦をはじめとする地球連合との戦争であったはずが、地球の国だというだけで標的にしていることもおかしい話だ」

エピメディウム

「そうして原作の事実と設定を厳密に採用していくと、どうしてもアンチ・プラントの展開になってしまいます」

モーガン

「おまけに作者は生命倫理の方じゃ、脳死臓器移植まで反対しているそうだな」

エピメディウム

「実際、難しい問題だとは思いますが、コーディネーターという存在はあまりに危険だと考えているみたいです。ただ、SEEDをご覧になっている皆さんはブルー・コスモスと聞いただけであら、悪役か、なんて考えるでしょうから、作者としては最初その認識を利用してプラントの悪行を隠していたそうですよ」

モーガン

「それで、俺のようなキャラクターを登場させて徐々に雲行きを怪しくしておきながら、まだブルー・コスモスの方が悪いという認識でもって世界観を維持していた訳か」

エピメディウム

「実際、ブルー・コスモスも十分悪行働いてますが、親愛なる読者の方々はきつと原作通り、プラントも悪いかもしれないけど、ブルー・コスモスはもっと悪いと考えていたと思います」

モーガン

「それで50話を境に一気に畳みかけてプラントの国としてのあり方を暴露することでアンチ・プラントの体制を作り上げたというところか」

エピメディウム

「現在どれくらいの方が戸惑ってくださるか、それだけが楽しみですから」

モーガン

「悪い女だな、お前は」

エピメディウム

「実際悪巧みをしているのは作者ですけどね。それに、読者の方々

の中にはこれでどうやってあと5話で話を終わらせるのかと疑問視している方もいるみたいですし」

モーガン

「ムルタ・アズラエルは相変わらず無敵。キラとゼフィランサスはこの頃まともに会ってもいない。おまけにプラントはプラントで国としてのあり方に問題がある。さてさて、どうなることやら」

エピメディウム

「泣いても笑っても後5話です。大西洋連邦が勝つのかプラントが勝つのか。そして、キラたちは3人のムルタ・アズラエルに勝つことができるのか」

モーガン

「そういえば、イザーク・ジュールとか言うガキも行方不明だったな。アスランに次いで2位の成績で軍学校を卒業したそうだが」

エピメディウム

「ただのコーディネーターが食いついただけでも立派なものですよ。ただ、僕の心配は、これからの5話の中に、僕の出番がどれだけあるかということです」

モーガン

「俺は名前くらいは登場するらしいぞ」

エピメディウム

「僕は主戦場から30万kmは優に離れた場所にいますから。ところで、作者はムルタ・アズラエルがあまりに強いことかた、キーワードに敵キャラがチートなんてものを乗せようか悩んでいるみたいですよ」

モーガン

「乗せるのは勝手だが、その程度のことと読者数が増やせると考えるのはあまりに安易だとは、わかっているんだろうな？」

エピメディウム

「……では続く第10回はいわゆる強化人間であるブーステッドマン。開発責任者であるニールンゲルギアはすでになく、果たして司会是谁が？ ゲストは誰？」

モーガン

「ゲストはそのまま被験者であるロベリアが来るそうだ。ゲストは何故かマリユール・ラミアス女史の名前が挙げられているな」

エピメディウム

「モーガンさん、どうして僕の話の腰を折るんですか？」

モーガン

「いや、俺はただ話を進めただけなんだが……」

なぜなにSEED第10回くブーステッドマン、軍需産業における人体改造の事

ロベリア

「第10回は、ロベリアとカルミア。姉妹で似たような名前の印象になってしまい、作者を悩ませたロベリア・リマと」

マリユー

「ついにドミノオンの艦長。何から何まで原作とは逆を行く、マリユー・ラミアスがお送りします」

ロベリア

「まずは、自己紹介をさせてください。私はロベリア・リマと言います。初登場は砂漠編で、ヴェルデバスターに乗ってました。そして、ボアズ攻略の前哨戦で戦死しています。それと、ヴァーリの1人です」

マリユー

「これまで事細かに自分の紹介をした人なんていなかったけど、あなたはどうしたの？」

ロベリア

「だって、私、全然目立ちませんから……。人気投票で、2010年9月現在、ヴァーリはだいたい半数の人が投票してもらっているのに、私なんて名前を覚えてもらっているかも怪しいですから……」

マリユー

「気に病まないで。人気投票なんてほとんどの人が入れてもらっていないわ。作者も登場人物が100人なんてやりすぎたと考えているくらいよ」

ロベリア

「そう言えば、マリューさんも得票数ゼロでしたよね。2010年9月現在で」

マリュー

「ど、どうしてもメイン・キャラクターに比べると出番が少なくなるものよ」

ロベリア

「でも、作者も思いも寄らないサブ・キャラクターが票を集めてるみたいですよ。やっぱり、出番が少なくてもできる人はできるんですね……」

マリュー

「……そろそろ、本題に戻りましょう。今回はブーステッドマンについて」

ロベリア

「はい。原作では、薬物によって強化されたり肉体を外科的に改造された人たちのことです」

マリュー

「調整を受けているあな呼ばれたのはわかるけど、私がここにいる理由がいまいちわからないわね。まあ、ともかく、原作との違いから言っていきましょう」

ロベリア

「はい。まず、ブルーメンガルテンでは元々軍事用の技術ではなくて、細胞の活性化を狙った実験を軍用に転用したという設定に変更

されています。同時に、薬による副作用も低い次元に抑えられています」

マリュー

「その理由として、禁断症状が軍用にはあまりにお粗末であるから。長い戦闘も十分に考えられるのに、薬が切れた途端に性能が激減するのでは、あまりに安定しません」

ロベリア

「軍隊というところとはにかく安定性と信頼性を求めるところみたいですし。そんな中で確かに強いけど、安定性がまるでなく、さらに味方にまで被害を及ぼすような信頼性に乏しい兵器を使いたくないって考えませんよね」

マリュー

「それに、人としてのバランスをあれほど欠いておきながら、それでもスーパー・コーディネーター以上では決していないということも不自然。どちらも高性能を追求したものでありながら、スーパー・コーディネーターに時間制限はなくて、また人格面でも安定しているところがあるわ」

ロベリア

「原作のブーステッドマンの経歴は不明で、よくわからないところがありますけど、ブルー・コスモスの施設にいたみたいなお話がありますね。そうすると、あの人格は反コーディネーターの教育思想によるものだと考えられますね」

マリュー

「わざわざ兵器としての安定性を欠くような教育を行っていたとなると、軍需産業とは思えないお粗末さね」

ロベリア

「実際のところ、この施設はデスティニー編で急遽エクステンデッドを設定したため、ブーステッドマンとの整合性を無理に組み上げたみたいなところがありますから」

マリュー

「たとえばロドニア・ラボに代表されるような施設があるのだとすると、ブルー・コスモスは何十年も前からプラントとの戦争を準備していたことになる。ただ、原作では、プラントは元々国ではなくて、あくまでも工場群として設定されていたというお話もあります。そうになると、ザフトはあくまでも労働組合みたいなもので、研究期間を考えると、だいたい30年くらい前。そんな頃に労働組合との戦争を想定して準備していたとするのは不自然な気がするわ」

ロベリア

「そこまで先見の明があったにして、ザフトのモビル・スーツ開発に気づけなかったり、ジェネシスの存在を全く知らなかったことも不自然ですよ」

マリュー

「それに、コスト面もお世辞にも優秀とは言えないでしょうね。ブーステッドマンも、エクステンデッドもコーディネーターを圧倒できるほどの性能は発揮できなかった。もちろん、優れてはいたけれど、高いお金をかける価値があるとは思えないわね」

ロベリア

「人数も問題ですよ。いくら優れていても、3人のブーステッドマンを育てられるお金で300人の兵士が育てられるのだとしたら、そっちの方がいいですよ」

マリュー

「そもそも、地球にとってモビル・スーツは新しい兵器のはずだから、卵が先か鶏が先かのお話になるわ」

ロベリア

「ブーステッドマンの3人は、性能が高くなりすぎた新型機を使わせるための生体CPUだなんて設定もありましたね。ガンダムが先で、それに合わせたのか、それとも、ブーステッドマンがたまたま使用できただけなのか」

マリュー

「それにしたところで、フリーダムのような機体には及ばなかった。いくら何でも、コーディネーターが強すぎる、そんな印象かしら」

ロベリア

「そもそも、コーディネーターとはあくまでも人として優れた能力を持っているというだけであって、薬物や改造まで施された人には勝てないと思います。オリンピックなんかでドーピングが厳格に禁止されているのは、それだけ薬物が強力かつ危険だからです」

マリュー

「せめて、スーパー・コーディネーターとキラ・ヤマトがまるでかなわない。薬が切れるのを待つ必要がある。それくらいの設定があればブーステッドマンのいびつさが強調されてなおよかったでしょうに」

ロベリア

「正直なお話、アルファさん、いえ、アスランさんとこれ以上戦わせるわけにはいかなくなつて、プロヴィデンスガンダムが登場する

までの繋ぎの敵役として用意されただけみたいな人たちでした」

マリュー

「人体に手を加えることの恐ろしさを示すのかと思いきや、ただ凶暴で粗暴なだけ。ブルー・コスモスは悪い奴だなんて一方的な主張に利用されただけのキャラクター以外の何者でもなかったことが残念ね」

ロベリア

「ですから、私たちはインフォームド・コンセントの1つの実例としての役割を担っていたみたいですよ」

マリュー

「簡単に言ってしまうなら、医師は患者に説明して、同意をとらなければならぬということだったかしら。それでも、それは反対に同意さえあれば何をしてもいいことにつながりかねない」

ロベリア

「ただ、あくまでも小道具の1つとして設定されただけみたいですから、そんなに前面に出てきてはいません」

マリュー

「確か再生治療の一貫として行われたもの、だったかしら？」

ロベリア

「はい。臓器なんかを再生利用しようなんて試みは20世紀でも行われていますけど、臓器移植は大変です。今の技術では血管を繋ぐことができて、神経を繋ぐことは難しいですから。だから自覚症状がないまま、移植臓器が深刻な段階まで病変が悪化していたとしても気づくことができない、そんな問題もあるみたいですよ」

マリュー

「ほかに、古いもので、データ数も偏ったものであるとは言え、心臓を移植された場合とされなかった場合の5年生存率はほとんど変わらない、そんなことを発表している論文もあるみたいね」

ロベリア

「だから人によっては数年に1度心臓を取り替える必要があるなんてこともあるみたいです」

マリュー

「それなのに、臓器はなかなか手に入らない。アメリカでは、高速道路の速度制限をきつくしたところ、事故が減少し、脳死患者が減ってしまったことを受けて、再び制限速度を緩くするべきではないか、そんな議論が大まじめに行われたこともあったそうよ」

ロベリア

「臓器移植はとても大変な問題です。実際、頭部を持たない人体を誕生させて、それから臓器を抜き取ろうだとか、ラットに人間の耳を作り出す細胞を植え付ける実験が成功したなんてお話も聞いたことがあります」

マリュー

「ほかにも病気の子どもを救うため、遺伝子が適合する子どもを新しくわざわざ生んだ一家がいるなんて話が映画になったりとか、アジアの貧困家庭では臓器を売るために子どもを作るなんてお話も聞いたことがあるわ」

ロベリア

「臓器を得るためにはいくつかの方法があります。ブルーメンガル

テンでは、プラントは脳を持たない人体を工場で生産しているという設定が登場しています。ただ、これは倫理的に大きな問題があります。脳に障害を持った人は人として扱わなくてもいいのか、人は誰しも平等に生まれてくる権利があるのではないか。実際、富裕層のために、そのクローンを育てて臓器のスペアを人体で栽培しているということをテーマにした映画もありました」

マリュー

「プラントでこのようなことが行われているのは、やはり命に手を加えるという意識に対する抵抗が弱いことが挙げられるわ。なんといっても、遺伝子操作が駄目だというのなら、自分たちの誕生そのものを否定してしまうことになるから」

ロベリア

「だから、私たちブーステッドマンは、他から臓器を持つてくるものではなくて、自分の細胞から臓器を作り出せないかという実験の派生的な存在として設定されているみたいです。プラントとは異なる、地球側の遺伝子調整に対する否定的な意識の体现の1つですね」

マリュー

「ただ、軍需産業がお金を出すためには兵器転用を試みているためだと言っておく必要があるから。それが、あなたたちブーステッドマンが戦場に出ている理由ね」

ロベリア

「はい。少なくとも、遺伝子操作がもたらす未来は明るいけど、命に手を加える末路は悲惨だとか、そんな歪んだ価値観に乗るつもりはなかったみたいです」

マリュー

「もっとも、そのせいで多少優秀な兵士程度の実力にとどまってるだけ」

ロベリア

「私たちが弱いんじゃないかもしれません……。キラさんやムルタ様が強すぎるだけです……」

マリュー

「それは、確かにそうでしょうけど……」

ロベリア

「では、こんなところでしょうか。ブーステッドマンの説明なのか、作者の生命倫理観の説明なのかよくわかりませんでしたけど……」

マリュー

「では、次回の第11回は、戦記について多少説明しておくみたいね。登場するヴァーリはラクス・クライン。原作のキャラクターだけど、一応ヴァーリだからということ」

ロベリア

「ゲストは未定、ではないですけど、意表をつきたいかた秘密にしておくみたいです」

マリュー

「では、次回でお会いしましょう」

ロベリア

「最後に、これだけは言わせてください。私とジャスミン姉さんを互いが気づかないまま相打ちにさせるなんて、作者って本当に悪趣味ですよ……」

なぜなにS E E D第11回くエイプリルフル・クライシス、地球の黄昏く

ラクス

「こんにちは。第11回目はクライン派ゲリラを一手に率いたラクス・クラインと」

マルコ

「あゝ、俺はだな……」

ラクス

「存じています。紅の鯨と呼ばれるザフト軍のエース、シモムラ・コマルさん、でしたでしょうか」

マルコ

「いえ、マルコ・モラシムです……」

ラクス

「それでは、第11回は戦記について、お話しようと考えています。まず、皆様ご存じの通り、と決めつけてお話させていただきますけれど、ブルーメンガルテンでは戦争開始からすでに4年が経過しています。原作が1年程度であることを考えますと、約4倍の時間を戦争に費やしていることになります」

マルコ

「その理由としてはだな、まず、ユニウス・セブンを10年前に設定してしまったためだな……」

ラクス

「もっと気を抜いて、楽になさってくださいな」

マルコ

「すまん、いや、すいません……こんなこと、慣れてないものでな」

ラクス

「原作とは違い、10年という余裕があったため、メリットも様々ありましたが、その反面、原作の戦記をそのまま持ってくることはできません」

マルコ

「その、代わりと言ってはなんだが、だいたい、戦争は1年で膠着状態に陥った。後の3年はほとんど似たような状況が続いたため、完全に別の流れを進んでいるわけじゃないそうだ」

ラクス

「それでも大きく変わったのは、オペレーション・ウロボロスと呼ばれる赤道封鎖作戦でしょう。原作ではニュートロン・ジャマーの降下とともに、主要な基地への侵攻を開始したとされています」

マルコ

「あゝ、作者としては、ここが問題だと感じたそうだ。何でも……」

ラクス

「プラントは、血のバレンタイン事件からわずか1月で大量のニュートロン・ジャマーを降下していることです。言うまでもありませんが、地球に落とされたニュートロン・ジャマーの数は膨大。それを国力が必ずしも潤沢ではないはずのプラントが何故、1月という短期間で投下できたのでしょうか」

マルコ

「それは、元々準備を進めていたからだな……」

ラクス

「はい。わずか1月で開発を終え、量産を終えたとするのはあまりにも不自然なことです。血のバレンティン事件以前にすでに降下の計画から事前準備まで完了していたと見る方が自然でしょう」

マルコ

「そう考えるとだ……」

ラクス

「実は、血のバレンティン事件の真相まで予測できます。血のバレンティン事件が誰の手によって引き起こされたかはこの際問題ではありません。ブルーメンガルテンではジョージ・グレンによる自爆でした。原作では、仮に大西洋連邦であるとしておきましょう。ただし、プラント上層部はこのことを知っていたと思われる節があります」

マルコ

「評議会が事前にユニウス・セブンを攻撃されることを、知っていた？」

ラクス

「はい。そう考えると、色々なことが説明できます。まず、知っていたからこそ、あらかじめニュートロン・ジャマーの準備を進めることができます。そして、ユニウス・セブンを核で攻撃されたとなれば、ニュートロン・ジャマーを降下する大義名分ができます」

マルコ

「確かに、戦争状態だからと、いきなりニュートロン・ジャマーを

落とすよりは……」

ラクス

「デステイニー編では、プラント国内でのジェネシスはやむを得ないことであつたと言う世論の醸成に成功しているとの描写がありました。世論の操作のためなら、22万の人命など安いものでしょう。エイプリル・フル・クライシスでは億単位の殺害に成功したのですから」

マルコ

「なるほど、要するに、プラントは核攻撃を知っていて、それを利用したと？」

ラクス

「もっと言ってしまうなら、血のバレンタイン事件そのおのがプラントの自作自演かもしれません。その理由として、戦争の準備が万端であつたのは突然攻撃されたはずのプラントの方でした」

マルコ

「俺は、原作でもブルーメンガルテンでも血のバレンタインで家族を失ったそうだが……」

ラクス

「原作の設定を厳格に適用しようとすると、それこそ国内の世論操作と、戦意高揚、戦争の大義名分を得ることが成功していることになります」

マルコ

「……どうして、この回に俺が呼ばれたんだ……？」

ラクス

「作者は悪趣味、ですもの。3度の飯より皮肉好き。さて、では次のお話です。これまでも何度か語られていますが、ブルーメンガルテンではザフトの地球侵攻の度合いが大きく異なっています」

マルコ

「たとえば、原作では制海権を得ていたり、様々な場所で戦争をしているイメージがあるが……」

ラクス

「ブルーメンガルテンではあくまでも赤道に限定しています。それは、マスドライバーなどの施設が赤道周辺に集中しているためです。ザフトは徹底的に地球と宇宙を分断しようとしてしました。さて、そこでおかしなことがあります」

マルコ

「ああ、あれだ、オーブも、マスドライバーを持っている、ことだな……」

ラクス

「はい。ザフトが戦火拡大に無頓着である以上、オーブも標的になってしかるべきです。ところが、オーブは中立国として侵略されていませんでした」

マルコ

「それは、したたかな外交戦略とかがあったんじゃないか？」

ラクス

「はい。中立と謳いながら、実はプラントとの間に不可侵の条約などを結んでいたのでしょう。そして、大西洋連邦には技術協力を続

けていた。大西洋連邦があれば強行に侵攻したのは、設定上ではオーブの2枚舌外交の末路だと言えます」

マルコ

「それと、だ。マスドライバーをジブラルタル海峡に増設したのは、俺たちのためもあるんだってな」

ラクス

「ザフトが制海権を有していない設定に変更してしまったため、モラシム様の部隊とアーク・エンジェルが会敵するのはたぶん偶然に頼ってしまうことになります。それでは水陸両用モビル・スーツの活躍の場がなくなってしまうます。また、原作のようにビクトリア湖を干拓したビクトリア基地を舞台にしようとしてしまうと、海がありません」

マルコ

「まあ、そんなわけでジブラルタル基地での戦闘に決まったらしい……」

ラクス

「そろそろまとめに入ります。SEEDの設定は、あまりにファースト・ガンダムを意識しすぎています。無理に1年で色々まとめようとしているため、血のバレンタイン事件とエイプリルフル・クライシスの間が短すぎます。ジオン軍のように、何から何まで計画づくであったならともかく、突発的なことに対処したようを装うには不自然です」

マルコ

「だからだ、できることなら、戦争の期間を、せめて、2年くらいに伸ばすか、でなけりゃ……」

ラクス

「プラントの計画的かつ意図的な大量殺戮、及びオーブの悪質な外交方針を前面に出さなければなりません。これはあくまでも推測にすぎませんが、設定の段階では、まるで被害者のように扱われるプラントが実は陰謀と策謀にまみれた国であり、オーブは自国の既得権益を守るために身勝手な行いをしている国だというしかなかったのではないのでしょうか。一見すると、大西洋連邦やブルー・コスモスが悪い。でも、世界はそんなに単純ではなくて、本当の姿はなかなか見えてくるものではない」

マルコ

「これは、作者が、監督と脚本家の関係を知っているから言うんだが……」

ラクス

「この設定を扱い切るには、脚本家さんには荷が重かったのかもしれない。少なくとも、ガンダムは様々な価値観の衝突こそがテーマであり答えです。ガンダムSEEDは設定面では十分にガンダムですけど、主人公が明確で正しい答えを持っていて、それを世界中の人に教えてあげようなんて設定にしまった時点で、ガンダムではなくってしまいました。それが、旧来からのガンダム・ファンの逆鱗に触れてしまったのでしょね」

マルコ

「それぞれの考え方には、必ずいい面も悪い面もある。それを一方的に否定して、さも自分たちだけが世界を救う方法を知っているとテロ行為を繰り返すのは、傲慢以外の何者でもない。実際……」

ラクス

「原作では、クライン派は否定を繰り返すばかりで明確な世界のあり方を示すことは一切しませんでした。あれも悪い、これも悪いではなくて、ではどうしたらいいのかを示さなければならなかったのではないのでしょうか？」

マルコ

「ブルーメンガルテンでは、それが示されているのか？」

ラクス

「それは秘密です。物語の根幹に関わってしまいますもの」

マルコ

「では、だいたいこのくらいか……。戦記というよりも、設定から考察した国際社会の現状みたいなものになってしまったが……」

ラクス

「今回はプラントについてお話します。58話段階ではまだ時期尚早かもしれませんが、これまで通り、設定を厳密に適用して、かつ生命倫理の概念を用いるとごのような国家になるのかを、ジャスミン・ジュリエッタに語っていただきます」

マルコ

「ゲストは、プラント最高評議会から呼ばれるらしい。まあ、パトリック議長やクライン議員ではないらしいんだが……」

ラクス

「マルコ様。今日はありがとうございました。おかげで、お話がスムーズに進みました」

マルコ

「いや、俺は、本気で何も……」

ラクス

「では、第12回でお会いしましょう」

なぜなにSEED第12回〈遺伝子操作、実力主義という選民思想とその弊害〉

今回は少々長くなってしまいました。

なぜなにSEED第12回〈遺伝子操作、実力主義という選民思想とその弊害〉

ジャスミン

「第12回は、登場は早いのに、満足な活躍の場所もなくして使い捨てられたジャスミン・ジュリエッタと」

タッド

「実質登場は2回だけ。作者が原作のキャラクターをほとんど知らないことからほとんどオリジナルになってしまったタッド・エルスマンでお送りする」

ジャスミン

「タッドさんは、プラント最高評議会議員さん、でしたね？」

タッド

「ああ。だが、目立たない中道派だね。作中では主にバカ息子に苦勞させられる父親だ」

ジャスミン

「今回はプラントとのことですけど、いいのでしょうか？ 作者のことですから、きっと否定的な意見が並ぶことに……」

タッド

「そう固くならなくてもいいよ。それに、様々な意見を表明できてこそ、健全な民主主義というものは発達するものだよ」

ジャスミン

「わかりました。では、お話を始めます」

タッド

「さて、何から話すでしょうか。そうだ、まず、原作との違いかな。原作では、プラントは明確に国家として誕生した訳ではないから、そこが、若干違うね」

ジャスミン

「これは、ブルーメンガルテン第1話で語られていることですけど、プラントはジョージ・グレン指揮の元、コーディネーターによる国家として誕生しました」

タッド

「はじめは地球連合各国の支援を受けながら運営されていた。ところが、新進気鋭の我らコーディネーターはすぐにそれが我慢できなくなってしまうってね。確かに監視はされていたけど、別に植民地扱いだったわけじゃない。それでも、独立機運というものは急速に膨らみ続けてしまってたね。ナチュラルの方としても、おっかなびっくりでコーディネーターのことを見守りたかったのだろうけど、そうもいかなくなってしまった」

ジャスミン

「その独立志向は、プラント政府によって醸成されたもののお話もありますね」

タッド

「実際その通りだよ。これは最高機密だが、プラントは地球が決して踏み越えさせてはいけないとして定めていた遺伝子調整の危険な領域まで研究を進めていたからね。もちろん、極秘にね」

ジャスミン

「それが、私たちヴァーリやドミナント、ですね」

タッド

「君たちなんてかわいいものさ。考えてもご覧。遺伝子を好き勝手に弄くって、どんな生物が生まれるかなんて、誰にもわからないんだよ。そうでなければ、実験の必要なんてないんだからね。君たちの前の世代を考えたことはないかい？ 君たちの中にだとして、障害を持って生まれてきた者もいれば、自然分娩でも一定の割合で何らかの障害者を持って生まれてくるものだよ。話によれば、人は大なり小なり、何らかの障害を持っているなんて話もある」

ジャスミン

「元々、危険なことなんですネ……」

タッド

「人権の問題もある。たとえば、実験の失敗で、人の形をして生まれて来なかった人がいたでしょう。この人の人権を、果たしてどうするかね？ 化け物だからと切り捨ててしまうかね？ それとも、障害者として手厚く保護すべきね？

ジャスミン

「やっぱり、障害者ですから……」

タッド

「ところが、こんなものを全部認めていたら、とてもではないけどお金が足りないよ。そうになると、失敗作は処分しなければならなくなってしまう。すると怖いのはモラル・ハザードだ。障害を持つ者に人権を与えなくてもいいということになれば、それはどの程度から認められるのだろうか。たとえば、四肢が揃っていないければ人権を剥奪すべきかい？ そんなことはない。四肢が生まれつきなかったとしても、人としての権利を剥奪される謂われは一切ない。また、

遺伝子の型で見ようか。すると、チンパンジーなど人と極めて遺伝子型の近い生物に人権を与えないといけないかもしれないね」

ジャスミン

「難しい問題ですね……」

タッド

「ルールや規則というものはそういうものだよ。誰かがその都度勝手に基準を作ってしまうものは、法律とは言えないよ。逆に言えば、この程度の障害なら人権を剥奪していいという決まりが作られたなら、次回からは基準に合致する者はすべて人権を奪われてしまうことになる」

ジャスミン

「私、みたいにですか……?」

タッド

「はじめは軽い気持ちだったと思うよ。でもね、優れた人を認めるということは、それ以外の人間を劣っていると決めつけて排斥することに他ならない。目が見えない。だから何だね？ 確かに不便だとは思うよ。でも、人としての尊厳を奪われてしかるべき理由にはならない。ところが、プラントは違うんだ。何といっても、優れた人のための理想郷だからね。たとえば、旧東側諸国では社会主義の理想を追求するために、その理想にそぐわない人々を徹底的に弾圧した。たとえば、定職についていない人々を、社会の活力を衰えさせる者として投獄したりね。しかし、実際は不景気で仕事が見つからないということもままある。それを、さも怠惰であると決めつけて断罪するような姿勢は、思考の硬直化の象徴だ。そして、プラントはどうしても閉鎖的にならざるを得ない」

ジャスミン

「コーディネーターの国だからですか？」

タツド

「そうなるね。地球の国にはナチュラルもいると公式設定ではあるようだが、プラントにナチュラルがいるというお話はあまり耳にしないね。それに、もしいたとしたら、決して待遇はよくはないだろう。何と言っても、コーディネーターの方が社会的には優れていることは明白だからね。だから、自然とコーディネーターが要職にく。すると、ナチュラルは社会的弱者に貶められるんだ。実力主義という美辞麗句の下にね。するとどうなるかな？ コーディネーターは増長しやしないかね？ ナチュラルなんてみんな間抜けばかりだ。生意気なんだよ、ナチュラルがモバイル・スーツなど。こんな言葉を言っていたコーディネーターがいたね」

ジャスミン

「コーディネーターであるという選民性に、プラントという閉鎖的な国家。それに実力主義という大義名分を得て、プラントはバランスを欠いていくんですね……」

タツド

「そうならざるを得ないんじゃないかな？ 実際、原作でもプラント国内の社会情勢についてはまともに触れられていない。多くの外伝でも、一応生命倫理の問題点に触れたことはあっても、やはりそれが主要なテーマではなかったみたいだしね。プラントという国は、設定を厳密に適応していくと、近年最悪の独裁政権にならざるを得ないんだ。別に、1人の意思で国が動くとか言うわけではなくて、コーディネーターという民族原理主義の名の下、ナチュラルという他民族の排斥に走らざるを得なくなる」

ジャスミン

「民族紛争は、作者も詳しい訳ではありませんけど、妥協点の見いだせない根深い問題だそうです」

タッド

「コーディネーターは、そもそもその出生が問題なんだ。子どもが優れてなくてもいい。それなら、遺伝子操作をする理由はない。ところが、コーディネーターは望んで子どもをコーディネーターにしようとする。それは、裏を返せば優れた子ども以外いらないと言っていることに他ならない。さて、そんな人たちだけで構成された社会がどうなるかな？ 社会保障？ 優れていないから社会の敗者なのだろう。そんな人間をどうして救ってやる必要がある？ 障害者？ それは社会に貢献もできないお荷物でしかない。そうはならないかな？」

ジャスミン

「実際、原作ではコーディネーターの子どもはコーディネーターの形質を受け継ぐなんてお話もありますけど、これは、正直無理矢理な感じがします。プラントを必要以上偏った国にしたくないという制作者の思惑が透けて見えて……」

タッド

「もしかすると、プラントではみんな試験管ベビーとして生まれてくるのかもしれないね。遺伝子調整ができるだけ分化していない受精卵が好ましいことを考えると、どうしても体外受精が一番いいということになる。また、出生率が低下していることをゆゆしき問題だ。それだけ、決まりきった遺伝子選ばれて、多様性がなくなっているということだからね」

ジャスミン

「誰も、頭の悪い子や、走るのが遅い子、それに、目の悪い子なんて欲しがりませんよね……」

タッド

「そうだろうね。ただ、そんな子どもでも、それでも自分たちの子どもだと、これまで多くの人はそれを受け入れてきた。それこそ、五体満足で生まれてきてくれれば、それだけで感謝に値するというくらいね。ただし、コーディネーターはよくも悪くも理想が高い。そうになると、ただ五体満足では我慢できないし、さらに障害者など論外だということになる」

ジャスミン

「そうになると、遺伝子は自然と、同じようなものが選択されますよね……」

タッド

「これを読んでくださっている人の中にはやはりの髪型や服に挑戦したこともある方もいるだろうと思う。その時、こう考えたことはないかね？ もし、子どもに遺伝子操作が可能であるのなら、やはり、その時ののはやりの遺伝子型が選ばれるのではないだろうかとね。面白いこといなると思うよ。顔かたちで年齢がわかってしまうかもしれない。ああ、これは30年前に流行った顔だ。この髪の色は20年前にはヒットしたドラマの主人公と同じだ。もしかすると、研究所によっては癖があって、そこから生まれた子どもは皆同じ特徴を持っているということもあるかもしれないね。街でたまたま同じ特徴を持った人と出会って、君、何々研？ 私もそうだよ、奇遇だね。そんな盛り上がり方ができるかもしれないけどね」

ジャスミン

「整形外科では、みんなが同じような顔に変えたがる、そんなお話

もあります。決して、絵空事ではありません」

タッド

「ガンダムSEEDは、設定はなかなか唸らせてくれるんだ。ところが、展開がいただけない。生命倫理なんてまともに登場しなかったからね。もちろん、ここに並べたことは、みんな作者の考えに他ならない。人によってはプラントこそ理想郷足りうるのだと考える人もいることだろう。ただし、私はそうは考えない。優れた人だけで構成された社会なんてものは存在しない。能力とは相対的なものだからね。たとえば、100mを9秒で走れるとしたら、それはすごい話だろう。ところが、周りが8秒で走ってしまったら、果たしてどうだろうね？ 結局、足の遅い奴だと蔑まれることになるはしないかね？ 優れた人の中にも、必ず劣らざるを得ない人はいる。能力とは、所詮相対的なものだからね」

ジャスミン

「だとすると、すべての人を高い次元で統一しなければなりません。たとえば、究極の遺伝子を持つ1組の男女のクローンで埋め尽くされた世界が理想だということになります」

タッド

「少し違うね。そもそも、究極の遺伝子を持っているのなら、男女の区別なんて必要ない。何と言っても、子どもを作る意味がないからね。究極なら、どのような遺伝子が混ざってもそれは完全性を劣化させる以外の何者でもない。そうになると、子を作るということ自体、意味がないんだ。結論として、男でも女でもない。そんな存在が単一の遺伝子として存在する世界。それこそが理想郷であるということになる。もちろん、子どもなんて作らないよ。ただ、塩基を合成して、クローンを生み出せば足りてしまうからね。ただね、しかしだよ、そんなとても人とは呼べない存在で世界を作って、果た

して人は理想郷を手に入れたと呼べるのだろうか？」

ジャスミン

「それは、みなさまの判断にお任せします」

タッド

「つい語ってしまったが、この頃、社会問題や政治問題を真っ正面からぶつかってくれするような作品が減ってしまったね。作者はそんな作品を目指して生命倫理をテーマにすえたそうだけど、果たしてどう捉えてもらっていることやら」

ジャスミン

「では、12回はこれくらいにしておきます。少々長くなってしまいましたけど、ブルーメンガルテンの中でも大切なことです」

タッド

「今回は13回。不吉な数だが、ゴルゴ13のファンである作者としては一番好きな数でもある。他にも666だとか、616だとか、おかしい数が好きなのが作者だね。まあ、ともかく、次はゼフィランサス・ナンバーズについてお話するようだよ」

ジャスミン

「ヴァーリとゲストはお楽しみです。ガンダム の2次創作にはオリジナル・ガンダムが必要だとお考えの方はぜひ一読してください。参考になるかは保障の限りではありませんけど……」

タッド

「今日はありがとう。私が一方的にまくしたてる形で申し訳ないね」

ジャスミン

「いえ、元々、私の手に負えるお話ではありませんでしたから。それに、私も、プラントの思想性は、いびつなものであることを知っていますから……」

なぜなにSEED第13回くゼフィランサス・ナンバーズ、ある少女の見た夢く

フリージア

「こ、こんにちは。第13回は、Fのヴァーリこと、フリージア・フォクスロットと」

ラウ

「仮面を外して今はサングラス。ラウ・ル・クルーゼがお送りする」

フリージア

「よ、よろしく願いします！」

ラウ

「ああ、よろしく願う。聞けば、君はユニウス・セブンで姉2人を逃がすために命を落としたのだったね？」

フリージア

「はい。それが、1番お父様のためになると教えられてきましたから……」

ラウ

「我々がしていることは、所詮、犠牲を増やしているだけだということがよくわかる。ゼフィランサス・ナンバーズも、結局はその1つにすぎん」

フリージア

「ゼフィランサスに作らせたもの、何ですよね？」

ラウ

「そうだ。ユニウス・セブンからゼフィランサスを連れ出した私たちはゼフィランサスにメビウス・ゼロのようなモビル・アーマーの他、平行してゼフィランサス・ナンバーズの設計を行わせていた。さすがのゼフィランサスにも10年がかりの大仕事だったが、この時得られたデータを利用したのが、GAT-X105ストライクガンダムをはじめとするGATシリーズだ」

フリージア

「結局、実験機の方が強い、なんてお話なんですね」

ラウ

「そもそも、実験機は弱い。何故なら、実験機で見つけた弱点や欠点を改良したものが正式採用機であるからだ。ただし、ゼフィランサスはコストを抑えてだとか、あるもので作るということを大変苦手としている。これは、ゼフィランサスの天才性を示すエピソードだな。はじめから頭の中にこうあるべきという設計図が完成してしまっているため、融通が極端にきかない」

フリージア

「実際、潤沢な資金がなければ、ゼフィランサスは設計を形にすることもできなかったでしょうね」

ラウ

「だから設定上、GAT-01デュエルダガーなどの機体は、ゼフィランサス以外の技術者の作品ということになっている。ガンダムは確かに強力な機体だが、拡張性に乏しく、またあまりに人を選ぶすぎる。とてもではないが量産化に耐えられるものではない。いわばカタログだな。ゼフィランサスがもてる技術をもっとも顕在化しやすいのがモビル・スーツであり、ガンダムだった」

フリージア

「そうして造られたのがゼフィランサス・ナンバーズ、ですね」

ラウ

「そうだ。あくまでも試作機にすぎないZZ-X000Aガンダムオーベルテューレを含めれば4機が存在する。オーベルテューレこそユニコンガンダムをモデルとしているが、他の3機はSEEDの機体を再構築したものだ。ZZ-X300Aフォイエリヒガンダムは、ZGMF-X11Aリジェネレートガンダム。ZZ-X200DAガンダムトロイメントはZGMF-X13プロヴィデンスガンダムを。ZZ-X100GAガンダムシュテュルメントはZGMF-X12AテストAMENTガンダムをイメージしている。もっとも、その機構はだいぶ変わってしまったがな」

フリージア

「フォイエリヒはバック・パックの様子、トロイメントはドラグーン・システムが名前ごと変わってしまいましたね。シュテュルメントは装備が諸々、ですね」

ラウ

「ちなみに、ジェネレーター出力は宇宙世紀における第4世代モデル・スーツをモデルとしている。これくらいなければ、ミノフスキー・クラフト・システムは安定して稼働できない」

フリージア

「どれも強力な機体ですけど、弱点とか、ないんでしょうか？」

ラウ

「いくらでも思いつく。はじめに、パイロットの問題だ。トロイメントやシュテュルメントはともかく、フォイエリヒはドミナントで

もなければとてもではないが扱えたものではない。実質的なエインセルの専用機だ。他にも、整備性が劣悪だ。装甲からネジの1本に至るまで、特殊なものが使用されている。これはパーツの互換性がまるでないことを意味している。同じゼフィランサス・ナンバーズの間でさえ、パーツを工面することができない。もし我々を撃墜したのであれば、まず母艦を狙うべきだろう。そうすれば、性能が徐々に落ちざるを得ないのだからな」

フリージア

「他にも、装甲が推進器を兼ねているなんて設定も問題ですよね？」

ラウ

「作者もそれを懸念して、ハウنز・オブ・ティンダロスなる技術を30話近くかけて発展させていった。こんな技術があると示すことで、被弾率の不自然なほどの低さを説明するつもりでな」

フリージア

「実際、フリーダムガンダムやジャスティスガンダムが被弾するところで機動力が低下したなんて描写もありました」

ラウ

「スラスタ―は無事であるため、別段推進力自体消滅してしむわけではないが、いかなる方向にも推進力を発生させられるという機構は、ハウنز・オブ・ティンダロスの大きな助けとなる」

フリージア

「他にも、それぞれの機体についての弱点があるともお聞きしました」

ラウ

「フォイエリヒの場合は、まずその大きさだ。いくらエインセルだとして、どうしても被弾率を0にはできない。そのため、ビームを弾くという特殊な装甲が与えられた。もともと、フォイエリヒガンダムの場合、ジェネレーター出力確保のために機体が大型化した経緯が存在する。こんなところも、ゼフィランサスらしさだな。また、この装甲は狭義のフェイズシフト・アーマーではないため、実弾で破壊できることも問題だな。そのような点からも、エインセルくらいなものだ、この暴れ馬を扱いきれぬ男はな」

フリージア

「トロイメントは言うまでもなく、接近戦に対する脆さ、ですよね」

ラウ

「何といっても、ビーム・サーベルが搭載されていないからな。ただし、接近戦でも実体剣では意味がない。そうすると、ビームを装備した機体に限定される。わかっていることだとは思うが、トロイメントは対ビーム戦において無類の強さを発揮する。言ってしまうのなら、自分自身を囷にした罠のようなものだ。近づかれる前に落としてみせよう」

フリージア

「続いて、シュテュルメントは……、何か弱点がありましたっけ？」

ラウ

「弱点がないことが弱点だな。それだけ、特徴がないことを意味するからだ。確かに、どのような戦いでも活躍できるが、その反面得意とするフィールドが必ずしも限定されない。ある意味では最も戦いにくいが、最も戦いやすい相手であるとも言えるな」

フリージア

「必ずしも相手のペースで戦う必要がないということですよね？」

ラウ

「そうなるな。無論、それならばどのような手でも通用するかと問われれば、その限りではないがな」

フリージア

「オーベルテューレは……、聞くまでもない気がします……」

ラウ

「接近戦しか行うことができない。作者としても、扱いにはなかなか苦労させられたそうだ」

フリージア

「前は長かったですから、今回はこのくらいでしょうか？」

ラウ

「妥当なところだな。オリジナル・ガンダムを考えるコツと言うか、作者が注意していることを最後に話して終わりにしよう。ガンダムは、あくまでも兵器にすぎない。では、何故量産化されないのか。それはコストであったり、必要性のなさであることが多い。そして、万能の機体ではない」

フリージア

「よって、どのくらい強くしようか、よりも、どんな扱いにくさや弱点を与えようかということに腐心するみたいです」

ラウ

「スーパーロボットはガンダムの領分ではないからな。では、次で最後となる。14回はブルーメンガルテン全体の後書きを語る予定

だそうだ」

フリージア

「司会もゲストも、せっかくですので未定ということ。いよいよ最後です。ここまでお付き合いくださったすべての方に感謝したいと思います」

ラウ

「これは、余談だが、実質2話しか登場していない君のことだが、作者としては急遽司会としてのキャラクター作りに苦労したそうだ」

フリージア

「わかってます。だから、どこいでもいそうなありきたりな話し方に終始しました、私も……」

なぜなにSEED最終回（後書き）

ミルラ

「長かった。1年という時間」

ムウ

「振り返っても、決して短いとは思えさせてはくれない時間だった」

ミルラ

「いよいよ最後の14回。担当しますのは、最後の最後で現れましたMのヴァーリ、ミルラ・マイク」

ムウ

「ネオ・ロアノークとして悪逆非道の限りを尽くした以上、何をさせてもいいだろうとムルタ・アズラエルにされたムウ・ラ・フラガが担当する後書きだ」

ミルラ

「はじめに90万字にもなる長い作品を最後まで読んでいただけたすべてのみなさまに感謝します。90万字という文字数は書きすぎたということも考えれば、反対にもっと書き込むべきだったと思えることもある。小説を書くということは何とも不思議です」

ムウ

「では、簡単だがこの作品の成立背景から語っていこう。このBlumenGartenはドイツ語で花園。英語に直すとFlowerGardenになる。この通り、花の名前を持つ少女たちを組み込むことで成立した作品だといえる」

ミルラ

「最初は外伝ものとして、テレビでは語られなかった、名もなき人々のお話にするつもりでした。最初はエインセル・ハンターが主人公で、アイリス・インディアがヒロイン。ゼフィランサス・ズールなんてラウ・ル・クルーゼに協力する悪役でした」

ムウ

「それが変わったのはガンダムSEEDの設定の考察を初めてからだっただけ。ガンダムSEEDは今更言うまでもないが非常にもったいない設定の使い方をしている。エイプリルフル・クライシスがぞんざいで、生命倫理なんてまともに触れていない」

ミルラ

「また、最初から姉妹の設定であったアイリスとゼフィランサスの間により生命倫理の要素を含めることでヴァーリが誕生しました。そうしている内に本編の話にそったものになってしまうことになりました」

ムウ

「はじめは既存のキャラクターを弄くることはしないようにしていたそうだが、ムウとラウがもし幼い頃友として出会っていれば、フレイが救われていたなら。そんな妄想を組み込む内に既存のキャラクターの性質も大きく変わった。まあ、展開が変われば経験も違う。それなら性格が原作と異なることも仕方がない」

ミルラ

「ラクス・クラインをヴァーリの1人にしてしまったり、ただキラの友人というだけでは設定が弱いということでアスランをドミナントにしたり。原作通りのカップリングなんてツールとミリアリアくらしいかもしれませんでした」

ムウ

「それでもまだキラは戦いに巻き込まれただけの普通の少年だったが、それがあんなにゼフィランサスは僕のすべてだと公言してはばからない肉食系になった理由は2つだ」

ミルラ

「まず、偶然ガンダムに乗り込んだ少年が偶然世界でただ1人のスーパー・コーディネーターだったというのはあまりにご都合主義がきついと考えたこと。まあ、スーパー・コーディネーターという設定自体、後付け感がきついような気がします」

ムウ

「続いて生命倫理をテーマとした作品の1つの答えを示すためだ。作者は生命倫理を小難しく設定に盛り込んだが、だったらこうしろという答えは示せていない。答えなんかないからだ」

ミルラ

「たとえば脳死臓器移植。あなたはこれに賛成ですか。もし、あなたの周りに臓器移植しなければ助からない人がいるのだとすれば、あなたはきっと全面的に賛成したいと考えることでしょう。ですが、仮に、あなたの大切な人が脳死状態であると言われたらどうしますか？」

ムウ

「このまま治療を続ければ、もしかしたら助かるかもしれない。現在の脳死判定は専門家からも疑問の声が上がるほど曖昧なものだ。特に、脳を再生する力が強い子どもの場合、大人よりも重度の脳不全からでも回復できる可能性が高い。これまで、子どもの臓器移植が禁止されていた理由だな。まあ、日本でも解禁されたがな」

ミルラ

「もしあなたの身近な子どもが脳不全と判定されたら、きっとあなたは悩むことでしょう。この人には助かってもらいたい。たとえば、そのことで臓器移植を受けられない人がいたとしても」

ムウ

「絶対に正しい答えなんてものはないんだよ。結局、その人の立場や経験がものの優劣や善悪を決めることになる。キラは、ただゼフィランサスという愛する人を救いたいと必死だった。それは場合によっては貶されるべき行動を招きもした。それでも、大切な人を救いたいという思いだけは否定できないはずだ」

ミルラ

「結局人は、目の前の命に必死になるしかない。それが、生命倫理を語る上での1つの答えです」

ムウ

「キラは、それを示してくれたんだ。あいつにとって、ゼフィランサスを救うということを悩むということは犠牲になってくれたユツカの死の意味に疑問を挟むということにもなってしまう。そんなことだけは決してできなかったんだ」

ミルラ

「そうでなかったとしても、脳死臓器移植は時に大変危険は思想を招きます。脳死、いえ、脳不全患者を社会的に役に立たない人であると考えた場合、そこには社会的に無用な人物を犠牲に、社会にとって有益な人物を救うべきだという思想が内在するからです」

ムウ

「このままほうっておいてもこの人は死ぬ。だったら臓器だけでも人の役に立ててほしい。酷な言い方だが、こんな意見は大変危険だ」

ミルラ

「人は遅かれ早かれいずれ死にます。そしてそれにどのような価値を見いだすかは社会が勝手に決めていいことではありません」

ムウ

「作中でも話したが、少し怖い話をしよう。たとえば、今は脳死患者だけだろう。ただし、こうはならないか？ 痴呆老人はもう人としての尊厳を取り戻せないばかりか、放っておけばいずれ死ぬ。脳死患者と同じだ。せめて臓器となって社会のために役立てるべきだ。ほかに、知的障害者は人として生まれてくることができなかつた。このまま生かしておいても意味はない。殺して臓器をとるべきだ」

ミルラ

「そんな馬鹿なことにはならない。少なくとも、生命倫理学者はそうは考えていない人も少なくありません。脳死臓器移植に対する生命倫理からの反対が根強いのはそのためです。どこかで止めなければ、倫理と際限なく崩壊するものだからです」

ムウ

「江戸時代なんか死体を切り刻むことさえ恐れ多いとされていた。ところが今はどうだ。脳死患者みたいなまだ血の通った心臓さえ動いているような人を切り刻んで臓器を生きたままえぐり出すことに抵抗を感じている人は少ないだろ。人の意識ってものは変わるものだ。そして、それにどこで歯止めをかけるかが生命倫理の役目だと言ふことになる」

ミルラ

「ガンダムS E E Dにおけるジョージ・グレンはそういう意味で危険な存在でした。徐々に進むべき意識の変化を、相手方の反論を許さない形で一気に進めてしまったのです。さらにコーディネーターという選民思想は、必ず弱者の排斥に繋がらざるを得ません」

ムウ

「日本でも現在は母体保護法と名前が変わったが、障害者の墮胎手術を広い範囲で認める法律というものが存在した。ハンセン病の患者に断種手術を行っていたなんて事実もある。異常者と決めつけ、それを排斥しようとしたんだ」

ミルラ

「コーディネーターによって作られた国は、そんな選民思想を助長させる形でしか存在できません。障害者や彼らの言うところの遺伝子の欠陥を持つ人間を認めるということは、そもそもコーディネーターを作るというこの意味を否定してしまうからです」

ムウ

「反対に、無能は無能でいいんじゃないか、俺たちは優れたコーディネーターでいたいけどな。なんて言い出すようだと、結局コーディネーター至上主義が醸成されてしまう」

ミルラ

「プラントが妙に社会保障に乏しい閉鎖的な国として描かれているのはこのような思想性を考慮した結果です。少なくとも、持つものと持たざるものの理屈でコーディネーターとナチュラルの対立を説明することはできません」

ムウ

「だからこそ、ブルー・コスモスとムルタ・アズラエルがやたらと

悪役に描かれたんだろうな。そうでもなければ、クライン派やキラたちに正当性は一切ないからな。結局、キラたちが正義だとは証明できなくても、敵が悪でさえあればいい」

ミルラ

「こんな単純化された勧善懲悪ものにしてしまったため、ガンダムSEEDは単にフリーダムが強いだけのお話になってしまったところがあります」

ムウ

「メッセージ性として、単に強い奴の言っていることが一番正しいということだけだった。キラはブルー・コスモスに対しても、プラントに対しても代替案を示すことはなかった。とりあえず、お前たちは間違っていると言っては圧倒的な性能で逆らうものを皆殺しにしていっただけでな」

ミルラ

「ブルーメンガルテンではそんなところも考慮してクライン派を、シーゲル・クラインを野心家に、ラクス・クラインを冷徹な戦略家として描きました」

ムウ

「そして、ブルー・コスモスの理念を前面に出した。ほんの少し設定を厳格に適用するだけで、正義や悪なんでものは簡単に裏返ってしまう。それが世界ってもんだ。皆が正しいか、でなけりゃ、皆が間違っている」

ミルラ

「作中でラクスお姉さまが語っているように、正義と別の正義の戦い、でなければ悪と悪の争い」

ムウ

「そういう意味において、この作品には悪はいても悪役はいない。俺たちムルタ・アズラエルのしたことは許されることじゃない。しかし、作者としてはとりあえず排除さえすればいいだけの悪役にもしなかった」

ミルラ

「単に強い人が勝ったというだけの作品にはしたくなかったということみたいです」

ムウ

「世界には色々な人がいてこそ世界だからな。気に入らない奴をみんな排除して、そうすることで理想郷が築けるといふなら、無人島で好きな奴だけ連れて住めばいい」

ミルラ

「ただ、その反面敵役の不在を招いてしまいましたね」

ムウ

「まあな。昨今のガンダムにあるような主人公の正当性を強烈に証明してくれる敵というものがいなかった。戦闘シーンも盛り上がりにかけてしまった感がある。シーゲル・クラインにしても、キラとの対立はゼフィランサスの扱いだけだったしな」

ミルラ

「実際作者は、このブルーメンガルテンを、婿と舅の戦いだと考えているみたいですよ。お父さん、娘さんとの結婚を認めてください」

ムウ

「駄目だ。娘は父にこそ尽くすものだ。お前のようにこの馬の骨とも知らない若造に、娘との交際を認めることはできない。どうしてもというなら、俺を倒してからにしろ」

ミルラ

「上等だ。……結局、こんな話でしたよね」

ムウ

「まあ、5、60話でガンダムSEEDを描ききれるとは考えていなかったからな。結局、キラとゼフィランサスのボーイ・ミーツ・ガールものとしてまとめることにしたんだそうだ」

ミルラ

「一応Destiny編も考えてるんですね？」

ムウ

「ああ。あともう4、50話あればガンダムSEED完結させられるからな。ただ、作者のことだ。また1年がかりの作品を書いてしまいそうで怖いそうだ。一応、大賞応募作も書きたいみたいだしな」

ミルラ

「いつそアンケートでもとります？」

ムウ

「それはしないそうだ。作者の予想では、おそらく反応は3者に分かれる。反対派。これはもう書かなくていいと否定的な意見をもつ人たちだ。次に、無関心派。書くなら書いてもいいけど、別に関心はない。そして、中道派。書くなら読むけど、どうしても読みたいというほどではない」

ミルラ

「さらに言うなら、大半は無関心派でしょうね。そして、3者に共通しているのは、特にアクションを起こさないということ。アンケートなんてとっても、きつと寂しい結果になると思います」

ムウ

「正直、ブルーマンガルテンをアニメ化するとしたら、6時台では早すぎる。子どもが理解できるかという危険性も高ければ、ある程度社会をわかった人でないと意味していることを理解してもらえない危険性もある。しかし、深夜アニメは別の意味で子どもには見せられないものが多いと聞くから、8時だとか9時だな」

ミルラ

「そんな時間に放映しているアニメなんて聞きませんよ」

ムウ

「結局、万人受けする作品じゃないってことだ。問題は、それと面白い作品であるかは別問題だということだな。作者は設定の作り込みでは自信があるが、果たしてそれが娯楽作品としての鑑賞に耐えられるものであるかはわからないんだそうだ」

ミルラ

「実際、同時連載しているモンスターハンターの2次創作はまったくふりませんものね」

ムウ

「元々5部作なんて順番通りでなければ読みにくい作品形式にしていることも問題なんだが、現実感を出そうとするあまり、キャラクターの魅力が乏しいことも一因だろうな」

ミルラ

「では、Destiny編は？」

ムウ

「書くにしてもモンスターハンターを終わらせてからだな。同時執筆は大変だったことがわかったし、人気がないからと途中で投げ出しているのはプロだけだ。素人は、人気なんか気にしなくてもいいんだから、公開した以上は最後まで書き上げなければならない」

ミルラ

「もしDestiny編を書くことになるなら、主人公はシン・アスカを予定しているそうですね」

ムウ

「もちろんだ。原作なんざ参考程度。それが作者の信条というか、性癖だからな」

ミルラ

「ただ、困っている問題もあるそうですね」

ムウ

「ああ、ストライクフリーダムの扱いが問題だ。何せ、フリーダムをバスターの後継機にしてしまったからな。早い話が、名前をバスターフリーダムに変える必要がある。打ち砕く自由だとか、破壊の自由というのは、どこのテロリストだという話になる」

ミルラ

「でも、ストライクフリーダムも正確に訳そうとすると自由を攻撃せよ、みたいなものになると聞きます。またこれは作者の友人が話していたことですが、フリーダムには自由の他、し放題という意味

もあるそうです。また、ストライクは撃つだとか発射するだとか言う意味も。繋ぎ合わせると、撃ち放題という意味になるとか」

ムウ

「ああ、あの腹にまで余計なビームつけただけはあるネーミングだな。おまけに、ニュータイプ適性のないキラにドラグーンを使わせるためにわざわざ作られたようなスーパー・ドラグーンなんてものもあったな」

ミルラ

「もうこの際、機体を大きく設定を変えてしまおうと考えているようです。たとえば、インパルスガンダムを量産機にしてしまったり」

ムウ

「おいおい、いきなりシンの扱いが悪くなっているみたいだが、大丈夫か？」

ミルラ

「さあ、どうでしょう」

ムウ

「まあ、はじめからかっこいいロボットや主人公がただ暴れまわるだけの作品が読みたいやつが読む小説じゃないだろうからな。少しくらい仕出かしてもいいか。どうぜ、俺の出番はないだろうからな」

ミルラ

「でも、作者も自慢したいことがあるそうですよ。なんと、キーワード検索で、生命倫理と入力すると、群を抜いた人気作だと言うことです」

ムウ

「なんと言っても、にじふあんじゃ、生命倫理なんてキーワード入ってるの、BlumenGartenだけだからな。以前、作者が調べた時にはな」

ミルラ

「ガンダムSEEDは遺伝子操作がテーマの中心ですから、きっと2次創作なんて書く人はみんな独自の生命倫理の観点を使ってお話を組んでいるんだろうなと勝手に想像していたようです。だから、自分が究極のマイノリティだと気づいた時の失望感なんていったら、なかったみたいです」

ムウ

「そもそも2次創作なんて向いてないんだろうな。あまりに設定を作りすぎる。これでは1.5次創作どころかまったく別物になってしまう危険性もあるくらいだ」

ミルラ

「そんなところもあって、Destiny編はしばらく考えたいようです」

ムウ

「SEED編は設定を変えすぎて、さらにDestiny編はそれを土台にした作品になる。90万字を超えるような作品を読んではくればわからないような作品の続編だろ。正直、モンスターハンターと同じで分母を切り捨てた作品になる以上、読者数はかなり限られる」

ミルラ

「おまけにDestiny編もあわせれば全体で160万字にもな

ってしまいます。作者自身、アニメの構成を意識して書いていたそうですから、これは小説というよりも、脚本に近いのかもしれない」

ムウ

「そもそも登場人物が多すぎるんだよ。オリジナル・キャラクターだけで20を超える。全員合わせれば100を超えるだろ。Destiny編では、少しは自重すべきだな。あくまでも書くのならの話だが」

ミルラ

「ちなみに、ブルーメンガルテンはもう1つランキング・トップがあります。言うまでもありませんが、文字数の多さに関してはガンダム2次創作の中で2位に50万字くらいの差をつけて首位です。ただ、決して人気作という訳ではありません。そのことから、非常にコスト・パフォーマンスの悪い作品になっています」

ムウ

「コスト・オフオーマンズの悪さ。ガンダムと同じだと実は密かに喜んでいるらしい」

ミルラ

「単に量産が効かなくてコストばかりがかさむ、ザクレロみたいな作品ですけど」

ムウ

「さて、落ちがついたな。これで終わるか」

ミルラ

「いいのでしょうか。こんな終わり方で。たとえば、どうして原作

のこのキャラクターがこんな立場や性格として表現されたのかだとか、語ってもいいとは思いますが」

ムウ

「何人いると思ってるんだ。それに、人気投票で投票してもらったキャラクターにはコメントとして簡単に書いておくつもりだ。この設定や、こんなエピソードからこのキャラクターのこんな面を強調したとかな。まあ、いないとは思うが、どうしても気になることがある場合には気兼ねせずメッセージでも送ってくれ」

ミルラ

「ちなみに、人気投票の集計は、11月のはじめに投稿することが決定しました。同時に、人気投票を2010年10月の間受け付けます。1人5票で3人以上のキャラクターに投票するシステムは変わっていません」

ムウ

「まあ、本編が完結したところで、最後の足掻きだな。ちなみに、もうある程度の投票人数は確保されているため、投稿そのものは決定している。少しでも盛り上げたいから、できれば協力してもらいたい」

ミルラ

「では、こんなものでしょうか」

ムウ

「こんなものだな。BlumenGartenはこれにて完結する。一応、後から設定資料集の方に人気投票の集計結果を載せるが、それはおまけみたいなものだからな」

ミルラ

「お付き合いいただけました皆様、ありがとうございました。とりあえず、作者は連載している小説がある間はまだこのサイトにいるはずですので、感想はいつでも募集しています」

ムウ

「次回予告をしなくてもいいのは初めてだな。本当に終わるんだと教えてくれる」

ミルラ

「では、皆様さようなら。これにてBlumenGartenは終了です。後藤先生の次回作にご期待ください」

ムウ

「その言い方はやめてくれ。まるで、打ち切りにあったみただろ……」

及ばなかった者たち／人気投票順位外／（前書き）

複数票投票はしてもらえたけれど、3位までに入ることとは出来な
かった人の簡単な紹介です。

及ばなかった者たち／人気投票順位外

エインセル・ハンター

オリジナル・キャラクター唯一の男性で、如何にもなキャラクターです。実際、最後まで理解しがたい人だとコメントいただいています。

美形で実力者で慇懃無礼。ラスボスはいいつかと思わせ、親愛なる読者の方々を大いに混乱させるとともに、ラウ・ル・クルーゼとムウ・ラ・フラガの関係を捏造するためのキャラクターでした。

今後、まだプラントに命をないがしろにする思想ある限り、戦い続けることでしょう。

エピメディウム・エコー

地味ながらも、何故か要所所で出番のあったキャラクターです。こんなこと書いてよいものか、とにかく悩むのですが、ボーイッシュという属性に危うく目覚めかけたというコメントをいただきました。

オーブの行動を私なりに考察した結果のキャラクターです。個人的にこちらの方が、納得できます。

オーブの姫君として残っているため、オーブの再建に尽力することでしょう。

カガリ・ユラ・アスハ

原作に比べると強いよ、さすがエピメディウムのお姉さん、というコメントはいただきませんでした。とにかく、原作ほど弱さのないところが印象的であったようです。

原作のカガリはどうも周りの人に頼りすぎるところがあると、それなら本人を強くしてしまえばいいと捏造した結果、強すぎるカガリになってしまいました。

きっと、今後も拔群の行動力のもと、オーブのためにいろいろと駆けずり回ることでしょう。

カズイ・バスカーク

要約すると、出番が少ないにも関わらず、印象的な場面をもっているため立派な人物という印象が固定されたというコメントをいただきました。

原作ではあまりに地味であったことと、キラ・ヤマトという人物の行動理念を明確にするために、あのような死に様を見せることとなりました。

明示はされていませんでしたが、残念なことにアルテミスで命を落としています。今後登場する予定はありません。

キラ・ヤマト

変わりすぎて戸惑った。それでも、それだけ印象的だというコメントに落ち着きます。

個人的にはキラの女にだらしないようで清純で、趣味で戦争をしているようで覚悟を秘めた戦士であるという性質を取捨選択して作ったキャラクターであるため、そんなに変えたつもりはなかったのですが……。

ゼフィランサスと、胸が焼けるような甘い新婚生活を営んでいることでしょう。

コートニー・ヒエロニムス

落ち着いた雰囲気と、主であるデンドロビウムを気遣う様子がよかったとのコメントです。

デンドロビウムのようなうら若き乙女……を1人で戦場を出歩かせることは不自然と考え、側近として設定されたキャラクターでした。最後の戦闘、実は投票していただけたことへのある種サービスとして書きました。

今後も、デンドロビウムの側近としてその傍にすることでしょう。

ゼフィランサス・ズール

冷たいようで、暖かいところもある。そんなコメントをいただきながらも、何故か誰も服装について取り上げてはくれませんでした。どうして地球軍とザフト軍の両方に同じ名前の兵器があるんだろう。そうか、きっと同じ技術者が造ったんだ。そんな考えから生まれたキャラクターで、初めはあんなに恋愛要素の強い人ではありませんでした。

キラとの新婚生活が始まることでしょう。以上。

ヒメノカリス・ホテル

頂いたコメントの中には、妙に自分が書いている小説のキャラクターと似ていて気になったというものがありました。

正直囁ませ犬です。適度な強さの敵役で、お世話になりました。また、エインセルがヴァーリのお父様であるというミスリードも張ってもらいました。

お父様のそばにいる。それ以外の選択肢があるとは思えません。

プレア・レヴェリー

ゼフィランサスとの関係がボーイ・ミーツ・ガールのようによかったとか、そんな関連のコメントでした。

ゼフィランサスをうまくオーブに誘導して、かつ核動力搭載機のお披露目の役割を兼ねる。実は、オーブにまつわるこれらのエピソードはなかなかのお気に入りです。

残念ながら死亡してしまいましたが、もしかするとあるご夫妻の子どもの名前になるかもしれません。

及ばなかった者たち／人気投票順位外／（後書き）

やはり、既存だけで100人近く。オリジナル・キャラクターを
合わせると120名ほどというのが、やはり多すぎた気がします。
結構、死票も出ましたし。

高みを行くものゝ人気投票順位発表ゝ（前書き）

順位発表です。なんと1位が2人います。何とも寓意的なペアで、私としては少々面食らっていました。おまけに3位はおじさん。このBlumenGartenは、やはり少々特殊な作品になってしまったようです。

高みを行くものゝ人気投票順位発表

1位…アイリス・インディア

一般人その1です。ヴァーリでありながらも、特筆した能力なんてない。それでも周りの人に大切にされ、回りの人を大切にすることを忘れなかった姿勢が評価していただけたようです。

オリジナル・キャラクターでありながら、容姿がラクスとまったく同じという特殊なキャラクターとして登場したアイリスは、元々はヒロインとして設定されていましたが、テーマが生命倫理に決まり、徐々に設定が組みあがっていくうちに、ゼフィランサス・ズールにヒロインの座を奪われてしまいました。ただ、何も知らない、何も知らないからこそごく普通の人として周りの人を気遣うという人物像は何もかわっていません。ヴァーリやドミナントの事情を知る人は原則的に淡白です。どこか諦めと妥協をすでに処世術として身につけており、問題に対しても激情を明らかにすることはまずありません。アイリスには、そんな器用さがありませんでした。

私がアイリスに期待した役割は、実はフレイ・アルスターの救済というものでした。原作ではフレイはキラ・ヤマトとの関係を通じて、憎しみを乗り越えてナチュラルとコーディネーターの架け橋となる女性となるのかと思いきや、単に溝の深さを強調するだけのキャラクターに終わってしまいました。私がガンダムSEEDの2次創作を考えた際、まず考えたのがフレイのことでした。ただし、私はブルー・コスモスの3幹部を前面に出すことを当初から想定していましたので、ナチュラルとコーディネーターの対立の理論的な側面を表現する材料は十分に用意しているつもりでした。そのため、対立ということよりも、あくまでも戦争に家族を奪われて、その結果誰にも心を開けなくなってしまった少女と、それを気遣う友人という間柄にするようお話を展開しました。実際、コーディネーターを憎むようなフレイの発言は、あくまでも人種の対立ではなく、単

にプラントという国がコーディネーターによって作られていることを強調することが目的でした。実際、アイリスと和解した後は、フレイはコーディネーター蔑視の発言を行ってはいません。このように、アイリスはサブ・キャラクターとしての役割を強く求められたキャラクターでした。記憶を失ったヴァーリとしてのヴァーリという設定を徐々に紹介する役割もありました。残念ながら姉妹の関係にあるはずのラクス・クラインとはあまり接触を持たせることができませんでしたが、これはDestiny編の伏線とでも言うことにしておきます。

実はアイリス、プロットを友人に見せていた際にも一番人気のキャラクターでした。個人的には地味で、あまり目立った活躍をしない人物になってしまったなと考えていたのですが、何故かそれは不動でした。フレイとの友情など、比較的現実的な感性の持ち主で、等身大のキャラクターということが人気を集めたようです。ただ、友人の中には他のキャラクターがあまりに濃いというかくどいので、アイリスはとても落ち着けると言われたことがあります。やはり、思想がちがちであるキャラクターも必要ですが、息抜きが出来るような存在も必要だということですね。

アイリスは、一応所属が大西洋連邦軍に戻ったはずですが、恐らく軍に残ることはないでしょう。ただ、何をするにしても、フレイとの友情が続き、正義でもなければ悪でもない、そんな思想性に囚われることのない心で人に接していくことでしょう。

1位…ディアッカ・エルスマン

一般市民その2です。いただいたコメントでは、周りに振り回されていることに好感を抱いている方や、比較的普通の感性の持ち主ながらドミナントやヴァーリたちの間で必死に食らいつこうとする姿を評価いただけただけようです。

私自身原作を意識してはおらず、そのエピソードは大幅に手が加えられています。しかし、各エピソードの性質が大変原作に近く、手を加えたはずなのにまるで枠でも用意されているかのように同じ立場に収まってしまったという不思議なキャラクターです。原作でも本人が言っていたように、あまり物語の根幹に触れるような設定がなく、ストーリー上の都合から肉付けしていった結果なのですが、思いのほか出番が多くなってしまいました。

また、ディアツカは一般的な人として、遺伝子操作という非日常的なお話に、読者の感性に近い存在としてその落差を埋めてもらうための存在でした。そして、同時に、もう1人の主人公でもあります。このBlumenGartenでは、主人公であるキラ・ヤマトはとにかく悩みません。どの道を選ぶか考えることはあっても、目的がはっきりとしているからです。ただ、舞台は戦争です。そこには必ず人の死があり、死は誰かにとっての喪失を意味します。ただ強者が弱者を蹂躪していくだけの話にしないためには、命というものに青臭いまでに向き合ってくれる存在を必要としました。大抵の場合、それは主人公の役目です。しかし、キラは迷うことが許されず、また戦争のプロとして設定されています。そのため、キラが担うべき役割を、ディアツカに行ってもらったという経緯がありました。また、戦争とはシーソー・ゲームであり、どちらかが勝てば片方が悲惨な状況に陥ってしまいます。当然そのことも表現したかったのですが、やはり、キラにはできません。これは、アスラン・ザラに担ってもらうことにしました。キラという存在は、生命倫理の答えになっていない答え、ただ、自分の目の前にある命にひたむきになるしかないという話を得るために必要でした。明確な答えなどない。それでも物語として完結させなければならない。そのため、キラにはただゼフィランサス・ズールという1つの命にひたむきであって、この2人の物語としてBlumenGartenを完結させる必要があったのです。そのためにどうしても切り離さなければならなかった迷いを受け持ってくれたアスランとディアツカ。

このBlumen Gartenはこの3人の主人公で成り立っている作品でした。

さらにジャスミン・ジュリエッタとの別れには、私が考えるプラントがどのように存在せざるを得ないかという設定を表現する上で欠かすことのできないエピソードの1つです。結果として、ディアツカには悲劇的な別れと、自らも重い障害を負うという設定を与えてしまいましたが、ディアツカはキラ、アスランたちの中で最も悩みぬいた末、答えを導き出した存在でもあります。アイリス・インディアにラクス・クラインの存在を伝えたこと、フレイ・アルスターとのトラブルや、キラたちがザフト軍に加わる切っ掛けを作ってくれたことなど、父親であるタッド・エルスマン議員とともに大きな役割を果たしてくれました。正直な話、まさか1位になるとは微塵も考えてはいませんでした、ある意味では3人の主人公の中で最も主人公らしい主人公であったかもしれません。

ヤキン・ドゥーエの戦闘では左半身に重篤な傷を受けたディアツカですが、この戦争を通して得た経験や体験、仲間たちのことは決して無駄ではないはずです。プラントで差別される障害者として、それでも国に残ることを決めたディアツカは、これからも悩みに全力でぶつかり、挑んでいくことでしょう。

3位…モーガン・シュバリエ

ダーク・ホース筆頭です。皆さんの感想として、復讐が動機でありながら、必ずしもそれにこだわることなく、アスラン・ザラを導いた大人、職業軍人であるという点が評価されました。

原作のキャラクターの名前と姿だけ借りてほとんどオリジナル同然のキャラクターを出そうと企み始めたのは、ちょうどモーガン・シュバリエが登場した辺りからだと思います。この頃、アスランがただ物知り顔で優秀なパイロットという以上の設定が登場していな

かったため、その思想性を明確にする必要があった他、エイプリル・フル・クライシスの惨状を明らかにするために必要とされていた。アスランは主人公の1人として戦争のあり方を見つめてもらいたかった。また、プラントという国の存在の仕方を後々に展開していくためにも、なるべく早い段階から、単なる被害者ではないということを明示しておく必要がありました。モーガンとはそんなことが求められて登場した人物でした。当初は、地球軍側のモーガンがキラ・ヤマトにハウنز・オブ・ティンダロスを授け、ザフトのアンドリュー・バルトフェルドがアスランの世話を見る予定でした。ただ、人間関係が交差した方が面白いだろうと、敵味方入り乱れるお話になりました。特にキンバライド基地での決戦は中盤最大の見せ場で、登場人物の多さからプロットの作成に苦労した記憶があるとともに思い入れのある場面です。また、あくまでも中盤であるため、準備のための場所として、モーガンの出番は多いものでした。他にも、ハウنز・オブ・ティンダロスという設定は、弱いガンダムを登場させるわけにはいかない。しかし、ガンダムは超兵器では決していないという狭間の中で、ガンダムが量産機に対して圧倒的なアドバンテージを確保するための理由というか、言い訳として用意した設定ですが、現実的には人間の限界を超えるのではないかというほど高難度の技です。そのため、30話ほどもかけてそれをどのようなものか説明するとともに、徐々に説得力を醸成するための準備をモーガンには担ってもらったりもしました。

モーガンは、プラントのテロ行為によって肉親をうしなった人物ですが、原作には不思議なほどそのような人物が登場しません。設定が確かでないため、ニュートロン・ジャマー降下によってどれほどの被害が出たのかははっきりとしないのですが、少なくとも血のバレンタインよりも多いはずです。さらにDestinyではユニウス・セブンが落下して都市が消し飛ぶなどしています。それでもなお、コーディネーターによるテロの被害者は一向に存在しません。これは、ブルー・コスモスを単純な悪役に設定するために不都合な

存在として消されてしまったのだと思われますが、ブルー・コスモスの活動とその理念を考察してみると、それは少なくとも個人の恨み以上の動機が現れるようになります。また、プラントのあり方もとてもではありませんが、理想郷足りえません。そういう意味において、モーガンというキャラクターは、今思えば私の考察したガンダムSEEDというものを象徴するキャラクターであつたように思われます。肉体改造は非人間的でも、遺伝子操作は優れた人間を作り出すことができる。ナチュラルのしていることは卑怯でも、コーディネーターは生きるために仕方がないと涙を吞んでいる。持たざる者の妬みと、持つ者へのいわれのない反発では、ガンダムSEEDは説明できません。モーガンというキャラクターから、私のガンダムSEEDが本当の意味で始まったような気さえしています。

ただ、せいぜい10話程度しか登場していない、それも美少年でもなければ美少女でもないような普通のおじさんがまさか上位に食い込むとは、私は一切予想していませんでした。恐らく多くの人にとってそのようなのではないかと。原作ではキラやアスランなど若い人が人気を集めていましたので、アイリス辺りは入るかもしれないけれど、他は誰が入るかはわかりませんでした。ただ、恐らくキラやゼフィランサスといったメインのキャラクターは入らないだろうと漠然と考えていましたが、案の定。もう1度言いますが、モーガンが入るとは予想外でした。

モーガンは戦闘によって死亡してしまいましたが、その志はアスランに大きな影響を与えました。そのことは、アスランが生きている限り、彼の心に残り続けることでしょう。それをアスランがどうのように考え、受け入れていくのかは、別のお話です。

高みを行くものゝ人気投票順位発表ゝ（後書き）

これで設定資料集は終わりです。長らくありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4912j/>

機動戦士ガンダム SEED ～BlumenGarten～設定資料集

2011年5月7日12時27分発行